

大隅肝屬郡方言集

818-Z37



1200500753469

818

3

田國男編
村傳四著

納本

全 國 方 言 集 二



始



納本

295



818
Z3



柳田國男編・野村傳四著

大隅
肝
屬郡方言集

中央公論社版



二・集言方國全

149
149

肝屬郡方言集に題す

野村さんの郷里、大隅肝屬郡高山（カウヤマ）の故事遺迹を記述した一巻の寫本を、曾て鹿兒島の圖書館で讀んだことがある。書名は『高山風土記』だつたかと思ふが確かでない。其際に始めて學んだことは、高山地方の文化の淵源が遠く又久しく、今はまだ記傳の外に在る有明灣の貿易と根強い關係をもつものらしいといふ點であつた。中古に肝付氏一門の武力が之に由つて養はれ、彼等も亦熱心にこの交通を庇護したことは明かだが、さういふ必要の起るよりも前から、既に高山はよく開けて富みも榮えもした土地であつたことだけは、幾つとも無い近年の發掘品によつて證明することが出来る様である。そのなつかしい昔の世の文化はどうなつたか。果してすべて皆土の底になつて居るか。人は無意識にも遠い親々の生活の痕を、少しでも身に着けては生れて來ぬものであらうか。といつた様な豫ての疑ひが、特にこの方言集の我々に對する印象を濃くして居る。肝付氏衰へて四百年、商業の中心は内灣に移り、高山内之浦は在郷となり、郷士の入れ替へは又薩藩の重要な政策でもあつた。野村さん方の御先祖も、必ず城下の誇りと文化とを携へて新たに入つて來ら

れたことと想像するが、しかも土地にも亦娘があり戀があり笑ひがあり、更にさまざまの自然の感覺を運ぶべく、耳馴れたる色々の言葉づかひがあつた筈である。それがどれ程まで憐み無く追拂はれ、もしくはしをくとして去り行く後影を、なほ暫くは見送られたかといふことは、今も生きて居る若干の土語以外に、何一つ之を記録したものが無いのである。いはゆる薩藩の土風は、段階も無く變化も無く、縣を一團としてたゞ數十の人々に代表せしめ得るやうな、單純至極なものであつたらうか。それに然りと答へ得る爲には、まだ我々は其中のたつた一つの場合、高山の方言集をさへ精讀して見る機會をもたなかつたのである。

三十何年か以前、私は鹿籠の枕崎に滞在中、大隅から來て居る御醫者さんが、土地の人たちと議論をするのを聽いて、雙方の言葉のあまりにちがつて居るのに驚いたことがある。掛宿郡出身の福里榮三君なども、朝晩見て育つた對岸半島の物言ひが、是ほどまで自分の村とちがつて居たかといふことを最近になつて實驗したと言つて居る。同じ一つづきの甌島の一群でも、北と南の兩端が異なるだけで無く、相鄰する村々の單語までが、わざとでは無いかと思ふほど變つて居る。是は素より士分の家と、それと接觸しようと思ふ農漁民の家と、地位境涯の差別からも來て居るだらうが、とにかくこの縣のやうに、細かい方言の分れて居る地方は珍らしいのである。其原因も私はやゝ推測することが出来る。鹿兒島市の言葉も階級、職業によつて言ひかへられるほどに違つて居るさうだが、大體に言葉がよく洗練せられ、たゞ發音の長短緩急が、あまりにも中央と一致せぬといふ

のみで、敬語の如きは他の都會よりもずつと發達して居る。乃ちこの土地のは古いまゝではなくて、何度とも無く改良を加へられて居るのである。その次々の新らしい波紋が、到り到らぬ隅々があつても不思議は無い。鄰縣以北には猶存するバツテン又はバツチェンが、ドンカラに變つたといふやうな例は他にも多からう。何れが優るといふやうなことは外の者には言へないが、少くとも遠くの村里にある方が古い分の残りで、それを後になつて少しづつ改めて行つたのは、城下の人たちだつたといふことは言へると思ふ。今まで縣の方言集が、一向に地域の差異を明かにしなかつたのは、多分は鹿兒島の語は昔から此通りで改良が無く、田舎はそれを眞似そこなひ又は誤り傳へて居るのだと信じた爲だらうが、さういふ氣づかひは萬々無い。現に一方は今でも次々と改良し、又他の一方は可なり上手にそれを眞似ようとして居るのである。

如何なる條件のもとに土地の方言が分立し、又は統一するかといふことは、寧ろ斯ういふ小區域内の現象によつて、實驗する方がわかり易いかと思ふ。それで遠からずもう一つか二つ、同じ鹿兒島縣のやゝ離れた片隅の方言を集めて、異同を比較して見たいと思つて居るのだが、さう謂つて居るうちにもどしどしと前の言葉は消える。印刷の仕事はそれよりも速力が遅い。いつになつたら我が志は遂げられるか、氣のもめる話である。この肝屬郡方言集なども、自分たちが出版を決意してから、もう七八年にもなるやうに思ふ。期限も付けない私の引受に、信賴して下されたことも忝けないが、更に野村さんは其忍耐の時間を利用して、三度までこの草稿を書き直されたのである。

一番よくなつたと思ふ點は、最初はこの集を故郷の若い人々に見せて、今まで何の氣なしに使つて居た在所の言葉でも、中には所謂標準語よりも古く、由緒傳來のたしかなものがあるから、粗末にしてはならぬと教へることに力を注がれたかと思ふのが、後には段々と是を一般の用に立て、弘く將來の日本語を良くしようとする者の参考に供せんと努められるやうになつたことである。誰しも年を取ると、先づ幼い頃の言語を想ひ起し、それを又最も悦んで聴く人たちの前に提供したくなるのも自然であるが、たつたそれだけでは學問としての意義が弱い。殊に或言葉が中世以來の文藝に用ゐられて居るといふことは、好話柄であるが、それを強調して居ると残りのもの、即ち一度も文人の筆に觸れなかつた分が、別に新たに出來たといふ證據も無いのに、何だか皆新らしいもの如く推斷せられさうな懸念がある。古い言葉だつて必要があれば我々は棄てるが、單に記録に痕跡が残つて居ないといふだけでは言葉のぬうちといふものを低く見るわけには行かぬ。古い記録の存することが偶然である如く、それに我々が心づくことも偶然であつて、是は追々と積み貯へて行く他は無い。一方は今あつてやがて無くなりさうな事實なのだから、急いで有りのまゝを採集して置かねばならぬ。二つは別の事だと私なども考へて居たのである。野村さんの發見には實は興味のあるものが多かつた。一部は雑誌『方言』にも寄稿せられて居るが、どうか其後の研究と合せて一巻の書として世に遺されんことを希望する。

それから今一つのやゝ大膽な改定は、此集の語彙の排列のし方であつて、是は著者より以上に私

が大きな責任を感じて居る。今までのやうなアイウエオ順では、果してどんな風に如何なる言葉が分布して居るかを知ることが難い。殊に他の地方の状況と比べ合せて見ようとする場合などは、頭音が一つちがへばもう互ひに何處に居るかもわらず、其爲には我々が苦しんで來たやうに、一應は有るだけの言葉を取分けて見なければならぬのである。しかしこの集の排列法が果して最もよいかどうか、企ては悪くなくとも、もつと賢い分類法があるのでは無いか。實は我々にはまだ安心のなからぬ點があるので、寧ろ色々の注文や不満を豫期して居るわけである。この集の如き力の籠つた半生の事業を、斯ういふ試験用に供したのはよくない事だつたが、小さな語彙では趣意がよくわからず、同時に又弱點も目に立たぬかも知れぬので、終に野村さんに御迷惑を掛けることになつた。しかし案外にこの最初の案がよくて、是で結構だつたといふ人が出て來ぬとも限らぬ。ともかくも世間はたゞ方言集の出たといふことだけを喜ばずに、もう少し之を利用して見ようと心掛ける様になつてくれなければだめだと思ふ。

最後になほ少し付け加へて置きたいことは、肝屬郡方言集の著者は、同時に又南大和の方言の大量の蒐集者でもあつたといふ一事である。野村さんは大學を出てから久しい間奈良縣の教育界に働き、今も引續いて同じ縣の公職に就いて居る關係から、大和の言葉に對しては故郷以上の親しきもつて居られる。それが一方の若い日の追憶を刺戟して居ると共に、之によつて研磨せられた言語感覚が、更に又第二の故郷の方言の特徴を、比較的容易に會得するに役立つて居るやうである。そ

の南大和方言集は、天理教の學校の『日本文化』といふ學報に、二回に亙つて公表せられて居るが、各語の對譯は簡明にして妥當、選擇にも至つてむだが少い。是にもし若干の用例を添へることが出來たならば、恐らくもう再び採集の勞をくり返す必要が無からうと思ふ位である。一人で二箇處以上の方言を集めた者も、今までまるく無かつたわけではないが、旅とか傳聞とかの時間を掛けぬもので、大抵は雙方とも粗末であつた。二十何年も他郷に止住して、しみんと土地の言葉の差異を體驗し、それに促されて翻つて少年の日の、無心眞率の表現を味ひなほすといふやうな境遇に置かれて居る人は多からう筈がない。野村さんの郷里が肝屬高山の如き、草に埋れたる一つの小奈良で無くとも、なほ我々はこの懸け離れたる二處の方言の、互ひに映發する點に多くの希望を寄せすには居られない。ましてこの土を愛し且つこの先輩を敬慕して止まざる人々は、必ずや之によつて言語文化の遠い水上を汲む力を養はれ、愈々日本の將來の言葉の、清く豊かに流れて四海に盈つることを期するであらう。此の如くにして始めて著者の素志は成るのである。

昭和十六年十一月二日

柳田國男

序

本文を草するに當つて、最初に、他所の詞に關する記憶を語つて見たい。なぜならば、そんな何でもないことが積り積つて、老來郷里の方言を集めると云ふ仕事と進展した様に思ふからである。私の郷里は肝屬郡の中部、少し東寄りにあるが、今一つ東に内之浦と云ふ村があつて、そこには親戚が昔から居たのであるが、私がまだ幼少の頃、その娘さんが來て泊つたことがある。するとその娘さんが何かの場合に「ンデノノ」と叫んで皆が笑つたのを記憶して居る。これは標準語で「おや〜」と云ふ意味に相當して、これは高山町（私の村の名）では一般に「ンダモノ〜」と云つて居るので、この「ンデノ〜」は初耳で有つた。又同じ幼年時代のことだが、母に連れられて西方一里の地にある、隣村始良村のホゼに行つた。ホゼは奉齋と書く相だが、他府縣の秋祭りのこと、舊曆九月中各村日を違へて、この祭を行ひ、この時他村の親類同志が互に禮訪して平素の疎状をおわび旁々聊か馳走に預るのである。その折私が一番いやだつたのは、その女達が私を呼んで「ボンチサン」と云ふことであつた。これは大阪では「船場のボンチ」など云つて、標準語の

「坊ツチャン」と同じ意であるが高山にはない詞であつた。も一つ耳新しい詞は「行きませう」と云ふ意味のことを「イキンソヤ」と云ふのであつたが、これは高山なら「イキモソヤ」と云つて居る。

それから學齡に達して、村の小學校に通ふ様になつた時、僅かな河一つ隔てた部落の少年達の詞に、吾等と違つたのが一二あつた。その一つは蜘蛛類の中に「女郎ぐも」と云つて、地方に依つては、この蜘蛛を二匹集めて喧嘩させて喜ぶのであるが、吾々はこれを「ヤマコブ」と云ふのに、向ふ岸の子供達は「ヤマケン」と云ふのであつた。又私達は「こらへて呉れ」と云ふことを「カンニ」と云ふのに、河向ふの方では「コトネ」と云ふ様な事もあつた。

さて私は十六歳の三月小學校を卒業して、鹿兒島市にある、縣立尋常中學校の第五級と云ふのに入學した。第五級とは今の第一學年の意味である。この時私は始めて薩摩方面の青少年の詞と云ふものを聞いたが、その時一番違つて居たのは、肝屬郡では長崎系統のバッチェン（正しくはバッチェンである）をみんなが使つて居るのに對して、薩摩方面は悉くドンカラと云ふのであつた。私は衆人の中で只一人バッチェンを使ふ勇氣もなく、さりとて直ちにドンカラに豹變する程輕薄にもなれず、その中を取つて只ドン丈云つて、後のカラは略して仕舞ひ、それを今日迄通して居る。又薩摩方面では「……である」と云ふことを「……チャガ」と云つて居たが、私は在學五年間この詞を使はず、肝屬詞の「……チャル」で押し通して仕舞つた。

明治三十三年三月中學校卒業、直ちに上京半年ばかり神田の素人下宿に居た。その頃宿のおかみが扶養して居る職人の弟子が居て、それを毎朝起すのに「マサコ！」と怒鳴るのが珍らしかつた。コは女にのみつけると思つて居たからである。又その子供が「モツタイナイ」と云ふ詞をうまく使つたのを成程と聞いたり、小學校の校長を、大先生と云つたのも珍らしかつた。間もなく私は寄宿舎に入つて、諸國の詞を耳にしたのだが、埼玉縣人で上野を何時もウイノと云ふのが居り、又同室には岩手縣のものも居たが、それには、ひまあればジとヂ、ズとヅの區別を教へたものである。その頃近松の淨瑠璃などを讀んだりしたが、その中にソルベクソロ「可候候」と云ふ詞や、オミ（御身）や、ワセルなど、云ふ詞に逢着したのだが、この時生れて始めて肝屬詞が古典にも出て居ると云ふことを知つたのである。

以上は私が他所人の使ふ詞に關して、今猶記憶に残つて居るだけを摘記したので有るが、こんな云はでものも、現在の方言の仕事と一脈相通するものが有る様な氣がして、こゝに記録する。その後私は學校の英語教師となつた。而して専ら英書に親しんだ。同時に日本の書籍をも氣の向く儘に硬軟各方面に亘つて漁り讀んだが、併し郷土關係のものは只一冊以外に出でなかつた。それは

柳田先生の「山島民譚集」上巻である。大正の初め頃、日本橋の丸善から「甲寅叢書」と云つて、五百部限定版、定價一冊五十錢で各方面の珍書を逐次出版した事が有つた。「山島民譚集」はその叢書中の一で有つたが、この本を讀んだ時、私は何とえらいもんだと感じた。資料が次から／＼と限りなく提出されて應接に遑なしと云ふ様で有つた。で其時は只讀んだと云ふだけに止つた。その故は、私は柳田先生をもと／＼詩人だと思つて居た。麻布の聯隊前にフランス料理を食はせる龍土軒と云ふ西洋料理屋が有り、田山花袋など出入して居て、先生もそのグループに屬すると承知して居た。だからこの本を讀んだ時は何だ詩人らしい所などないぢやないかと云ふ反撥心も手傳つたりして後味が残らなかつたのかと今では思つて居る。一方英語教師たる私は駄舌を口にして居る中に早くも不惑の年を過ぎ知命の齡をも後にして仕舞つたが、人間誰しも手に皺が見えたり、齒が抜けたりして來ると懐古癖になるものだが、昭和の初め頃になると、私も時々倭漢三歳圖會など座右にして、昔なじみの物名と圖會などに逢着すると、云ひ難き歡喜を覺ゆるので有つた。この時しも現はれたのが、先生の「蝸牛考」で有つた。今迄懐古的に愛玩して居た郷土の方言が何ぞ料らん學問的に重要な資料となり得ると云ふ事を教へていたゞき、そんなものなら身分に相應した御奉公を方言界に致したいと決心し、この時初めて方言帳を座右に備へつけて本格的になつた。地域は任地奈良縣宇智郡と郷里鹿兒島縣肝屬郡に限り、銳意蒐集に努めた。宇智郡方言に關してはこゝに云はず、肝屬郡方言を集めるに如何なる方法に依つたかと云ふに、自分一人で憶ひ出すのもその一つ、古い

書籍や字引によるのもその一つで有つたが、若しわからぬ事が有つたら、郷里に居た姪共に尋ねてやるのが最も有効で有つた。姪は三人あつて山形シゲ、太田ミネ、江副ハギと云ふ。この三人に隨時手紙を出して教へて貰つた。姪達は自分が知つてゐることは直ぐ返事して呉れた。又知らぬことは人に尋ねて教へて呉れた。有り難い事に私には十年前頃迄八十代の母、七十歳の長兄其他兄弟悉く健在で有つて、姪共はこれら年寄り其他に尋ねる所多かつたと思ふ。最後に今尙感激に堪へぬことは、昭和六年の冬私は久々に歸國して一週間滞在した。それは母が明くれば九十歳になるから向後長い命とも思はれぬ。願はくはその九十の年の正月を母の膝下で致したいと云ふので有つた。却説歸つて見ると七十歳の長兄が先づ喜んで、今度はわしが知つてゐる村の事を残らず語つておくと云つて一週間の間そばを離さず語りつゞけた。母は母で同じ圍爐裏に無闇と火をたきつゝ話しかけたものだ。私は二人の語る方言を聞き書きした。この時の收穫は甚だ大で有つた。こんな事をして居る中に京都帝大新村博士指導の近畿方言學會にも早速入會して得る所有り、やがて「高山方言考」(高山は肝屬郡内にある私の郷里の名)を草し、初めて柳田先生に見て貰うた。これが私が先生に弟子入した最初で、方言考はやがて先生の紹介に依り、雜誌「方言」に一部掲載された。次いで今度の方言集にかゝつた。方言集と云つた所で、全く老のすさびで洩れた詞も多々有る事と思ふ。併し私だけは一生懸命にやつたつもりだ。最も熱心な時はノートと鉛筆を枕元におき、思ひ出したらね起きて電燈を點して記入した様な事も再々あつた。而して數年を経て出來たのだ。それが初めて世

に見えると云ふのだから、年取つてからの一人子と同じでうれしい次第である。これも偏へに先生の學恩と今は鬼籍にある母と兄、及び現に健在なる三人の姪共が有つたればこそと深く感謝する次第である。

昭和十六年十一月

野村傳四

本文順序

一、形容詞(大體形の簡單なものより複雑なものへと順に配列、二三も之に準ず)……………一

二、副詞……………一一

三、動詞……………二四

四、助詞、其他……………四九

 接頭語、接尾語、助辭……………四九

 間投詞、挨拶の語等……………五六

 慣用語句……………六〇

五、名詞……………六五

 天體、氣候、時間……………六五

 土地、地勢……………七〇

 植 物……………七六

 ✓ 動物(蟲魚介鳥獸の順)……………八六

 居住に關するもの(家の周圍より内部へ)……………九九

服装に関するもの	一〇六
✓食物に関するもの(食物、食制、食品、食器具)	一一一
農作物	一二〇
農業	一二四
山仕事	一二九
蠶業	一三一
漁業関係	一三二
狩獵	一三六
労働	一三九
運搬、通信	一四〇
經濟、生活、交際、談話	一四一
感情、氣分、心構へ	一四五
物の状態	一四九
單位	一五二
妖怪、神祇	一五四
年中行事、神事、角力、歌謠	一五六

個人的祝、婚姻、葬送	一六三
✓遊戯	一六七
✓兒童關係の語及び兒童語	一七〇
人體	一七四
動作	一七九
人の呼稱	一八一
職業(仕事、商賣)	一八七
惡徳者、憎まれ者、不具者、病人	一八八
病氣、藥、治療法、死	一九七
六、音韻の變化	二〇二

註 文法用語は便宜上一般流通のものを使用した

全國方言記錄計畫

一、言語が我々の祖先から相續した最も大切な文化財であることは、その恩澤が老弱男女、いかなる階級にも行き渡つて居るのを見てもわかります。古來この財寶を最も有効に、又適切に利用し得た國が、文化の榮えを認められて居ります。將來も亦必ず同じことであらうと信じます。

一、言語の利用を完うする爲には、何よりも先づ今ある形を詳かにしなければなりません。改良選擇は必要であります。それも是を知つてから後の話であります。國に如何なる言葉がなほ傳はり如何なる言葉使ひが行はれて居るかを先づ知らなければなりません。それが現在はまだ地域で謂つて見ても、三分の一しか知られて居ないので。さうして土地毎の慣例は極めて區々であります。行く／＼全國がほゞ一通りの物言ひで、安らかに交通するやうになる爲には、やはり又互ひに相手の言葉の意味を會得することが條件で、さうなれば強制も口眞似も無く、置き換へは當然に行はれると思ひますが、今はその參考資料が歎かしく貧弱なのであります。

一、そこで私たちは、新たにこの全國方言記錄を思ひ立ちました。是まで方言調査の行はれた土地、

及びその方法と成績とは、大よそは明かになつて居ります。其中にも完全とは言へぬものが多いのですが、それは我々の事業の進みにつれて、別に増補修正を企てる人が出て來ることと思ひます。最初に力を盡したいのは、今まで一つの方言集も出さず、外からも注意をせられて居なかつた地方の記録を、出來るだけ多く公けに紹介することで、是には幸ひにして各地にもう幾人かの協力者を見つけて居ります。

一、調査の單位としては一つの島、一つの郡を區域とするのが適當かと思つて居ります。同じ島同じ郡内でも、環境の差や土着の歴史の古さ新らしさに因つて、可なり著しい言葉のちがひを見ることもありますが、それを究めて行くと同じ土地の二つの部落、二つの家筋の間にも全く同じといふものは無く、しかも他の多くの共通した部分を、何度も重複して掲げなければならぬ結果になります。それで原則としてはこの區域を一つのものとして記述することにしました。地形その他の特別の事情があつて、二つ以上に分けた方がよい場合も必ず有ると思ひますが、大體に一島一郡内では二つの方言集は出さぬことにします。第二第三の調査が出たときは前のものと比べて見て、異なつて居る點のみを追加として出すことにします。無論その巻頭には調査地と集録者とを明記して、それが必ずしも全區域を代表するもので無く、或はやゝ一部に偏して居るかも知れぬといふことを、斷つて置かなければならぬと思つて居ります。

一、今までの採集の普通の弱點は、折角集まつたのだから先づ残して置かうと、材料の精選を怠り、

たゞ分量の多いのを喜んだことであります。遠い離れ島などには反對の例もありますが、今日の交通状態では方言の數は日に月に減少して、都市の周圍は申すに及ばず、田舎も人の出入の多い平地部では、幾らも保存せられて居ないのが常の状態で、又それ故にこそ我々は採録を急いで居るのであります。之を顧慮せずになゞ互ひに競争して、かさを高くすることはかりに骨折つたのは、損な話であつたと言はなければなりません。ちやんと字引にあり東京でも毎日聞き、誰でも知つて居るものを並べ立てるといふことは、むだといふ以上に弊害があります。折角或土地のみに生育し、又は大事に守られて居た好い言葉、知れば利用したくなるやうな適切な物言ひが、そんな雜然たるものゝ中に紛れ込んで、印象を失つてしまふのは惜しいことであります。更に今一つの弊としては、氣をつけて搜せばまだ色々土地の言葉はあるのに、もうこの位集めたからよからうと、早く安心して休息する人の多いことで、山へ菌を採りに行き、濱へ蛤を拾ひに行く者が、斯んなことをして還つて來たら大評判ですが、方言集だけは今まで是が笑はれもせず居たのであります。

一、地方の資料が蓄積して來ると共に、一層この雜糅といふことが有害なものになります。我々もつい過ちを犯さぬとは限りませんが、ともかくも分量の少ないのを氣にかけず、最初から厳選の方針を以て進むつもりであります。地方の言葉の存録する價值があるか否かをきめるのは、さうむづかしい仕事ではありません。たとへば一つの單語でも土地によつて、發音のし方が色々變つて居ます。是は「なまり」と稱して可なり御互ひに耳につき、一度はきゝそこなひ又は誤解もすることが

有りますが、もと／＼双方の知つて居る言葉ですから、通譯の必要などはありません。又言語學の上からは是も注意すべき現象に相違ありませんが、もと／＼一般の傾向であつて、個々の單語の問題ではないのです。其上に是を確實に世に傳へるには、假字書き以上のもつと込入つた方法に據らなければなりません。斯ういふ音韻變化の大體の特徴を、三四の例によつて附記して置くまでは、親切だと思ひますが、それを一つ／＼アイウエオ順などにして、語彙の中にまぜて並べるとは、誤りでもあり損でもあると思ひます。同じ一つの都會地の中でも、我々のよく知つて居る單語や句を、人によつて色々發音して居るのを聴きます。是には又別に考へなければならぬ理由があるもので、異なる單語又は言ひ方の存在とは、混淆すべきものではなかつたのです。方言を輕蔑し又は粗末にした人々の考へ方には、半ば以上この誤れる混淆から來て居るものがあると思ひます。

一、反對の意見もありますが、私たちだけは訛語を方言から分離して、二通りの取扱ひをする方針であります。たゞ一つ問題になるのは、よく見れば訛りに過ぎぬ言葉を、久しく用ゐて居る爲に當人たちは別の語と思つて居るもの、又は別の語か只の訛りかを、簡單に見分けられぬものはどうするかといふ點であります。さういふ言葉のまちがつて方言の中に入つて來るものは、さう嚴重に排除するには及びません。やゝ疑はしいものは存して置いてよからうと思ひます。多くの訛りは既に中央の風に統一せられて、ほんの二つ三つ何かわけが有つて残り留まつて居るものもあれば、更に他の土地から訛りを帶びたまゝで、是だけ入つて來て居るといふ例もあります。人が同じ語か否かを

疑ふ頃になると、自然に内容にも少しづつちがひを生じて、終には二つの語に分れて行くこともよくあるのです。たとへ其爲に原則は一貫せぬことにならうとも、特殊な訛語といふものは存録して置いた方が、利益だといふ場合が多からうと思ひます。

一、とにかくに斯ういふどつちに附けるかの定めにくい言葉を、棄てずに置く場合が稀にある爲に、わかり切つた訛りを片端から並べるといふことは愚かであります。開けた土地から出て居る方言集には是ばかりが多く、まこと我々の謂ふ方言に入れてよいものは、三粒か四粒しか無いといふものが多いのです。もつとひどいものになると自分が知らぬといふのみで、誰でも知つて居り中央の都市でも使ふものを、土地で聴いたといふだけの理由で採り入れて居ります。斯ういふのはどんな事があつても厳選しなければなりません。それで無いと、日本に現在どれほどの言葉の數があり、又どういふ風に用ゐられて居るかを知らうとする人々が、無益な煩累を受けることになるからであります。しかし或一つの語が方言であるか否かを決するには、折々は水掛論が起ります。といふのは既に知つて居る、聴いたことがあると謂つても、其證據を擧げることがむづかしいからであります。それで私たちは便宜の爲、大小どれかの辭典に出て居る單語は、もう方言で無いと見て居ります。辭典の數は日本には多いが、地方の言葉は掲げて居りません。たま／＼それを出して居るものは皆方言と斷つて居ります。つまり是だけは既に公有物となり、捜せば見つかれる状態になつて居るので、我々は新らしい知識を世に供する爲に方言を記録して居るので、字引にそつくりとある

語は棄て、内容なり地域なりがちがつて居るものだけを出すことにします。しかし大きな辭典に
一々は當つて居られないといふなら、實際は大槻氏の小言海を参照しても、大よそ目的は達すると
いふことを申して置きます。それも面倒だといふ人がもし有れば、是は何でも無いことだからこち
らでどしどしと刪定します。

一、在來の方言集の今一つの飽き足らぬ點は、言葉の説明が屢々精確でないことでありました。こ
の原因の主たるものは、方言には必ず標準語の對譯があるものといふ誤信であります。さういふこ
とは斷じてありません。全國到る處に行き渡つて居る事物の名、是は何と謂ふかと指ざして問へる
ものならば、一物數名といふことも確かめられますが、それですらトウナスとナンキンは少しちが
ふと謂ひ、又は何々の一種とか似たものとか、説明を添へなければならぬ場合があるのです。まし
て無形名詞や形容詞動詞等の、田舎で保存せられ又は出來たものには、寧ろ標準語にそれに當る言
葉が無いと思つてこちらを使つて居る人が多いのです。果して無いと思ふのが正しいかどうか、比
べて見た上で無いと決しられませぬが、それを明かにする爲にもつと丁寧な解説が入用なのです。
上手に精密にそれを言ひ現すことは容易ではありませんが、出來るだけ近いことは多く重ねて見る
もよく、又現實にどんな風に使つて居るかを、例示して置くのも大に結構だと思ひます。但し用例
は耳で聞いたものがよく、自分で作文したのはどうしても無理なものが多いやうです。

一、記録の排列には相當の苦心を要しますが、目標は之を利用するであらう人々の便利、出來るだ

け印象を強く、成るべく退屈をせずに興味を以て讀み続け、又は比較的手輕に知りたいと思ふ語が
搜し出せるやうに、しなければならぬと思ひます。從來の五十音順は、たゞ雜然と並べて置くより
もよいといふのみで、本を讀む字引のやうに、是で搜すといふことは先づ有りません。たゞ同じ語
が名詞にも形容詞副詞にもなる場合に、隣どうしにあると便利だといふ位なものです。語數の少な
い場合などは、寧ろ品詞別に又似寄つた言葉を近くに置いて、是だけの言葉が今行はれて居るとい
ふことを、一目でわかるやうにした方がよいかと思ひます。最初は試みに色々ちがつた方式を採
用して見ます。經驗を積んで行くうちに、どの方式が最も効果が多いかといふことが、自然にわか
つて來てそれに来ることゝ信じて居ります。喜界島の方言集は、少し考へる所があつて特に五十
音順に見ました。南の島の採集事業は、今はまだ甚だしく不振であります。斯ういふ形で一つ
の島の記録を公けにして置くことが、或は幾分か他の島々の學徒に興味を抱かせ、且つ採録を容易
にするだらうかと思つたからであります。

一、今まではといふ方言集の出て居らぬ土地で、どうしても無くてはならぬと思ふ方面へは、既に
勧誘を始め、又知友に依頼して篤志の人たちを物色し、事によつてはこちらからも調査者を出さう
かと考へて居ります。小學校その他で既に採集をして居て、出版の機會を得ずに居られるものにも、
事情の許す限り協力をしたいと思ひます。たゞこの記録が全國に及ぶには、相應永い年月を要しま
す故に、最初から用意をして成るべく一方面に偏せず、程よく東西南北に配られるやうにしたいの

で、自然に後まはしになるものも出来るかも知れません。それから又我々の嚴選主義や排列の方式に異存があつて、御相談を進められぬ場合も起るかも知れません。我々の希望をいふならば、一つの言葉をカードに取つて、再調査の照會に便利にし、同時に取捨と排列との決定だけは、編輯者に委ねられることでもあります。

一、最後になほ申し添へたいことは、是は出版者にも又編輯者にも、絶対に利益事業ではないといふ一事であります。事業界の自然の傾向に任せて置くと、いつの世になつても『全國方言記録』はまとまりません。それが又我々の新たに之を企てる理由であります。

柳田國男

大隅肝屬郡方言集

イミシ ひどい、勇猛な。いみじきから轉じたもの。イミシゴロはそんな人間。

エズイ するい、狡猾な。

コエズイ 小事にするい、小股すくひな。

オカシー 恥かしい。お客の前に出る少女など往々洩らす。可笑の意味と異なる。

皆の前立つとわオカシー。

オズイ おそろしい。オトロシに同じ。

オロイ 悪い、よくない。衣類などに關して言ふ。

カテ ましい、少い。

雨んカチ年ぢゃ 雨が一向降らぬ年だ。

イガレ 悪辛し。辛いばかりで味が無い事。

コエ づらい、難儀な。

びんぶをしてコエこつぢゃ。

ミコエ 困難窮乏の形容。

イザツイ 幼児の少しの物音にも目を覺すことを表す語、いざときの訛。

ドシツイ 徒に白い、青白い、病人らしき白さに言ふ。

ビツスイ 酸っぱい。

キコンツイ 熱心な、根氣の強い。

セコンツイ 根氣よき、倦まぬ。精根強い。キコンツイに同じ。

ツツイ 圖太い、地震の折に落着いた態度などこの例。

ミンノトイ 「耳の遠い」から「容易に人の言に耳を借さぬ」の意。

マツナゲ 待ちわびる、待ち遠い、待ち長い。

ナツイ 緩なる(坂など)、又和やかな。

ヌクイ 暑熱の甚だしい。暑いと云ふ言葉はない。

ネツイ ねばり強い、がんばり強い。

イラヒチ ひどい、峻烈な。

イラヒチ人ぢや 人の骨を刺す様な事を平氣に言つてのける人の事。

グワビリ だだ廣い、徒に廣い。

タダユリ 物の縮らぬ状態、帶のしまらぬ状態などを言ふ。

キホシ 心細い、心もとない。

チエミシケ 人手がなくて忙しい。

ムズイ 可愛らしい、愛くるしい、ムゾカに同じ。九州にはこの系統の方言が他にも有ると言ふ。

メヤシ 簡単な、容易い。

ヨダキ いやがる、物ぐさな、うるさがる。

ワザイ 薄氣味悪い、怖しい。

キゾガワリ 薄氣味悪い。

キャセ ひよわい、毀れ易い、もちい。

ヨカ 良し。

ハマリノヨカ 甲斐々々しく立働く形容。

ヨカオゴジヨ 美人。

ムゾカ 可愛らしい、愛くるしい、ムズイに同じ。

ウグワンケナ 疎枝大葉な、しまりのない。

ウソソナ 宜い加減な、宜い氣な。

ウソソナむんぢや 宜い氣なもんだ。

イキオドナ 暴慢な、人を食つた様な。オドは横道、イキは強意的な接頭語。たゞオドナともいふ。

ガマクナ 頑健な、筋骨逞しい。

シトツチヨナ 同じ様な、相變らずの。

シンビユナ 子供の靜かな、一人遊びでもする様な點を形容する、神妙な。

ジヨジョナ たいした、廣汎な。

ソクセナ 元氣な、剽軽な、妙な。息災の意が他に轉じたもの。

ソクセナ奴ぢや へうきんな奴だ。

デジナ 危険極まる、緊急な。

オー、デジナ事ぢや 子供が刃物を弄んでゐる時などに親がこれを制する時に言ふ。

ヒヨナ 一風變つた、妙な。『近松語彙』の解釋とは相違してゐる。

フユナ 物臭な、何物にも億劫がる。

ムクロナ 猪突的な。

ムテナ 卑しい、慾深い、無代と云ふ古語がある。但し意義が聊か違ふ。

ハッテナ 元氣横溢の、働き盛りの。アラシカに同じ。

ホッケナ 大膽な、向ふ見すの。最も男性的な表現でたとへば西南戦争の逸見十郎太の性質の如きを言ふ。

イネ 強い、勇武な。

イネひと 勇ましい人。

アバチエンネ 廣大無邊な、嗚呼果もない。時、所、數、何れの場合にもいふ。

見物がアバチエンネむんぢや 觀客の多い時などにかう言ふ。

クツネ 苦しい。食べ過ぎた時に言ふ。

テコネ 勿體ない、惜しい。

テコネとつぢや 惜しい事だ。

トゼンネ さびしい、うら悲しい、徒然とぜんな。

ムシネ 哀れな、不憫な、可哀さうな。ムゾナギとも言ふ。

キツサネ 汚い、不潔な。

ゼゼキツサネ 地體から不潔な、むさくるしい。

ジュツネ うるさい、一寸もじつとしてゐない子供などを形容する。

イタイモノ (一) 昵近な。(二) ぶしつけな。

イタイモノ奴 無禮至極な奴。

イタイモノ仲 昵近な間柄。

オゾケンネ 驚くべき。

カカランネ 意想外な、突飛な。

ギャホンネ 意外な事で残念な、惜しいと言ふ意、留守に親友が訪ねて來た時の心持などその一例。

ゲンネ きまり悪い、仕方のない。

ゲンネ事ぢや 一寸きまり悪いわい。

サシランネ つまらぬ、下らぬ、料理など人にすゝめる時挨拶に云ふ言葉。最後のネはつける人、つけない

人區々。

ジモネ 失禮千萬な。

ジモネ奴ぢや 不届きな奴ぢや。

ツカンモノ 遠慮の少しもない交情を示す形容詞。

ツガワンネ 方角、見當の甚だしい相違を示す形容詞。近松語彙のつがもなしと聊か意味が似てゐる。

トツケンネ 突拍子もない。

フケンネ 非常に的^ま外れた、非常な。

ボンノンネ 可愛氣のない。

ミトンネ 汚い、卑劣な、見つともない。

ムゾケンネ 可愛氣のない。

ヤイメンネ 大變な、驚くべき、途方もない。

ヤウチモノ 無制限な、勝手な。

ホノネ 無茶な、無法な、脱線的な。ホノシレンとも言ふ。

ウケ 多い、多量ある。

今日は人がウケ。

チンケ 小さい、細かい、關西語のちんこい。

ニケ 新しい。アタラシと併用して居る。

○

コマシ 綿密な、質素な。

ヤットシ 元氣舊に復せぬ、疲勞甚だしき。

ヨトシ 弱々しく老衰の形ある。

チリシ はしこい、敏捷な。

ヒネビネシ 弱々しい、疊の上ばかりで育つた様な人を形容する。

ミトナシ 不潔な、汚い。ミトナシゴロは不潔漢を意味する。

ゴタマシ 不恰好な、素朴な。凡て輕妙でないものの形容。

チエガマシ 目まぐるしい、うるさい。

チエガマシ子ぢや 何か手に持つてはねまはる様な子供に言ふ。

ドツガマシ 無細工な、グロテスクな。

ヤカマシ 物騒な、面倒な。

キンムラシ あくの取れぬ、あくどい野菜などの味。

キメギメシ きり／＼しやんとした。

グラシ 不憫な、可哀さうな。

コエラシ やさしい。

コエラシ事もえ言はん奴ぢや 無愛想な奴だ。

シトラシ おとなしき、人らしきの訛。

シヨジョラシ 小ざつぱりした、すつぱりした。生ひ茂つた庭木の枝でも伐り落した時の心持などを形容する。

セカラシ 八釜しい、騒々しい、せかしくした。

セワラシ 忙がしい、多忙な、セワシネに同じ。

ソガラシ 騒がしい、仰山らしい、大袈裟な。

ソゾラシ すつぱりと氣持よい、シヨジョラシに同じ。

ソツソラシ 粗雑な、亂暴な。

ヤワラシ 軟かな。

イゲロシ うるさい。

ウゼロシ うすぎたない。

オセロシ おとなびた、大人らしい。ワラベロシ、コドンラシに對す。

ゴクロシ 無細工な、粗雑な、グロテスクな。

コチロシ 丁寧な、小事に氣のつく。

コチロシとこいのちつともねおなごぢや 丁寧な所のない女、冷淡な女といふ事。

コトロシ 仰山な、驚くべき、事々しい。

セバツロシ 狭苦しい。

ヒヒロシ 弱々し。ヒネビネシに同じ。

ヤゼロシ 目まぐるしい、うるさい。子供が騒ぐ場合母親の屢々用ひる言葉。

ワラベロシ 子供らしい。

スズルシ 涼しい、ルだけ餘計である。

メメグロシ めまぐるしい。

キーメクセ かんこ嗅い。きなくさい。

ヒエクセ なまぐさい。

ヒエクセ物 なまぐさなもの、主に魚類。

○

シセントシタ いかにも自然な。

ツンシタ 泰然自若とした。

ツンシタ人間ぢや。

ワサワサシタ 話など心置きなくする人の形容。氣のおけない。

シユダ 奇妙な、變な。

あや(彼は)シユダ奴ぢやな。

チヨダ 中止された、止んでしまった。

コシレタ 生長の止つた、發育不良の。

ノサツタ 幸運を授つた、恵まれた。

あのひた(人は)金にノサツタしとぢや 金運よき人。子供にノサツチヨルは子供を大勢授つてゐる。

ケスツタ 人を喰つた、ずるい。

ケスツタ面をしちよる いたづらしさうな顔をしてゐる。

ヅンダレタ だらりと垂れた、だらしない形容。

トイキツタ 思ひ切つた、斷然たる。

ナデウツタ 雷名を轟かした、名に高き。ナデナに同じ。名代な。

ゲンノ 本當の、本物の、にせでない。

サシツギノ すぐ次の。

サシツギの弟、サシツギの妹。

サシワタシノ 正眞のといふ意味である。

サシワタシノ從兄 本當の從兄。

エンノ 義理の。エンは縁か。

エンノ妹 義妹。

イヨイヨ 決して、必ず。益々の意ではない。

イヨイヨせぬか 屹度しないか。

ヨンニユ 可なり、どうにかかうにか。

ヨンニユさるかるゝごつなつた どうやら歩ける様になりました。

タツタ 度々、屢々。

メツテ 度々、往々。滅多にの意はない。

こきにや(此所には)メツテやち来る。

サシツケ 早速。

サシツケちございもすが 早速でございすが。

ハツサキ 眞つ先。

イッスン 聊かも、斷じて。

イッスンきかん 斷じて承知せぬ。

シトハナ 一しきり。

シャイモ 無理無體に。

シャイモ呉れ〜ちゅむんちゃつて 是非に呉れよと言ふので。

ネゴヤシ 根こそぎ。

ネツフシ 根元から、一切合財。

山の上まぢネツブシ伐いつびた 山の上迄根こそぎ伐りつぶした。

アザイ 非常に、大いに、又氣味悪き。

アザイ立派ぢや。

ガツツイ 全く、その通り。

ガツツイ合うた 計算など全く合つた事。

ギツシ 澤山、うんと。

人がギツシ來ちよる。

スツタイ 全然、大いに、大層、グナツと言ふに同じ。

スツタイだれもした 大層疲勞しました。

スツバイ 凡て、悉く。

もんだや(問題は)スツバイでけた。

マオナキ のけ様に、前身を天に向けて。

カットシュ 次々に、連続に。

何處ん家もカットシュ病人はつかいぢや。

クワタチ わざ／＼、ついででなく。企ての約。

ヨロツデ 皆で、共同で、寄り合うて。

ヨロツデ遊ばや。

ヨロツ など、等。

あいやそいやこいやヨロツ……

あれや、それや、これや等。

ナシケ 何故に。

イカナコチ 必ずや、まさか。肯定否定共に用ひる。

イカナコチいきやすめ きつと行きはすまい。

カタイゴチ 代りばんこに、交互に。

フテコツ 大いに、大變に。

フテコツ捕れたど (大いにとれましたらう)魚など釣つて歸る人に對する挨拶に言ふ。

ウカムン 澤山、多量、多數。

ゲチモノ 無茶苦茶に。

ゲチモノ言ふな 失敬言ふな。

サシカブイ 久し振りに。

サシカブイぢや、あがれ。

ナゴブイ 久し振り、長ら振り。

○

キント 正坐を表す形容。

キント坐る 正坐する。

キシト (一)ふつつり、少しも。否定の場合。

キシト來ん ふつつりと來ない。

(二)甚だしく、きびしく、ひどく。

背中を何かキシト刺すがよ 何か背中をひどく刺すがね。

ハイト 常に、始終。珍しからぬ夫婦喧嘩を第三者が批評して、

ハイトんこつちや 始終あることだ。

ハシト きりりと、きちんと。

ブント 凡て、皆、悉皆。

オンドイト 安らかに、落着いて。

オイドイトんせん 少しも安眠出來ない。

ゴロイト 遂に、結局。

ゴロイト死んだ 長患ひの後に人の死んだ場合などに用ひられてゐる。

ギタツ 視線を何時迄も離さぬ形容。ギタサツとも言ふ。

キヨソツ きよとん、ぼつねん。

そき(其處へ)一人キヨソツしてないごつよ(何事だ)。

クリツ 顛倒する、又急轉する形容。

ゴソツ、ゴソソイ 皆、一物も餘さず。

ゴソソイうつ食た 皆たひらげた。

ゴンゴツ さつさと、急いで。

ゴンゴツせぬか。

シパーツ すまし返つた顔の形容。シパーツした男ぢや。

ジューグリツ 四方をぐるりと。

ツバツ 澤山、多數。

ツバツ呉りやいお 澤山頂戴よ。

チヨカツ、チヨッカイト 突然、急に。

チヨカツおみでた 急に思ひ出した。

チンゲララツ 全部駄目。近松語彙のちんからりと同じか。

ニクラツ、ニクラサツ につこり、にんまりと笑ふ形容。

ヒヤーツ ずつと遠く、遙かに物の續く形容。

人がヒヤーツつぢた 人が遠く迄打續いた。

ヒヨカツ 突然、無警告に。チヨカツに同じ。

ヒヨカツうったちきもした 突然發足して來ました。

ピリツ ぐらの音も出ない様に。

ピリツやいこめる。

オテツキ 充分に、たらふく、大和でタンノーと言ふ。

さあさ、オテツキくやい(食やれ)。

キドキ 意外に、不思議に、奇特に。

ターツキ さつさと、大急ぎで。

チンジ 澤山、多く。數にも量にも通ずる。

マレケン 稀々に、たまに。

テーテン 次々に。老人の口から出る言葉。

ケシンメ 反対に。表を裏にした形容。

お前やケシンメイ着ちよる 表と裏と反対に着てること。サカシンメイ着ちよるともいふ。

サカツンべ、サカバチ 眞逆様に、上が下になつて。

ドロクサンメ 泥まみれに。

イッキニヤ ともすれば、やゝもすれば。

イッキニヤ来て仕様がね(無い)。

クノンノ 苦もなく。

ワルフケンノ 無謀に、無暗に。

○

アクワサン ぼんやり口でも開けてゐる形容。

なゆ(何を)アクワサンしちよるか。

ガンブイ 器物に一杯に入つた状態。溢れる様になつた形。

水がガンブイ來た。

ゾツブイ びつしより、ぐつしより。

キンゴイキンゴイ 座敷器物など綺麗に拭込んだ形容。

ウソウソ 鼻をうごめかす形容。

エツクワイエツクワイ 幼児の歩く様、河童の歩く様など不慣れな歩き方の形容。

オイエイオイエイ、オエコケ うよく。蠶が物食べたさうごめく形容。

ガツガツ 物事の適中する時用ひる。

ガツガツあたる 屹度適中する。

ガンジীগアンジイ 蒲柳の質ながら兎に角生きて居る事を示す副詞。

ガンナイガンナイ 右に同じ。

キンジীগアンジイ 目の鋭く光る形容。

クゾクゾ 顔色のやつれた形容。

顔がクソクゾつしちよる。

グツグツ 唾をのみ込みくする形容。

ギャギャ 目まぐるしい。

グワグワン がらんと。中に何も無い形容。

ケモイケモイ 勝手が判らず仕事も手につかぬ形容。

ゴンモイゴンモイ 生き物のうちやくしてゐる形容。

ザワイザワイ、ザアイザアイ 絹物を着た状態。

サキサキ さくく、新しい西瓜の歯ざはりの如きもの。ヌツカイヌツカイの反対。

シツパンシツパン ひからびた物を口に入れた時の舌觸りの形容。

スタスタ 一二三滴水の落つる形容。目薬を目に入れる時がよくはまる言葉。

スツカンスツカン 非常に軽い形容。

スンズンニ ずたぐくに、寸々に。

ダオイダオイ 青草の茂り合つた形容。

チクチク 丈の低い形容。

チュワイチュワイ あわてて度を失ふ形容。

チヨロチヨロツ さつさと、大急ぎに。

チヨロチヨロツいたちき さつさと行つてさつと。

チンチン 少しづつ。

ツルツル うつらうつら。ほんの少しの間まどろむ形容。

ドンゲイドンゲイ 多数生き物のうよよくする形容。川魚が淵に集つた時などに言ふ。

ニシニシ 夏の日照の甚しき形容。

ハラハラ 胸にわたかまりのない形容。

ハラハラ語る 心置きなく話す。

ヒツクイヒツクイ お腹がペコペコの形容。

フツイフツイ 結構なものが多分にある形容。

ムツクイムツクイ 非常に立腹した形容。

ムツクイムツクイはらけちよる 非常に立腹してゐる。

ムンジイムンジイ 矢鱈と身動きする。

ワイワイ 元氣充滿した形容、又むしやく食ふ形容。

ワングイワングイ 女の髪の毛の亂れに亂れたのを形容する言葉。

○

オッコイオッコイ 火が盛んに燃える形容。

シカシカ 滅多に、碌に。

シカシカ見もせん。

シカシカ來もせぬ。

シトイモシトイモ どのつものつもの。

シトイモシトイモあすち(遊んで)ばっかいをる。

ツツカケツツカケ 引切りなしに、續々。

ニエニエ 分相應に、形に合はせて、似合ひくりに。

ヨクヨク 休みく。

ヨクヨクしやいを 休みくせよ。

ウンガワイガ ウンもワイも汝の意で共に卑しい語であるから、言葉汚く罵り合ふ場合を形容する。

只もまんぼ(兩方)かいウンガワンガちゆち(といつて)聞かれはしもさん 只もう兩方から口汚く罵り合つ

て聞いて居れません。

ゾモクソモ 何でも構はず、一切合財。

アイタケネタケ 有る限り。ネタケはアイタケを強める爲に附加する。

アナゲイエンゲイ 知らぬ場所を繰返し探す時などに用ひる。

アラツラ 粗方、宜い加減に。

イツゴツサツゴツ 行く先々何處に行つても。

イツゴツサツゴツ留守食うた。

イツベコツベ 所々方々、所構はず。

オモシツカモシツ 宜い加減に、然程熱を入れずに。

オモシツカモシツ掃除しちよけ。

カタブキヒラブキ しげく人と人の家の中など覗き見る形容。

シキロキ 碌に、碌すつぼ。

シチャクワチャ 滅茶苦茶、木葉微塵。

シンカイホンカイ 誠心誠意、熱誠こめて。

ジンデクワンデ 無茶苦茶に。

シンバイコンバイ 非常に心配すること。

スツタイクワツタイ まごくする。行動遲鈍なる形容。

スツタイクワツタイして汽車に乗遅れた。

スツタイムダイ 四苦八苦の状態。

チツクイソツクイ 少しづつ、ぼく。物のたまってゆく状態を形容する。

ドチャシコチャシ どうもかうも。何としても、否定の場合のみ用ひる。

ヌンダイソツタイ 無聊な人の形容。伸びたり反りかへつたり。

ハヨオス、ハヤサオスサ あまりに早く、早急に。

ハヤサオスサ手出ししゅすんな あまり早く手を出してはよくない。

メツキハナツキ

る。

顔を見せる度毎に。頻々と小言を連發される様なときに、悪意を含めて言ふ場合に用ひ

ユゴツスルゴツ

自由放任に。

ユゴツスルゴツさせちよけ。

ヨイツキヒラツキ

寄り来る度に。

ヨロイクワライ

よろ／＼と、千鳥足で。

ヨシゴヒンゴ

横様に。

○

カワツタ

變に、何となく。

今日はカワツタゆごたね

今日は變に行きたくない。

シトツクチ

異口同音。オナジといふ言葉はない。

ザックラカシ

極めて亂雜に、又斯かる性癖の人物。

ザックラカシけちやる(書いてある)むんぢや。

ヤンキモ

躍起になつて、無闇と。

ヤンキモ呉れ／＼ちゅ事で。

イシツベ、

イッシュユイッベ

右に同じ。

イットキノコメ

瞬時に、時を移さず。

タダイマンコメ

一寸の間に、すぐに。

イキトスイ

行逢ふ毎に、道で會ふ度に。

ハラケタマカシ

腹たちまぎれに。

トシノヨイハチ

老境に臨んで、年老いた果に。

ツツノンゲツゲツ

唾をのみ込み／＼しつゝ食物の煮えるのを待つ形容。又食事以外何でも、待望の心切なる

場合に用ひてゐる。

ドンタカサ

うづ高く、盛上げて。

アエル 落ちる。汁、果物などの自然に墜落するの言ふ。他動詞はアヤス。

アク 蠶の上簇すること。桑葉を食ひ飽くからだらう。

アグツチャク 口を廣く開くこと。

アバク さばく、片付ける。乗物や店の品物などに就いて用ひる。

アマル 子供が人に對して悪戯をすること。

サルク 歩く、歩行する。

イミル 數や分量の増す事、殊に煮物などの漸次分量の増すことに言ふ。

イリモル 入りびたる。

ウセル 犬猫等が食物を食ひたがる。

ウツモル 烟、臭氣など立ちこめる。

ウツル 意識してゐる。

オエル 生える、芽が出る。關西で言ふ様な下品な意味はない。

オズム 目が覺める。殊に小兒について用ひてゐる。

聲を出すと子がオズンド。

ネオズン 夜間子供が目を覺す。

オサイチャル (一)家に居なさる。(二)出掛ける。

ハチツヨチャル ハツク(行つてしまふ)の敬語的發表で婉曲に御死去なさるの意にも用ひられる。

〇〇さんなハツチヨチャッタちもさなあ 御死去なさつたさうですね。

オテケル 病氣がぶりかへす。

オラブ 叫ぶ、鳴く。泣く意味はない。

カケル 通勤する。

カツク なじむ、なつく。

子供が貰はれて行つた先にカツク。

クケル (一)目白等が小聲で囀ること。(二)間伐する、間引く。

クル 怒鳴る、叱る。

クリカカル 腹立つた物言ひをする。

クリチラス 叱り散らす。

クルワレル 叱られる。

グワエル 瓦解する 談判不調になる。

ちよつ! グワエター! 忌々しい駄目だつた。

ケツサル 腐敗する。

ケンドル 歸つてしまふ。

一人ケンドロ 一人で歸つてやらう。

ゲル 變種する。變質、變形、變色すること。化する。草花等についていふ。ヘンデルともいふ。

ケレル 卵のかへる。

ひよこがケレタ。

コサレル 宜い色に焦げる、餅などが。

コトル 吉凶の折挨拶に禮訪する、又は言葉をかける。

あすきも(彼處へも)コトレヨ。

コドル 病氣がぶりかへす。

コラク 乾く、乾燥する。

ヨッコロブ 横になる。

サギル 色彩のあせる。

シコル 草木の繁茂する。こりかたまる、耽る等の意味はない。

スボ 體を地に伏せる。

スバエ 伏せよ。スボタといへば「打伏した」である。

スピク 非常に寒冷に感ずる。

齒がスピク。スピッキルルともいふ。

スム 潜水する、もぐる。

スレル 過ぎる(時間が)。

も十時はスレタ。

彼岸な打ちスレました。

イキスル お互に知らずに行違ふ。

セケル はにかむ、人前で顔赤らめる。近畿のテレルに同じ。

タツ 瓜や毛髪等の伸び立つこと。

スタダル 紐などの垂れ下る。

ツスタダル だらしなく垂れ下る。

タマル 持ちのよいこと。

チンニル 寝てしまふ。チニルともいふ。

ウツケル へたる、倒れる。

ハントケル こける、仆れる。

トチマル 決行される、履行される。

今度は伊勢めい(参り)がトチマロカイ 決行されるかしら。

ナエル 中風に罹る。

ナオル 移轉する。

ナケレル 放浪する。

何處かナグレちよど 何處か放浪してゐるだらう。

ヌクム ぬくもる、暖まる。

ヌヌケル 舊穀をぬけてしまふ。

蟬がヌヌケタ。

ヌツビヤル 舊曆の一ヶ月二十八日が二十九日ある時使ふ。月が一日お延びやる。

ネボトクレル ねぼける。寝た子が起上つて歩いたり話したりする。

ネマル (一)寝る。(二)飯や煮物が腐敗する。

ハグレル 迷ふといふ意の外に呆然なす所を知らぬ意がある。

ハマル 奮發する。

一つハマちやれ 一ぱし奮發してかゝれ。

ハマル 道路が雨水の爲にぬかるみになる。

ヒヂェル 榮華を極める、秀でるの訛、ヒカイヒヂメクとも言ふ。

ヤセヒボケル すつかり痩せてしまふ。

フスモル くすぶる。

ヘガメル 食物など加減して少くする。

ベツサル 分量が減少する。高いものが低くなる。

ホコル (一)繁茂する。(二)おできの増し擴がる。(三)子供などおぼれること。

座敷でホコイヤんな。

ホヂェル 熱氣を感じる、ほてる。酒氣の顔に出た時、又おできの出来た時にもいふ。

マクル コロ／＼ころぶ、腹痛の折など。

何とん仕方がのし(無くて)只マクツチョッタ。

マサクレル 紛糾する、こんがらがる。

マヌル 人から悪戯でもされた時、親なり先生なりに告げて制裁を求めること。

ムカラエル 嫁にゆく、とつぐ。

ヨク 休む、一休みする。

ヨクへ 休め。

ヨクナシ 休みなし。

ワセル 来る。段々廢止される語。

○

ズイアガル 雨空が段々すり上つて晴天になること。

ノゾンミヤガル 足をつま立てる。

ハレアガル 頭髮が額から抜け上る。

ヒエクイアガル 冷い物を食べて身内がぞく／＼寒くなる。

カキオ 間に合ふ、遅刻せぬ。

汽車にカキアワン 間に合はぬ。

デヨ 突發する。

トイヨ 結婚する。

クレイル 喰ひ入る、食ひつく。

犬がクレイッタ。

ハラカク 立腹する。

スイゴ 行違ふ、骨など挫く。

セシコ 多忙を極める。狼狽する。

ネヂユコ ねぢける。反抗する。

ナンカカル もたれる、よりかゝる。

ナエカブル 木竹などが幹や枝をわきに垂れかけてゐる。

ナツカブル 泣きくづれる。

ワレカブル 相好をくづして笑ふ。

ソネカエル そつくり返る、主に人の姿勢。ソネバルとも。

シャチバイカエル 威丈高に構へること。

キモゲル 苛立つ、不平を言ふ。子供によくある現象。

バジツケル 反撥する。一度何かに中つてその儘返つて來る。

ヨイケル 後戻りする。

途中からヨイケッタ。

ヨガヘル 日暮れて夜になる。ヘルは這入るの訛。

チエゲン 提携する、共謀する。組むの悪意ある場合を言ふやうだ。

トトクレル 水に永く浸つて足など白つぼい色になること。

ズメクル 滑る。ズメルともいふ。

ダレクル ぶら／＼と元氣のない状態。

バタゲル じたばたする、もがく。

ヘンゲル 悪い方にぶり返す、病氣など。

ツスクロ 鳥などふくれ上る。病氣の時などに見る状態。

フテクロ ふてた態度をする。

セツコン 闖入する。

イッキシヌ 即死する。

チシン 死んでしまふ。ケシンともいふ。

オダツ 野菜の莖が立つ。

ホコダツ 倒立ちする。又シリホコダツ。

オテツク 安心する。

クルンツク 俯つ伏す。

トバツク あわてる、せつかちにす、うろたへる。

ヒラツク ちら／＼顔を出す、度々來往する。ヒヨロツクとも。

トバシデル 飛出る。

バイデル 包みより外に食み出る。

ハシデル 嫁が居付かないで抜け出て里に歸つて來る。

テナム 同道する。手並むであらう。

お父さんとテノチ行きやい。

シガナル 出来る、可能なる。算術の問題で「こんたシガナル」と言へば「之は出来る」の意。

シワナラン 出来ない。不可能である。

こげな問題シワナラン。

ソネバル そつくり返る、おもに姿勢にいふ。

カチビレル ひからびる。

スレモ 物ほしげに附近をうろつく。タッスラモとも。

ズメク 悪寒を催す。

ヒカイヒチメク 榮耀を極める。懐工合がよくてはり／＼してゐる。

ホロメク 呻吟する。

シュチイク 浸みゆく、しみが擴りゆく。

ハツチク 行つてしまふ。

オツシヨル 依然尻据ゑてゐる。

今夜もオツシヨレヨ 今日も又泊れ。

こきい一人オツシヨロ 一人此處に居残つて居よう。

ヌチヨル 附添つてゐる。

ヌチヨチ風呂をたけ 風呂の口に附添つて火を焚け。

ネオル 病氣する。

イビル 灰の中に入れて物を焼く事。

オサエル 食物を箸で挟んでお客の手に渡すこと。梅干、澤庵の切れ、又親しい仲には煮しめなどを渡す風習。

オスケル 抑へる、壓迫する。

オモス 蒸す、蒸暑い。

今日の天気はオモスごたる 蒸す様だ。

オヤス 養育する。轉じていちめるの意にもなる。

コドンオヤシ 育児。

カク 槽、棚など作ること。

カザン 嗅ぐ、匂ひを嗅ぐ。カゾムとも言ふ。

カカジル 爪なり尖つたもので皮膚や地面などを搔く。

カタス 仲間に入れてやる。加入させる。

お前もカタスで来やい。

カブシル 一部分噛切る。

鼠が鯉節などカブシル。

カンメル 頭が物に觸はる。

カンメアグル 立つた時など物を頭でつき上げる。昔はよくランプをカンメアゲタ。

カンメオトス 頭でつき上げて物を墜落させる。

カル 負ふ、品物でも子供でも。

ガル 叱る、怒鳴る。

ガイモドス 人からどなられてどなり返す。

ガイトバス 叱りとばす。

クケル 植林では間伐する、野菜なら間引く。

クビル 結ぶ、ゆはへる。縊死の意はない。

コギル 値切る、價をまけさす。狂言記に出て居る。

コサク 引掻く、墓についた苔などへらで取去る如きその一例。

コナス 子供が他の子供をいぢめる。關西地方の錬りに錬ると言ふ意味はない。

兄さんにコナサレタ。

コバメル 亂雑になつた所を片付ける。

コヤス 木など引抜く、根こぎにする。ヒッコヤスともいふ。

サチエル 藻の下小石の蔭などに隠れてゐる魚を手捕りにする。

シヨノン そねむ。

スケル 下にて受ける、落垂れる水などを。

スツル あさる、探す。

スワフル 口で頻りに吸ふ。乳をスワフルなどいふ。

ソク 修繕する。

リユル 茶をたてる。

茶をソエンカ お茶をたてないか。

タタシル 軽く叩く、愛犬の背中など。

タデル 水気のあるもので痛い所などを撫でる。

タモル 食べる、食ふ。上品な言葉である。

ツブル 着物の裾をかゝける。

尻ゆ高うツブレ 着物の裾をうんと高くかゝげろ。

ナオス 大事にしまひ込む。

ナヤス 首などうなだれる。かしげる、傾ける。

なしけ(何故)くぶ(首を)ナヤスカ。

ナラス 衣を掃つ。

ナラメル 平坦にする。

ネツム 指先で食物をつまみ取る。

スヌク 多数の中から一二ぬきとる。一部盗みとる。

ヌツクル 穴に何か他の物をはめ通す。貫く。

ヌベル 熱湯に水を和する、うめる。

ネギル 睨みつける。

ネネジル 強ひて肌などにくつつける。

おきゆネネジッド 煥ホをあてゝやるぞ。

ハエル 反物の縦糸を入用の数だけハエバタで準備する。

ハワク 掃除する、掃く。

ソビク 引張る、袖などを。

テビラク 魚などを解く。開いて料理する。

フム 穿く。下駄、草履、靴何れにても。

ホガス 穴をあける。

マメス 塗りつける。

マワス 呉れる、進上する。

そらあのしちウチマワシヨ それはあの人にお上げするがよい。

マラケル 薪や藁などを束ねる。

モチツキル ねぢ切る。

モツク 弄ぶ、いぢる。大和のモダク。

ヤル 外から物品などおこす。よこす。

そゆ(それを)こつちヤレ それを此方へよこせ。

イツチャル 呉れてやる。

ユルス 放す、握つた手など。

ヨム 馬鍬で田植前の田面を平たくする。

○

イッケアゲル 子供を背中に背負ふこと。

トイアツメル 整頓する。

バコ 奪ひ合ふ、争つて取る。

只もうバコちくかたぢゃ 只もう奪ひ合つて食べてゐる。

ヨバコ 呼ぶ、聲をかける。

イツカクル 注ぎかける。

イクイカヤス 言ひまくる。

トチカヤス 相手をこかす、倒す。

イラバカス ぢらす、いら／＼させる。

ゴロマカス 轉ばす。

チヨクラカス ぢらす。愚弄する。

ヒボカス 魚類を串にさして火にかざす。

ヤイマケラカス 物品など行方不明になる。やつたなり歸つて來ぬ。

シカブル 子供が寢小便を垂らす。

イツカヤス 容器の中からこぼしてしまふ。

水イツカエダ。

ムゾガル 可愛がる、いとしがる。ムゾガイ殺スなどいふ言葉もある。

イツカスル 教へてやる。

シキル 敢へてする。爲し得る。

そげな事はシキラン そんな事ようせぬ。

ツクジル 突つつく。くすぐる。

ツンクジル 指先で物をつまみつぶす。

モンタクジル 揉みくちやにする。

ヤイクヤス 失敗する。財産などつぶす。

アセクル 物を交ぜかへす。鶏が塵塚を交ぜ返す類。

クジユクル 反対する、反抗する、異議を申し立てる。

コダクル 薪など長いのを短く切ること。

ツンゲル 婦人の頭髮を巻上げて解けぬ様にする。こと。

ヒヨクル 愚弄する。嘲笑する。

マメクル 塗りつける。例へば黄粉を餅に。

ミシクル 探す、物色する。

ユスゲル ゆすぶる、揺動かす。

イツコム 投げ入れる、注ぎ入れる。物を深い容器に一時に入れる事。

ヤシネコロス 死ぬ迄扶持を與へる。

オスケコロス おし殺す。

クッサラカス 悪口言ふ。

あい(彼)が事クッサラケチ來た。

イッスル 水など注ぎ捨てること。

イッスルごつ降った 車軸を流す様に降った。

ホッセル 棄てる、顧みぬ。ウッセル又はウッスルともいふ。

ウチュル 賣却する、賣拂ふ。

シマワスル 破壊する、こはす。

シマワスンナ こはすな。

ネタゴワス 寝てゐて頸筋の痛くなる。

ウツタクル 打つ、なぐり飛ばす。

スツタクル なぐりつける。打擲する。

ツケタクル 使ひまくる。虐使する。

ワレタクル 笑ひ散らす。笑殺する。

コサツダス 追出す、除籍する、追放する。

ツクジーダス 嫁さんなどはたの者が豚がらせを言つて居られなくする。

シダス (一)おめかしする。(二)儲かる。

ムクジーダス 突つき出す、除け者にする。

フンタダラカス 踏散らす。

キキツクロ 方々聞きまはる。

ミツクロ 検分する。物色する。

ウツタツケル くつつける、觸れる。母の膝の上に子供の頭をおくのもウツタツケルのである。

ハメツケル 勉強する、精出す。

あん奴ハメツケル奴ぢや 彼は勉強家だ。

ホシトカス 牛馬などを餓死させる、ホシコロスとも。

ツケトカス 使ひまくる。

マキトラカス 帯を幾重にも巻いてゐる。贅澤な意を含む。

何ぢやしつゝいむんぬ(白い物を)マキトラケチ 何だ、白い帯など巻きあがつて。

タシナン 大事に貯へておく。

世間にねむん(無い物)ぢやタシヌヂョケ。

トイハツス うかと放屁してしまふ。

ミツバル 凝視する。

ウチマラス 進上する。稀に老嫗より聞く語。マワスと同じ。

あのしちいウチマラシ あの人に呉れておやり。

ウツケワル 瀬戸物などを割る。

○

イカレル してやられる、負かされる。

用心ぬせにヤイカルド。

オロオロユー 物恐しげに言ひふらす。

グワサツスル、グワサイスル (一)物の悉くなくなること。(二)物價の激落。

ほんのがグワサツシタ 愛情がすっかりなくなつた。

ススツツナル 冷涼を覚える。

ズズスル 悪寒でぞくぞくする。

ヌカヌカスル、ヌツカイヌツカイスル 柔かすぎる事。西瓜の出来すぎたのなど好例である。

ヌツキースル 胸迄つかへること。菓子を食つて二個は甘かつたが三個目は喉を通らぬ様な時に用ひる。

チワイチワイスル まごごする。あわてふためく。

ヒライヒライスル ぴりり痛む。

ホロホロツスル あきくする。長い病人の看護をした後などの氣持。

オカッセスル はづかしがる。

オカッセシテないごつよ 何だ恥しがつて。

ヤッバイシチヨル じつと動かずに居る。

ビツガツク 卑怯になる。

チヨサイボイアハス 散々になぶる。

ブンニナル 別々になる。

ビラトル 結着をつける。ビは首尾のビ。

ビガトレン 終を全うせぬ。

イヂエラスケル 間近になる。垂んとする。

八十にイヂエラスケル 八十の年に近づく。

テトラスル 相當する。似合はしくある。テトは對當。

ヤンカブル 婦人が髪を解き亂してゐる。

カワガデル 出水する、増水する、洪水になる。又ウカワガデルとも言ふ。

カネヲアゲル 鋸の目立てをする。

タマヲトル 猫の子のじやれる。

ミシタンヌスル 子供が人見知りをする。

ハラガフツナル 妊娠する。フツは太うの約つたもの。

ピンタガウツ 頭痛がする。

シャクガセク 胃痙攣をおこす。シャクガセムルとも。

ミガシボル 淋病にかゝる。小便がしげくなる。

ヒビキガキタ 中風にかゝつた。

ヘンコガオキル 長く湯に入らぬ様な時、皮膚が薄くはげて落ちることがある。あの類のことを言ふ。ヘン

コとは病的に皮膚の硬化したもの。

キモガイル 胸がやける。

キモガキレル 果斷な處置を取る。

キモンキレタ事する男ぢや。

ムネヲキル 大いに奮發する。

ハラガキワク 大いに立腹する。

セガキレル 息ぎれがする。

クジョラスル 病氣などこぢれる。一進一退の病狀に陥る。

チヲヒク 子供がひきつけを起す。

キブンヌウシノ 失神する。人事不省になる。

シヨヲウシノ (一)氣絶する。(二)うつゝを抜かす。

シヨガイル (一)蘇生する。(二)本氣になる。

ゲツガツク 風邪にかゝる。但し一部の人に用ひられてゐる。咳氣から來た語。

メヲオトス 落命する。死する。死といふ詞を忌んで婉曲に死者近親の婦人などの言ふ詞。

バチュカブル 罰があたる。

シケガカカル 狂亂状態になる。狐つきを落す場合などに見る事である。

ヨイガタツ 狐つきの狐を放す法を行ふ事。

マガトホル 夜間に魔風が通過する。この風が通るのに逢へば人馬共に害を受けると言ふ。風にあたるので

ある。

ヒガハレル 服忌の日數が過ぎる。又ヒガタツ。

ゴエンニオ あやかる。御縁に逢ふである。

アレヲスル 土足を洗ふ。農民など普通土足であるから訪問の際、アレオシと言はれたら足を洗つて座敷に

上れの意である。

ユヲアビル 行水する。風呂に入るのでない。

ヨコザイスワル 一家の主人になる。

ハフテル 自暴自棄の態度をなす。

何ゆハフテちよつどかい 何で自棄の態度をしてゐるのだらう。

ムクロイキイク 猪突的な行動をとる。向ふにばかり進む。

ジモノスル どうでもよいとぞんざいに物品を取扱ふ。

ヘスベスル 叩頭百拜する。

ヨカマネヲスル 氣取る。

イーブンヌスル 反抗する。

トハクウシノ びつくりして進退の度を失ふ。

ギャホヲウシノ 途方に暮れる。

モドイカゼガタツ 郷里に歸りたい心が起る。歸心が頻りとおこる。

キコンニスル 好きな通りにする。又來客に對して云ふ時は「樂にする」の意となる。

ハガオ 氣が合ふ。意氣投合する。

ガツガオ 氣が合ふ。馬が合ふ。婦人間には使はない。

タカニナル つけあがる。僭上する。

クワジョラスル あきくする。

バカンカラヒツカブル 馬鹿になつたふりをする、馬鹿の面をかぶつてやる。

ザツオム 輕々に考へる。ザツは雜との訛、オムは思ふである。

ザツオムナ 輕々しく考へるな。

ジンツガカエル 熱湯が煮え返る。

ウホンゴガアガル 夏の日中、火でも焚いてゐる時のうだる様な暑さの状態。ウは大、ホンゴはホケ即ち湯

氣、土用中熱火のもと醬油にする麥など大釜で煎る婦人の口から屢々聞く歎聲である。

メシグラヲヨセル 目をしがめる。不興顔をする。

メラミダス 目の玉を大きくする。大いに驚いた時など。

ムネイフツガアガル 非常に驚いて、胸のつまる様な苦痛を感じる。ムネイセツガアガルとも。

シンキガニエル 非常に世話がかかる。悶々の情その極に達する。

メイヒツカカツヨル 今猶まざくくと見えてゐる。

シロインガハシル 海上がしける時、波頭が白く見ゆること。白犬が走る。

ヒエル 散財する。

あげなときゆくとヒユッド あんな處に行つたら金を使つてしまふぞ。

ゴツシタ 大山あてた。

オッコイスル 大儲けする。大山を起す。ゴツシタと同じ。

ソデンシテヘル 袖の下に入る。庇護を蒙る。お蔭を蒙る。

シユサシコム 「尻を差し込む」で、男が女の家に入り込んで何時となしに亭主になりすますこと。

ヌユアゲル 染め直す。見直す。「塗を上げる」で、醫師など一寸流行しなくなると、暫時上京して來ることをヌイアゲイ行クと言ふ。

カワラカフセル 無實の罪をきせる。

ヒダイカチユカマス 左舵かます。反抗性の人間を上手にあやすこと。

ハナラツク 仕事に一寸手出しをしてすぐ止める。

ヨズネヲオル 夜間襲撃する。人を嚇す時の捨言葉。夜脛を折るか。

クチワライク 口薬に食ふ。一般に夜は薩摩芋を澤山煮て、之を不斷草(唐ヂシャ)のおひたし類と共にう

んと食べて腹を作り、最後に飯を少し食つて夕飯を済ました。その最後の御飯を、「口薬い食はうか

い」と言つて食つてゐた。米をつめた俵などの蓋をする前にのせる薬がクチワラである。

オダレガサガル 子供など眠くなつて眼を閉ぢること。スダレガオツルも子供が母の膝でねむたい折などに

用ひられる。

ガッシヨラタツル ならみ合ふ。いがみ合ふ。ガッシヨは建築材の合掌。

ヤカララクル 子供が家庭で無理言ふこと。

ヤマイモヲホル 酔漢がくだを巻くこと。

オキヨロガアガル ほろ酔ひの心地で何やら面白いことなど言ふこと。

スバタタク おしやべりする。駄辯を弄する。スバは唇。

ハナカイイキモスンナ 鼻から息もしてはいけないから轉じて、「絶対に口外するな」の意。

キシカヤス 言ふの卑語。ぬかす。

ハチクロダ 行つてしまひやがつた。下卑た言葉である。

ケ… 動詞の上に強勢的に附加する。

ケ知れた。

ケ死んだ。

ケだれた 病氣になつた。

サチエ… 動詞の上に強勢的に附加する。

サチエウツシ 棄てゝしまへ。

サチエトバセ 飛ばしてしまへ。

シチ…

シチカテ 馬鹿固い。

シチクデ 馬鹿にくどくどしい。

シチメンドナ 非常に面倒な。

ス…

スックヤス ぶちこはす。

ツ… 又はツン。

ツオテタ 落ちてしまつた。

ツクエタ　こはれて了つた。
ツンワレタ　割れて了つた。

ヒッ…　又はシッ。

ヒッチゴタ　相違しちやつた。

シッタマガル　おつたまげる。

シツチャエル　落ちてしまふ。

シットバセタ　飛ばして了つた。

ヒン…

ヒンナク　泣く。

ヒンダク　抱く。

ウチ…

ウチュル　賣拂ふ。

ウチリ　入れてしまへ。

ウツカブル　引き被ぐ。夜具など。

ホタイ…

ホタイオテタ　おつこちてしまつた。

ホタイナギ　投げてしまへ。

ナマ…

ナマフツナル　徒に大きくなる。

…タクル　屢々繰返すことを示す助動詞。

打ツタクル。

踏ツタクル。

ツケタクル　使ひたくる。

…チエスル　將に…せんとする。

仕ウチエスル。

投グチエスル。

…クラメ　行けといふ命令の下卑た形。

出ちクラメ　出て行け。

…シ　…して、…して、…が故に。

寒シ　寒くて。

重シ　重いが故に。

遅シ間に合はん　遅くて間に合はない。

…ジ　…ずして、…ないで。

〇〇へ行かジどきいたか　〇〇へは行かないで何處へ行つたか。

眼を開かじ居れ。

……セー ……くして。

チコッセー 近くして。

タコッセー 高くして。

……バツチェン といへども、けれども。バチともいふ。漸次鹿兒島言葉のドンカラに置換へられてゐる。

あら人間なしつかいしちよるバツチェン…… 彼は人間はしつかりしてゐるけれども。

……コタシテ ……所が反對に、……ものか。

行とコタシテ、内で寝ちよる 行くものか反つて家でまだ寝てゐる。

……ゴタネ ……たくない。動詞の未來形につゞく。

仕ユゴタネ 仕たくない。

見ロゴタネ 見たくない。

行コゴタネ 行きたくない。

……グレワイラン ……に及ばぬ。

シグレワイラン するに及ばぬ。

行ッグレワイラン 行くに及ばぬ。

泣ッグレワイラン 泣くに及ばぬ。

……コッナラヤ 若し……しよものなら(承知せぬぞ)。動詞の過去形に續く。……ナラヤ とも、……ナ

ラヂャロともいふ。

こい手を掛けたコッナラヤ これに手を掛けようものなら承知せぬぞ。

こゆ開けたナラヤ 之を開けたらひどいぞ。

あすきいたナラヂャロ 彼處へ行つたら後がこはいぞ。

……ガタメニヤ 親族關係を表はす。

あの人んタメニヤ叔父に當る 戦記物に出る使ひ方と同じ。

○

ケイ 動詞の下につける助詞。鼻に當る言葉か。氣取つた人が往々使ふ。

ユタケイ 言つたんだ。

キタケイ 来たんだ。

スルケイ するんだ。

ガ 人を促す意を表す。ガソラとも言ふ。

イッガイッガ 行かう。

イッガソラ さあ行かう。

チ 助詞とに相當する。又てに相當する。

行けチ 行けつて。

初めチ 初めて。

ダイ ぜに相當する。

勝手い見ろダイ 自由に見るだらうぜ。

も皆出来たどダイ もすつかり出来ただらうぜ。

セー ……の方に。方向を示す助詞。サメ、サエともいふ。

此方セーいた 此方へ行つた。

何處サメ逃げたか 何方へ逃げましたか。

イ に、へ、といふ助詞。西日本一帯の用ひ方に同じ。

ツイ 迄。

何處ツイいたか 何處迄行つたか。

ケ に、に相當する助詞。

水浴びケ行こ。

書物よんケ来た 本を讀みに来た。

モト

アスコンモト あそこら邊り、あそこら。

セカ さへ、でさへ。

あいセカ(彼でさへ)讀み書きが出来る。

ダチラ、 ダツラ 序に、がてら。

花見ダチラ來申した。

カタチ と同時に。する旁ら、片手にの訛。

行ツカタチ 行く旁ら。

シカタチ する片手に。

カタ 動詞の下につけて物の進行を示す名詞を作る時用ひる。

見カタ 見つゝあること。

草を取りカタぢゃ。

ガト のもの。

此はおいガトぢゃ これは私のものだ。

ガツ ……が程(金錢)。だけ。

一錢ガツ 一錢だけ。

イツチャガツ 一文の價。

ハガツチャ しか、より外。

こいハガツチャね これしかない。

ガナ 古書に散見するガナである。
何ガナ差上げて 何をなり差上げたい。

バシ 近松語彙に「こなたは誰でばしござるぞ」とあるバシで、猶生命を保つてゐる。
どきバシ(何處へ)行つきやるか。

ド 意味はないが、人の名とオヂサン、オバサンといふ語の間に入れて、言葉の曲折をつける事が往々ある。
キンドオバサン キンは本名で、その下に下を置いてオバサンに續く。
東一ドオヂサン

○

ヨ 目下の者へ、或は親しい間の應諾の言葉。

子「おとつさん」

父「ヨ、何か」

エー 人の話を聞きつゝ左様かの意を表はす。「ははあ」に相當す。

エ・ハラ あ、成程。人の云つた事を感知した時發する感歎詞。

エ・ハラ、ほんのことぢやら 成程その通りだわい。ホンノコツは本の事。

オー 同等又は親しき間柄の人に對して應答する語。

オ 感歎の助辭。

雨が降つて來申したオ 雨が降つて來ましたわ。

そげなこつやオ そんな事ですか。

大川が出ちよらオ 洪水が出てゐますぜ。

ハラ おや、あれ。

アライヨ あらまあ、婦人の用ひる驚歎の言葉。

ンダ 私は。婦人の感歎詞に結合してゐる。

ンダモハラ おやまあ。

ンダハラ 右に同じ。

マツ まあ。上に必ず何か伴つてゐる。

ホンニ、マツ 本當にまあ。

アライヨ、マツ おや、あらまあ。

アイタ 風呂の温度の高い時などにも發する歎聲で、痛感以外温感の折にも用ひる。

イシタヨ 冷い！ 水でも掛けられた時に發する。

イシタハラ 物事に失敗した時自然に發する歎聲。

ヤイヤヤイヤ 物事に失敗した時、當人も第三者も共に發する歎聲。

チヨッ！グワエタ 忌々しい、駄目だつた。

チエスト 激動、賞讃の意を表はす青年男子の言葉。

チエスト、いけ、ざつ 薩摩琵琶を聞いて悲壯の極に達した時聴衆の發する歎聲。

アツデ されば、左様さな。

コラマツ これはく。婦人の口より多く出る挨拶當初の言葉。

メイアゲモス 人の玄關に立つた時の「御免下さい」。

メンソ 参りませう。來ませう。鄭重な言葉。

マタメンソ 又参りませう。

ナイガオー なあに、どう致しまして。人から禮を云はれたのに對して答へる挨拶。ナイは何。オーは相手によつてヨーともナーともなる。ナイガオマイなども用ひる。

チャガチャガ その通りく。

イカナエー 案外なといふ意で、老婦人など之を用ひてゐる。イカナマツとも云ふ。

ヨカシヨグワツナ 結構な正月です。新年おめでたう。老人など使ふ祝詞。

ヤットチャロ 御苦労のことせう。仕事の前、旅の門出の際など人の未來の勞苦に對する挨拶の言葉。

ヤットチャッタ 過去の勞苦をねぎらふ。

ヤットチャネ 現在の勞苦に對して言ふ。

オヤットサマ お疲れさま。旅から歸つて來た人などに對する最初の挨拶。

ゴシンドサマ 御苦労様。

ゴコーミヨ 青年が初めて猪を射止めたのに對する挨拶の言葉。但し昔の事。土地柄戰陣の手柄と同じに見てゐたさうである。

マタチゴザロ 左様なら、また今度おあひ申さう。老人などの間に交換される挨拶。

コンドチゴザロ 右に同じ。

ソイナラ 別れの挨拶、さよなら。ホイナラともいふ。この下にアシタチャロ、マタチャロ等を加へることもある。

サンバサンバ 家人が旅に出る折、後に残る老人などが、去る人を手招きしつゝ唱へた言葉。意味不明。

コトネ 堪忍してくれ。コトコトともいふ。

シンツイイケ 死ぬまでやれ。激勵の言葉。

ドシドシ 人と喧嘩などする時のかけ聲。

スットワロ やいこれ。挑戦の意充分の時發する言葉。

ケンクワトーサイ 喧嘩をしてゐる中に割つて入る時の言葉。喧嘩は東西。

○

サッサ 馬に進めといふ時の語。

ダ 馬に止めといふ意。

ゼー 牛に進めと命ずる時の語。

オー 牛に對して止めといふ意。

シッキヤ 畜類を追ふ時に出る語。

オロオロ 仔馬を呼ぶ時の聲。

ビョービョー 仔牛を呼ぶ時の聲。

トイトイ 鶏を呼ぶ時の語。

ホー 農家で鶏を追ふ時の語。

シヨイシヨイ 犬を何かにつしける時の言葉。轉じて人を煽動する意味にも用ひる。

シヨイシヨイカケル その動詞。

ホー 田畑で風を呼ぶ時の語。

ノーノーノーノー まじなひの時の唱へ詞。

キヨノツカキヨノツカ 地震がする時のまじなひ。經の塚とでもいふのか。

カチワラウチカフチワラウチカ 藪の中などに入る時、蝮に噛まれぬまじなひ。梶原氏か藤原氏か、であらう。

○

テンニャクシゴツ 仕事に身が入らぬことの最も著しい例として用ひられる語で、多くは朝十時頃顔を出し

て午後三時頃早くも引上げるのが普通であつた。

インノシイ 最も汚いものゝ代表。犬の尻。子供が口脇に食物をべつたり附けてゐたりするのを「まっでイ

ンノシイのごたる(如し)」といふ。

ヒナタミソ 野糞の乾燥したもの。

ヂュキユブネ 死出の旅に出ること。琉球に行く船は容易に歸れない所から出来た語と思はれる。

トツクリ 徳利から、首くゝりの別名。

ワレハンツ 割れ飯筒で、非常に智力のある人の異名。「魂やワレハンツぢや」と言つてゐる。

ススケデコク 三四寸の眞黒く煤けた大黒の彫像。多くは圍爐裏脇の柱の高い處に小棚を作つて祭つてある。人の顔色の黒いのを評する時は必ず引きあひに出される。

ススケデコクのごたる(如し)。

マキノコマ 元氣の旺盛なものゝ代表。牧の駒。青年などの元氣をこれにたとへる。

ムクラガツケ 用を帯びて使に行つて、その結果を報告せぬもの。もぐらもちへ行つた穴を歸らぬからである。

タシナンコロシ あまり大事にし過ぎて役に立たなくすること。食物なら腐らしてしまひ、着物なら蟲につかれたりなど。

シツノカタキ 目のかたき。犬猿の仲。

ナベガシマニイレル 魚鳥獸を煮て食ふ事。

ナガセボラフリマワス 物騒な長い持物を振りまはす。

シトクツダツクワ 演説などの極めて短い事。イッスンダツクワともいふ。タツクワとはめじろの高轉り。

ソルベクソロ する／＼に引延ばして決着のつかぬ形容、可候候。近松語彙の解とは聊か違つてゐる。

ソルベクソロでびがとれん 一向埒があかぬ。

シツツイヒツハイ 何やかやで関係のあること。殊に親類關係に於いて常に出る語。

ゲンザイカ 本當か？ ほんまか？

ナツタナツタ よく出来た。合つた。試験の答案などに就いていふこと。

ノサン 耐らぬ。堪へ難い。どうもならぬ。

皆ノサンち言ふちわれ(笑ひ)申した。

タツシラン 迎も足りない。不足勝ちだ。

ツルンタラン 足らぬ勝ちの状態。

ハガネガアル 鐵石心を有する。意志が強い。

ミロザマネ ぶざま至極、醜も亦極まれり。

ヒトヨスガネ 生色なし。物に驚いた時の形容。人様子が無い。

イコツシタ 結構だつた。善事の意のみではない。

ツカエワネ 差支へなし。ツカエは差支へ。

キビシムンチャ あきれた奴だ。

メツラシムンチャ ひどい事ぢや。由々しき僻事ぢや。珍らしき物の意にも使つて居る。

マダタギツチヨル まだほとほりがある。

ホケワアガラン うだつは上らない。景氣がよくない。

アタデチャネ 待遠しい時發する語で、まだなか／＼だとの意。

ホシユシツツカン 欲しくてたまらぬ。

ダチモノスル 大事な物など勝手次第にする。貴重な物品を扱ふ時などダチモノスナと戒める。

マシヨキアワン 間に合はない。

チエシケクワン いたづらな子などの手に負へぬ。チエシケハシケクワンともいふ。

ギーモハイモシラン 義理人情を辨へぬ。

ギーモハイモシラン 奴ぢや。

ビンモソモネ 何等音信がない。便も左右もない。

ヒモキコンモツツカン 何とも我慢が出来兼ねる。

トイトヒツトバセタヨナ 籠の鳥を飛ばしてしまつた様な。茫然自失、ぼかんとした状態を形容する句である。

ウカゼントレタゴツ 子供など大騒ぎをしてゐたのがびつたり止んだ、そんな時の静けさ。嵐が吹止んだ如く。

ガネンアシユモクゴツ 或家に死人が次々出る様な時に蟹の足をもぐ如くといふ句を以て形容する。

コドミハナクレタ 子供に花呉れた、で何等効果のない事の比喩。

インニゼンミセタ 何の役にも立たぬの意。インは犬である。

ヒュタンカイゴマ 無數に出て来る形容。瓢箪から胡麻。

スナニシヨンベン 「砂に小便」で溜らぬ、即ち堪らぬといふ事の比喩に使はれる。

カイギノクワンノン 借着すること。無意味の観音が附加されてゐる。人から借着でもした時にカイギノク

ワンノンチャなどと洒落る。

オキヤテン 扇は天。勝負なし。

ハナクエンナンダ 「鼻崩に涙」で、一氣に、ひと落としといふたとへに使ふ。

ナダカンホネダカ 徒らに名のみ高くして實の伴はぬこと。名高の骨高。

コモチバラ 乳兒を持つた母親の腹のすぐすくこと。牛馬と並べて、「コモチバラ、ウマウシバラ」と言慣ら
されてゐる。

ヨアケンイツスンドコ 曉に一寸の間眠ること甚だ有效と認められてゐる。

サンネンカタフ 固い家庭では男兒が矢鱈に笑ひでもしたら母親はこの語を引用し、「古の武士は三年に片頬
だけ笑ひ、次の三年に別の頬が笑ひを見せた位、容易に笑つたりしなかつたもの」と嚴戒を加へた。

ガンジイヒヤクネン 病身ながら長生きする事。

シベンイッチョクソハッチョ 昔春先の観音様參りに多數の處女が騎馬で出かける時、その馬の歩みの非常に
早かつた事の形容で、途中小便に下りると一町、大便なら八町同行者に後れるの意と云ふ。

イクサミテヤハキ 軍見て矢はぎ。泥棒見て繩をなふ。

ハチグワツノヤマオモシ 舊曆八月山に入れば残暑のため蒸すが如き事のあるを言ふ。

カッナワナミノヒラ 刀は波の平。波の平は刀工の名人。

トクダドンノガンノシユイ 徳田殿の雁の汁。肉が中にあるとは名許りで大根ばかりの汁。

グヤグヤボシ すばる星。多數の小さな星が集つてぼんやりして居る。

サカマス オリオン星座の一部に酒榊の如く見ゆる所。冬の夜の更けたことは、この星の高く上つたので了
解した。

タカタログモ 夏の入道雲。

カザミチ、カゼミチ 秋の颱風の來る前、靜かな空中を東西に互つてぼんやりした霞の線がいくつも立つ
てこれを颱風の前兆と見てゐる、その名。風道。

ウカゼウジンマキ 猛烈なる颱風。ウカゼは大風。

モドシ 颱風の際最初東風から吹き出し、方向を東南即ちタツミに變へる。この時の名で最も猛烈に息もつ
かせずに吹きまくるをいふ。

イシオコシ 最も強烈なる颱風。石起し。

マクジ 突風、殊に颱風中に来る突風。

ツシマキ 旋風。

マニシ 又オクニシ、眞西の風。

アナゼニシ 西北風。一般には單にニシカゼと云つて居て、殆ど使はれて居らぬ。猶古語ではアナシだけで
西北風を意味する。

アオキタ 秋晴の日正北から吹く風。

キタゴチ 北東の風。俚語の囃に「キタゴチャ雨ぢや」とある如く、この方角の風は雨になるのが普通であ

る。

ギオンゴチ 梅雨が晴れて祇園祭の前後、連日晴天続きの頃吹く東の風。この頃子供は風をあげるのである。

ハエ、ハエンカゼ 南風。

アビキ 名残、餘波。颱風地震などの場合に使はれる。

ナエ 地震の小なるもの。ヂシンとは大地震に限つて呼ぶのが普通。

ヒヤケ、ヒヨイヤケ 好晴を豫示する夕焼。

ホメキ 蒸し暑さ、熱氣、活氣。

ジュクドユ 十九土用で、普通土用は十八日であるのに、時々十九日の年があり、そんな年は暑さがひどい

と言はれた。

オナゴダマカシ 初秋の頃夜分俄かに冷氣を覺ゆること。婦人がびつくりして冬衣の用意にかゝらんとすれ

ば、又直ちに残暑堪へ難くなりたまされたなと感ずるのである。

タカワタシビヨイ 舊曆八月の頃空がどんより曇つて雨にもならうかといふ様な模様。この時期にさしは鷹

が北の方から無數に飛んで来て、晴天ならば直ちに上空を南に渡るが、曇ると山野に下つて天氣を待つたのである。今はこの鷹も殆ど注意を惹かぬ位少數になつてしまつた。

テンキサタ 天氣工合が原因となる様なこと。南風に頭痛のする様な類。

ヨアガイ 雨が夜間に晴れる事で、一旦止んでも二日のうちに又降ると言つて之を嫌つて居る。

ヒトオトシ 雨の一降り。

今夜どまヒトオトシ來んかな 今夜あたり一降り降らないかな。

ウリ 旱天の際の雨。うるひの約つたもの。

ウツチャメ 風の爲屋内に打ち込む急雨。

シボイアメ 澁々雨、じめ／＼降る雨。

サダチ 夕立。

ザブイ 時雨。但し初冬の時雨でなく、昔から「七月ザブイ」といふ言葉があつて、舊曆七月土用のあけた

頃毎日東風が吹いて、日に何度となく急雨の襲來する事がある。そんなのは地方的にザブイの特有なものである。

ウメシグレ 梅雨。普通には用ひられぬ。

ナガシ 梅雨、五月雨。

ヒナガシ 晴天つゞきの梅雨、からつゆ。

キノメナガシ 木の芽が出る頃の霖雨。

サクラナガシ 櫻咲く頃の霖雨。

ユツキヤメ みぞれ、雪雨。

ハナピラ 雪片。この邊に降る雪は冬でも春の泡雪に似てゐる。

ビドロ 氷柱、つら／＼。

シモガネ 氷、霜金であらう。

クロシモ

曇つた朝の霜、白く見えないからであらう。

ハダモチ

時候、季節。

よかハダモチな いゝ時候ですな。

ケゴジヨドキ

養蠶時分。

ナガシドキ

梅雨時。

ウナツ

盛夏三伏の候、大夏。

ホシ

舊の六月朔日の日を言ふ。

トシノバン

歳末の夜。

ヨイツキ

閏月。

ハダ

間、あひだ(時の)。

おいが戻ち来るハダ留守しちよれよ。

シトコマ

一刻、主に仕事の上でいふ語。

まシトコマ働こかい。

サントキサガイ

時間を非常に経過すること。定時を遅れて人の来る様な時用ひる。

サントキサガチかい来て何なるもんか

後れ馳せに来て何になるものか。

アサゴツ

朝の間、午前。

アサゴツ掛つた ある仕事が晝迄で済んだ場合。

ヒハン

半日。

ヒシチ

丸一日、日一日の訛。イッチニチとも言ふ。

ヨノヨシチ

夜つびて、夜通しに。

メヒニチ

毎日々々、まいひにち。

ヒシチゴシ

一日おき、隔日。

セツイ

一昨々日。

アトチ

先日、過般。

コノチュ

昔、往時。近畿の「この頃」の意ではない。

ムカエツキ

滿一年になる月、年忌のむかはりとは関係はない。

トツシャゲツ

來年。薩摩地からの渡來語ではないかと思ふ。

サレセン

來々年、サレネンに同じ。

ゴットオキ

味爽、朝起きるとすぐ。

シバドイ

午前六時頃三番鶏の鳴くこと。

グワラグワラドイ

三番鶏。いかにも賑やかに鳴くからである。シバドイに同じ。

ウビル

白晝、眞晝間。ヒンノヒナカとも言ふ。

アコクロンモト たそがれ、薄暮。
ヨノイモト 夜に入り方。
クラスン 闇黒、くらがり。
ヤングラスン 夜の闇黒、眞の闇夜。

○

ヤマシオ 山津波。
ヤマナイ 梅雨晴れの頃、南東に當る山合ひの谷川の音が遙かに聞えて來るその音で、感じのよいものである。
ヤマヒビキ こだま、反響。
ヤマ 森、林といふ語の代りに一般に用ひられてゐる。林といふ語は存在せぬ。
クロヤマ 常緑樹林。
ノヤマ 田畑の別名。
ノヤマンシゴツ 田畑の仕事、農事。
カケチ 遠隔の地にあつて特に他人に監督を依頼する様な所有山野、ハシバに似てゐる。
ハシバ 榎を植ゑてその實を以て収入の第一とした様な原野。現在は大部分開墾されてゐる。
フネヒキバ 舟を揚げておく所。

カワヂェ 一家又は部落の水仕事をすする水邊の地域。

カワヂェミチ カワヂェに通ずる路。全然宅地内に在ることもある。

ババ 廣い眞直な通り、馬場。廣義では門外の道路は之を皆馬場といふ。

ババツクイ 道路の修理。

ハヤマンバ 早馬の行はるゝ場所で、多くは街道上に在り、そこだけ道幅を廣く平坦にしてある。但し今

や道路改修の爲場所がなくなつて自然少くなつた。

シユチ 横町、小路。

サンモシ 丁字路、三文字。

ジュモシ 十字路、四つ角、又ジュモシカド。

ハシゴミチ 坂道又は雨水の溜つた様な野道の、凸くなり凹くなつた様な所。これは多く馬の一步々々の勢で自然につくのである。従つて雨後にはその凸くて水のない所をとび／＼歩くのが常である。

キモツキケド 戦國時代にあつた肝付氏を物語る街道。今僅かに残る。

キサ 段々、きだはし。

セツガンド 九州西南部で、昔から旅人に注目せられたもの。多く丁字形の道路の突き當りに建てた石で、表面に石敢當と刻してある。

クヨツカ 街道の並木の陰などに、土地を四角に劃し、二三段に土を積み上げ、上に松を植ゑたものゝ名、供養塚。春先修理を加へてゐる。

ミツメ、ミツメイシ 道路の突き當つた所に据ゑてある石塊でその意味は不明。

ツバタ 海岸傳ひの土地、磯、邊田ともいふ。ナダも同義である。

ガンキ 川岸。

カワツル 河川の附近一帯、水流の字をあてる。

カシタ 河の上流に當る地方、川上。カシラの訛か。

タケ 上流山岳地方の部落一帯。

シボラ 芝生、芝原の訛か。

サコ 兩側から土地が迫つた坂道、迫。

セト 同上、海の瀬戸のみに限らない。

セドヤ 兩方の家の相接した間の空間。

タテイワ 絶壁。

イワクラ 岩石多き危険な所。

イシトビ 飛石傳ひになつた場所。

オスチ 分水嶺、尾筋、又セスチともセともいふ。

クエト 山津波の爲に山の木の全然なくなつた所、崩所であらう。

ツタンバラ 人體の横腹。山の中腹にもいふ。土手つばら。

ヒラ、ヒラマクイ 傾斜地。

ヌキ とんねる、掘り貫いたからであらう。多く用水の水路に見られる。

ヌカイ 泥深き所、ぬかるみ。

ガナ 穴、鰻でも入つてゐさうな水中の小穴を特に言つてゐる。

スナトイガマ 一帯の岩壁下に恰かも穴居時代を偲ばせる様な洞窟が至る所にある、その名。これは白砂を採取する所である。

ミットイアナ 戦國時代、城から水を取りに行く爲に設けた穴。

ホキ 空堀。

タコン 高い所、高み、低い所をヒクン、遠い所をトーン。

スツイ 近所、附近。

トイモイ、キンジョトイモイ 近所。

ホーギイ 方面、方限と書く。部落々々を言ふ。

カカイ 行くまでの途中、掛り。

カカイのわり場所で仕方がね 行く迄の所が悪くて仕方がない。

シャクハチ 用水池の樋。尺八の様に幾つかの穴が明いてゐるから。

トコミツ 雨の爲に流れる道路上の水。

ソツ 特有の軽石の厚い地層などから出て来る地下水で清冽無比、寒水と書く、又デミツ。

テタタキミツ 極めて浅い水、手叩き水。

カタブチ 一方は浅く、一方は淵になつてゐる所、片淵。

ガタ 竹の根などのからまつた河水の深い場所。

スイコン 河溝などの水が、表面渦を巻きつゝ他に逸する入口の所。鰻が往々ひそむ所、吸ひ込み。

シャブツ 下駄のはねる勢でとび上る泥。

シャブツガアガル はねがあがる。

ノロ 泥、ドロとも言ふ。

ニタ 粘土、近畿ではニコと言ふ。狩人などの言ふ語。

チゴツチ 河岸に沈澱した粘土で、兒童は、水泳中皮膚にぬりつけて楽しんでた。

ヨセクサ 大水の時に寄せた藻くづ。

ハナゴミ 洪水の時、地上や床の上などに溜つた塵芥。

ゴモクゾ 塵芥。

ユゴケ 水垢。

ゴロクレ 土くれ。

ガイシ 軽石。

メイシ 重い石、みかげ石。

コクライシ 最も普通に墓石にする石。

コシキジマ 黒色の硯石の名。

アカマガセキ 赤色の硯石の名、産出の土地に依つて出来た名。

チダ 地べた、地表。

ナメイ 平滑なる岩面、大和のナメラ。

ケキ 景色、眺望、景氣から變化したか。

ヒガシメ 薩摩地に對する大隅半島、東目。

ニシメ 南大隅から海を越えた薩摩地を指していふ語。

ムレ 朝鮮の古語で山を意味すると聞くが、村内にこの語の付いた固有名詞が見られる。

ムレゴンゲン 神社の名。

ハナムレ 地名。

オムレ 地名。

ムレンヤマ 山の名。

ソン 園をソンと言つて、それを下に附加した地名や名字は驚く程多い。

カキゾン(柿園) ウツゾン(牛園) ウゾン(大園) カンゾン(上園) ナカゾン(中園) ドゾン(堂園) ツル

ゾン(鶴園) など。

インゲイ 海岸難所の名、犬歸り。

スズレイシ 右に同じ。滑石、壹岐にもこの地名ありと言ふ。

シバタテ 土地名、柴立と書く。昔は神事の際こゝに柴を立てたと聞く。又人の送迎もこゝ限りであつたさ

うだ。

タツチュ 地名、達中と書く。墓地の名。
テツドテ 隣村の堤の名、極めて長い一直線になつた堤で、同時に通路である。
シトギデン 地名、次米田とある。

○

アケス あけびの種類中上皮が縦に破れて中の肉の現れるもの。
ネコンクソ あけびの肉が白く實が黒い故の名。
グベ あけびの實、うべ(郁子)。
アカイチゴ 草莓、その色眞紅だから。
ドクワンス 草莓の赤くて特に大きいもの。美味である。
ヤマイチゴ 冬季蔓草になる苺。味はよくない。
アラボ、アワボトクイ 雑草、猫の枕。
ホトクイ 雌芝、畑の雑草の最も甚だしきもの。大和の秋ぼこり。
コマツナギ 雄芝、雑草。
ヤシバ 芝草の種類の名。
ヘゴ 羊齒類、山野に群生するもの。

スミラ 畑の畦などに生える雑草、球根がある。葉は青くして彼岸花の軟い様な感じである。昔飢饉の時は

食用にしたと聞く。

イチゴツナギ 雑草、草莓をつなぐに都合よいからの名である。

カモ 蒲、がま。

カモウチワ 蒲の葉で作つた團扇。

トキワススキ 年中葉の青いすゝき、川の堤などに補強的に植ゑてある。

ロツポーガヤ 茅の一種で、この根はたはしなどに作る。

オンチヨツバナ 茅花の老熟して食へなくなつたもの。

シマザサ しまがや。

ジングサ 燈心草。

キツネンカライモ 毒だみ、十薬、狐の芋。

コボシ 日當りのよい所に繁茂する雑草。根はよい香を放つ。香附子。

インノクソノビル 土手の上など一ヶ所に簇生する野びる。こんな野びるは食はない。

サジ やぶじらみ。

サドガワ、サドワラ いたどり、虎杖。

チゴクノチズエカキ 杉菜の別名、地獄の自在鉤。杉菜の根は非常に深い所までのびて地獄迄届くといふ俗

信があるから。

マツバゲサ 杉菜の別名。

フツ 蓬、よもぎ。

ヘノドク 蠅毒草、今日も充分實用に供されてゐる。

ヘビノシヤクイ、ヘビジャクシ 夏木の蔭に生える雑草、天南星科。その花は薄氣味が悪い。

ホトケンミン 夏の雑草、すべりひゆ。この葉が佛像の耳を彷彿せしむるからか。

メツツバイ 雑草、目はじき。

ガネブ 野葡萄、少年等の好物。大言海に「えびづるの古名」とある。

タカクマオモト 萬年青の一種。郡内の高隈山に自生すといふ。

クマヤナギ 山野に自生する黒色の蔓、正名くまつらふぢ。

タブカツラ 無花果の様な實のなる蔓。實は食用になる。

チチカツラ 定家かつら。

シオフキ チチカツラの實。初冬の頃この實が莢から飛び出して風に吹かれて飛ぶのは幽寂だ。シオフツジ

ヨ、シオフケジヨとも云ふ。

ハナタカメン ぬかごの蔓に出来る三菱形の實に、子供は唾をつけて自分の鼻につけ、鼻が高くなつたと喜

ぶ、その實。

ヒメカツラ 夏生する蔓。ひめどころ。

ハナシンチチ 菌類でやつこ草といふもの。これの乳白色の液をハナシ(目白)が喜んで吸ふ。

ミンダレクサ 藥草、雪の下。この葉の液が小兒の耳だれに功驗あるといふ。

ネコンマイ じゃのひげの實、猫の毬の意か。大和でフキンダマといふものである。又ザツンミとも言ふ。

クソゴイ 烏瓜の一種で花が白く而して實の黒びたもの。

ゼンゴイ 烏瓜、冬實の赤くなるもの。

イトウイ へちま、絲瓜、若い内に食料にする。

タマゴウイ 鶏卵大の白色の瓜で、半ば觀賞用で鉢植もあり、又庭園の一隅などに見る。

イヒユ 瓢箪の別名。

マツラン 松の葉の様に細い筋が群生してゐる蘭。

テンチクボタン ダリアをいふ。この花は早く南方からの渡來物であるとの意。天竺牡丹。

イゲボタン ばらの花。

シヨビゲ 野ばらの花。

ウキン かなな。

ウネイコ 春三月野に見る可憐な花、白頭翁。野生のアネモネと言ひたい。

カゴシマバナ 百日草。

ビジンソ 右に同じ。しゃつぽん花。

キバナ 女郎花、黄花である、又ノバナ。

ギンデクロ 水仙。銀臺花である。金箋銀臺と云ふ語がある。

ホンジヨバナ れんげ草、又フゾバナ、ゲンゲンソともいふ。

ノコギク 鋸花。葉が鋸齒状になつてゐる。コロモギクとも。

スズムシクサ 秋の草、つきくさ、露草。鈴蟲の壺にこの草を入れる。

タカサゴ 紫苑。語義は不明。

タメサンバナ こすもすの花。爲さんといふ人が紹介したと云はれる。五十年來見る花である。

チゴクバナ 彼岸花、曼珠沙華。

ツンキークサ 松葉ぼたん、摘切草。

トツシャゴ 鳳仙花。

コガネクサ かたばみ。女の子が鳳仙花で指の爪を染める時、この草をも混ぜる。

ヤマジソ えごま、山林に自生する葉の青い紫蘇に類した香氣のもの。少女達は鳳仙花で爪を染める時、こ

の葉で指を包んでおく。

マンダラ 鶏頭花。

マンテシ やいと花、白丁華。

イゲ 刺。又ソゲ。

ク、クイ 右に同じ。。ばらのク、クを踏むなどといふ。

アクシバ びしやこ、比佐加木、灰汁を作る木の意だらうが、今は墓にあげるのが普通。

イノコシバ 奥山にある木で小さな葉の茂つた柴。猪を射止めた時その肉を包むに便利なもの。

ゼンゴシバ 墓にあげる柴の名。アクシバに似たもの。

チカラシバ なぎ、竹柏、大和でいふ葉。

アワザクラ こぐめ櫻。花は至つて小さい。アワは粟であらう。

センツバキ 八重の椿。庭木にする。大和では八重をセンヨと言ふ。

イクサキ、イツサキ 梧桐。

イクサキナワ 梧桐の表皮の繊維で作つた繩。農具として必需品。

インギー あぶらぎり。下駄の臺にする。

インノコヤナキ 川柳、犬の子柳。

ネコンシーボ 川柳の蕾、猫の尻尾。

ウコキ やぶにつけい。本草のうこぎ(五加木)とは違ふ。

ウノハナ 夏の花、あぢさゐ。

カワタバ 無花果の先祖とも云ふべき樹の名。野生、水邊に生え果實は食用になるが形状味とも無花果に變らぬ。

クサキナ 臭木。この若葉は今も食用としてゐる。

クミ 棕の實。小指大の紫色のもので晩秋の候、男兒達は木に攀ち上つて、喜び食する。

クワクワラ 山歸來。

クワクワラマキ この若葉で包んだ黒砂糖入りのちまきを言ふ。

ゲシ からのち、枳殻。又デッキといふ。蜜柑を接ぐ時の臺木になるから。

コソゲイキ 百日紅、さるすべり。少し手を觸れると樹全體が微動する。又ヨメジヨギともいふ。

コメケン 米粒の形をしたぐみ。

サツケラマ さつきの花。

シトツバ 犬まき。この木の柱は最良とされてゐる。

タカイチゴ 木苺より大きな木になる苺。食用にはせぬ。この苺の出来る所には河童がゐると云つて薄氣味

悪く思はれてゐる。

カラタケ まだけ。「からたけ割り」と言ふ時のそれ。

キンチク 根のからんだ節の長い竹で、堤などに見る。昔は火繩をこれで作つた。

コサンダケ 多量に産する竹の一種。釣竿に適す。昔はイザサガキの材料にもした。吳三竹と書いてある。

ゴゼダケ 屋敷の片隅などにある小さな竹。筍は煮しめなどにする。寒竹。

シカクダケ 竿竹程の大きさを四角形をした節毎に刺のある竹。

デミヨダケ 大名竹。竿に適する。

ナエタケ 女竹、なよたけ。

メゴザサ 屋敷附近に生える細い竹で、メゴ(食器入れ)を編むのがその用途である。おかめ笹。

ヤガラダケ 矢にはく位の竹で雑木林の中に混生する。シノメダケとも謂ふ。

ベザ 竹の小枝。

タツノキ にはとこ。萬葉集のやまたづ。

タブノキ、タブ この邊で一番巨大に成長する常緑樹。たも、いぬぐす。

ヘンタブ 犬樟、たもの木の赤色を呈したもので良材である。

クソタブ 犬樟の樹種中、木肌の悪いもの。

ツキダシ、ナベツキダシ 青木。この樹の髓をつき出して子供は色などつけて遊び物にする。

テンボコナシ けんぼなし。

ナスビバナ 紫木蓮。花が茄子の色に似てゐるからこの名を得たものか。マンヂュバナとも言ふ。

ナタオレギ 深林に産す。現在の輸入材チークと同じといふ。鉈が折れる程堅いと言はれる。

ナラメノキ 山の木で赤い實なる喬木。

ナルテン 南天燭。ナンヂュンとも言ふ。

ネンジュバナ 枝の赤い墓にあげる木。

ハシ はぜの木。櫨。

シヨロ 櫨の實で製した蠟、生蠟。

ヒッサゲノキ 赤目柏。ヒッサゲ(神祭の折の甘酒容器)はこの木で製造するもの由。

ヒツジノキ 子供の遊び物に使用する以外用がない木。セッコンにはこの木が一番よいと言つたもの。

ヒメツバキ 山茶花。生産的に植栽してある。實は油になる。倭名抄のひめつばき(女貞)と同じか不明。

カタシノアブラ 椿油。各家でアブラスメキ(油を取る道具)で採取して、多量に貯藏しておくのであ

つた。カタシは即ち椿の實。

フフノキ もつこく、厚皮香。

ヘガラ うづき。

ベンケイト 紅白の花が一本の木に咲く桃。もとは紅白源平の桃のゲンベイがベンケイトと轉倒したものだと思はれる。

ホサ 檜、ほぞ、柞。

ホシチクワ 木槿の木。

ホンシヤカキ おが玉の木、本榊。

マツコノキ 櫛、抹香の木。

マテノキ まてば椎。この地方特有の木、薪にする。

ミタケツツシ 舊三月上旬頃三千尺の山の上に咲くつじ。色は紫で葉はまだ出ない。

ムキメシバナ あせび、馬酔木。花の形が麥飯に似てゐる。

ムクユ むくろじ。

モクシン 木犀の木。

ヤマダテ 灌木の名、葉の青い實の赤いもの。

ユスノボ いすの棒。非常に堅い木で是で作つた棒は丈夫な棒としてゐる。

ユスノヌケ この木の永く地中に埋れて、堅緻になつたものの名。

ユスベ この木を焼いた灰。陶器製造に使はれたこともある。

サンノフエ ユスの木の葉にいつしか出来る鶏卵大の中空のもの。猿の笛である。子供等は之に穴を明けて吹き鳴らしたものだ。

カチバ 枯葉。

カチバがあがる 葉が下枝から段々枯れてゆく。

カザバナ 秋の頃櫻の花など咲くこと。猛鷗風があつた後の現象。

コワキ 堅木。樫、ユスの如き。

ナイキ 果樹、生り樹。

ベラ 木の小枝。

ユラ 材木の根から枝のついた所迄の間の長さ。ユラがあるとは幹が長いこと。

ノキ 木の幹。

ネット 木草の根つこ、又ネバイといふ。

スツテン 木の梢、頂上、チョッペンともウラともいふ。

ツツケン 木の梢又は物の尖端。ツキともいふ。

○

アケス 蜻蛉。又ボイといふ。

シヨロボイ、ボンボイ 盆の頃出る蜻蛉。シヨロは精霊。

パボタ 鬼やんま。木深い道路を上下するので、子供はそれを待ち伏せて捕へる。

カナンバ お羽黒とんぼ。

アマメ 油蟲。膳棚に殊に多く棲み、糞をひり散らして極めてうるさい。

イソアマメ 磯邊に無数に棲む蟲。舟蟲。

アメウイジョ 水上に棲む蟲、あめんぼう。

モンメンボ 水上の蟲、水すまし、まひく。

イヤイ 蟻の總稱。和名抄に赤蟻イヒアリとある。

スガイ 蟻の中、陰濕の地を好み、色黒くして人の肌を刺し痛感を與ふるもの。

ドクツシ 白蟻。雨のかゝる所に松材を使用すれば、家は必ずこの蟲に倒されると昔から言はれてゐる。堂

崩しか。

イラ だに(牛蝨)の子か。目に見えぬ位のものであるが體につくと痒くてたまらない。牛をつないだあと

などに多し。

ウグツナオ 青大将、大くちなわの訛か。

オトボ 蛇と同じ頃出て同じ様に見えるが害のない蟲、同じ所に久しくとまつて居る。空中の餌を捕へれば

また元の所に歸る。

オンガメ かまきり、蟻螂。

アシマキ 蟻螂の腹にゐる寄生蟲。黒元結に似てゐる。

ギメ 秋の蟲。ジーと長く聲を引いて鳴く。

ギヨクゼ 蝦蟇。又ワクドと言ふ。

ドンクオ 蛙。ドンクオビキともいふ。ビキも蛙の總稱。

ドンクオンゲイ お玉じやくし。又ゲイノコと言ふ。

タカシトビキ 殿様蛙。

ギヨツキヤレ いもり、あかはらに同じ。

クダマキ 秋の蟲、がちゃく。

クロツツ こほろぎ。

ケサガメ 斑猫、道教へ、又ニワタロといふ。秋晴の庭に出て來るからか。

ゲズガンボ げじく。

ゲダ 鰹節に穴を明ける蟲。

コブ 蜘蛛。

キンコブ 細身長足の黄色がかつた蜘蛛。

ヘトイコブ 蠅とり蜘蛛。

ヌスドコブ べた蜘蛛。悪いこともせぬが決して好感を持たれぬ。又之を恐れる人にはこの蜘蛛の目は夜

間強く光ると聞く。

ヤマコブ、 ヤマケン 女郎蜘蛛。子供はこれを捕へて来て喧嘩をさせて遊ぶ。

ヨロコブ 夜間出る蜘蛛を縁起よく呼ぶ語。

コブノヤネ 蜘蛛の巣、くもの網。

ゴマバチ 地下に巣を作る黒色の小さな蜂。

シジナ みずの中、鮎鯉を釣るに用ひる細く長くおとなしいもの。

シマミミツ 横に無数に縞のあるみず、鰻を釣るに用ひる。

ヤマミミツ 山に居る大きな青色の蚯蚓。

ジツツク 秋の蟲、すしつちよ。

タカ はた〜。 ばつた。

ジョイムシ 草履、下駄その他朽ちたものゝ下に棲む蟲。青白い色の遅鈍なもの。

シヨジョへ 臺所などにゐる小さな羽蟲。言海に「しやう〜」とある。

シンシタメ 人の死ぬ前後、頭髮の中から這ひ出して来る虱。

スモトイムシ 砂地に穴を掘つてゐる黒い蟲で、子供は之を捕へ互に咬み合ひをさせて遊ぶ。

シヨシヨセビ かたびら蟬。

ツボムシ、 ツツボムシ 蟬の幼蟲。夏裸足で草の露を踏むと足の裏に小さな穴が多数出来るが、之はこの蟲に食はれる爲だと言つてゐる。

チュチュメロ

胡蝶、蝶々女郎。

ゼンチュチュ 翼に圓い紋形のある蝶で、之が家の中に入ると縁起がよいといふ。錢蝶々。

ツケラメ、 ツンケラメ 蝸牛、でん〜蟲。

ヌイ 草花の若芽の所に塗り付いた様に附着して動かぬ蟲。ありまき、あぶらむし。

ハナカス 井戸端の様な濕地に居て、犬などの鼻の孔に入るといはれる蟲。

ハナヨメジヨ 夏季草叢の中などにゐる長さ三四分、蒼白色をなした羽蟲。害もせず極めて可憐な所から花

嫁ぢよの名を得た。

ハラキームシ 垣根や木の根方に長い袋を作つてその中に棲む蟲。捕へると自分の腹を咬み破り白い汁を出

す。腹切蟲。

ホチヨ 毛蟲。又ヒゲムシ。

ピンピンコ ぼうぶり蟲。

フ くさがめ。手に觸れたら臭い蟲。

ブックイムシ 蟻地獄。唾でも吐き込むと砂の中で先づむく〜するからの名。

ホサムシ ホサ(柞)の木につく蟲。捕つて小鳥に食はしてゐる。

メヌツベ ぶゆ。五六月の頃目の中に飛び込む、大和のめなぶり。

クサイ 鈴蟲の鳴聲の一連。鈴蟲はこのクサイの長いのをよいとしてゐる。

アオムシ 鱗の青色をした魚類の總稱。鯖鱈の類。
アカムシ 鱗の赤色の魚類の總稱。鯛など。
アキタロ かちき。又ゲンバ。
エソソイオ 狗母魚。乾物が多い。
キタカ 海の鰻。
グチ いしもちの一種。
クツナ 甘鯛。上等品は郡内内之浦に産し昔は殿様にあげたと言ふ。
チン 黒鯛。
チャンブク 河豚。
トンキユ 烏賊の異名。
フネ 烏賊の甲。
ノボイコ 白魚。春川をのぼる所を網でとる。
ハラジロ 鰻の別名。
ジツク 磯巾着。
ナミノハナ 海綿、スポンジ。

ヒュタンモ 海草、ほんだはら。
アイカケ 川魚、かまきり。ひれに刺があつて、鮎が掛るといはれる。今至つて少い。
アサセンバジヨ 鮠の雄が夏交尾期に入つたのを言ふ。體色赤みて行動非常に敏捷なのを淺瀬に見る。
フト、フトゴロ 清水にゐる小さい魚で食用にならぬ。あぶらはや。
アブラメ 山椒魚。
イシナメ あいなめ、石斑魚。谷川の岩の上に動かすにゐる。
ガシクレ 土地に居つきの鰻で頭が大きく美味でない。谷川などに棲む。倭漢三才圖會に蟹喰鰻の名稱がある。
コンゲイ 鰻の子で四五寸の長さのもの。
トコウナキ 冬間海に下らぬ鰻。
ノボイウナキ 春になつて海から上つて来る鰻。トコウナキに對す。美味。
タカラゴ 鰻の一種。身長著しく短く、割に大きいのが居る。
ハンタウナキ 非常に巨大な鰻の名。重さは二十數斤にも上る。普通の鰻の様に長くなく、タカラゴと同種類かと思ふ。味は大味の方で油も多くない。柱鰻。
エブナ ぼらの子で長さ三四寸のもの。江鮎。
ガナクロ 體一面に黒く頭大きく、清流の砂中に棲む二三寸位の魚。
クツ 鰻。石鰻の類。カメといふはすつぽんのことである。

クッドン 飼つてゐる龜を親しんで呼ぶ語。

ガンドクツ 巨大なる泥龜。

ゼンクツ 泥龜の子で、甲羅のまだ固まらぬもの。

ジヨモ、ジヨモキチ どりき、いしぶし等と言はれるもので淡水産のはぜ。

ズナメ 小溝の魚、めだか。

ソエビ 河に棲む蝦の一種で長さ一寸位のもの。

ダクマエビ 淡水産の蝦の中で一番大きなもの。

ヌベ 傳奇的な河魚で、尖つた口先は船をも貫くと言ふ。

ユダ うぐひ。

オバチ 魚のひれ。又ハネといふ。

ベンガネ 赤蟹。

ヤマタロガネ 蟹の強大なるもの。鉏には毛が密生してゐる。

イシゲ あさり貝。

インタラゲ 板屋貝。

マンヂユゲ 子安貝。

ナミゲ みな、蜷。波貝。

ゴミナ 川や溝に居る長手の蜷。河鹿の聲は、この貝の吹く泡が破裂する時發するのだと信じられてゐる。

コシユビナ 先のがつた小さな胡椒の形の蜷。

タミナ 田にし。

アサヒキ 河原龜。

イシタタキ、イシタタキノタロゼ 背黒く腹の黄な鶺鴒に似た鳥。古語にはくなぶり。タロゼは太郎左

衛門である。

ウマンカンサー イシタタキの異稱。馬の神様。

カワビッシ かはせみ。

キツクジ 啄木鳥。

クイハカリ 山中の鳥。啼き方が栗を拵で量る様にカラ／＼と云ふ音を出すので此の名がある。實は啄木鳥

だと言ふ人もある。

クロドイ 夏の田にゐる小鳥、ばん。

ケツブ 水鳥、かいつむり。

ケンツケドイ 勝負鶏、軍鶏。

コノツキトクオ 梟。フクロとは云はぬ。メン(お化け)の次に子供の怖れたもの。

サトバト きじ鳩。里近くの樹林に一羽々々別れてねぐらにつく。羽毛は赤味を帯ぶ。

トバト 家鳩。唐鳩か。

チエチヨドイ 鶏の群で主人顔する牡鶏。

イボイ 鶏の砂浴。

チエツチ 藪鶯。その鳴く音から名を得た。

チンチン 冬の小鳥、やぶのしこ。

ツクシ 冬の鳥、つぐみ。

ノックシ 野にばかり居るつぐみ。冬はこの鳥の聲をよく聞く。普通のつぐみは山陰にゐる。

ミヤマツクシ 冬季渡つて来て山中に居るつぐみ。

バカサキ 鶯。晝間見る鳥ではなく、夜間渡る時の聲のみ聞く。

ハナスイ 目白。この鳥は冬季里に出て来て棒の花に群をなして花の蜜を吸つて居る。

シモバナシ 霜の降る頃無数に里に渡つて来る目白。ワタイバナシとも言ふ。年中囀るのをトキワといふ。

ハナンカンメ 冬の小鳥、えなが。花をかぶつた様な頭の恰好が目につく。

ヒンカチ 冬の小鳥、ひたき。牡鳥がヒンと言へば牝鳥はカチと言ふと稱せられる。

ミソツチュ みこそさい、さそぎ。

ムッキ 椋鳥。

メジロ 春の小鳥、頬白のこと。

モスギチ 百舌鳥。

ヨサキ 五位鶯。

クラゲン 目白の低聲の囀り。

タックロ 春から夏にかけて目白の高囀り。

サーヤレサーヤレ 早く寄越せ〜。雲雀の鳴き聲。これに對して頬白の答が次にある。

チンチンカエシマシヨ 少しづつ返しませう。頬白の啼き聲。雲雀に對する答である。

トツテスツクラエ 鶯の啼き聲で、「捕つて食べてしまへ」の意。之は雲雀、頬白、鶯の啼き聲と並べて小鳥

の聲をお伽噺的に述べたもの。

チクワククエー 鶯の啼き聲。

チチクエーチチクエー 四十雀の啼き聲。

シークエシークエ 右に同じ。

ホンゾンカケタカ 時鳥の聲。

オラビヤワセ 小鳥の啼き合せ、オラブは人、鳥、獸を通じていふ。

オシエ 小鳥の揺り餌。

オシエスイバチ それを揺る時の揺鉢。

ヤンモチ とりもち、糲。

モモゲ 鳥類の胃袋、ももぎ。

ヨボシ 鶏などのとさか。

ワタボロ 水鳥にある綿毛。ホロは鳥の羽毛のことである。

オツツ、オン、オンツ 雄、牡。

メツツ、メン、メンツ 雌、牝。

イタテン 躰。

シシ 猪鹿の區別なく言ふ。

ダンザ 狸の別名、狸には彈左衛門と言ふ別名があつたとき。

チ 貂、てん。

ヨモザル、ヨモ 猿の別名。

サルノセンツナギ 密林の中で猿が群をなして梢を渡ること。まるで大風の吹く様な音がすると聞かされ

たものだ、今は如何か知らぬ。

モマ もんが、もみ。

コンコン 狐の機嫌のよい時の啼き聲。

クワンクワン 狐の機嫌の悪い時の啼き聲。

ヤスネコ 赤と白と混合した毛色の猫。

又 猫の性質能力。猫の仔の頸を掴み上げた時後脚を行儀よく曲げれば、又の良い猫だといふ。

ハシカイン 狂犬。又人に喧嘩を吹きかける様な男をもさういふ。

タツゴエ 犬の遠吠。

タバキ 犬や猫の嘔吐物。嘔逆の意味の、タマヒといふ語が醫心方にある。

ゴキ、ネコンゴキ、インノゴキ 犬や猫の食物入れ。昔は御器、五器と書いて單に食器であつたのだ。

コッチウシ 牡牛、特牛。子供の最も怖れるもの。

ツッゴロウシ 特牛のうち、特に獐猛で人にかゝつて来るもの名稱。こんな牛は角を切り落し特別に熟練

した人がダシ車(地車)に使ふのが常である。

ニドガン 牛の反芻、二度がみ。

ススカケウマ 馬の尻の所にジャラ／＼いふ鈴をつけて飾り立てた馬。人を乗せる時に特にこの飾りを施し

た。

セドギチ 痩せた腰のすばまつた馬。

ダノウマ 牝馬。駄馬ではない。

ダノウマセメ 陽春の候、牡馬が途中牝馬を見て發情し狂ひまはること。婦女子の力には負へぬ程猛烈な

ものと聞く。

ウマンチトイ 農家中行事の一で、初夏の頃部落の馬を一ヶ所に集め、針を刺してその悪血を除去するこ

と。

デラ 馬の病氣。馬の病氣はデラ一種の様に思はれる程耳に熟してゐた。

ツナマキ 馬を野につないでおくと、その綱で自分の足を巻き、その爲不慮の死を來すこと。

ハミ 半熟の米、野菜の切り屑その他を大鍋で煮たもので牛馬に與へる。

ニゴイ 茶大根の切屑やら、碗皿の洗ひ汁で、牛馬に與へるもの。

ニゴイタメ 臺所に在つてニゴイ水を受けるもの。昔は大きな木を刳つたもの。

ニゴイタンゴ タメからニゴイを汲取つて厩に持ちゆく爲の水桶。

キータメブネ 馬牛の糞を剪り込んでおくもの、多くは椎の大木の空洞になつたものを利用した。

ブイジョケ 馬牛にやるまぐさを入れて厩に運ぶ筈。

イツサングネ 馬の頸につるした鈴で遠方までその音は聞えるのだつた。

コネ、ウマンコネ 馬のたてがみ。

オバナクイゲ 馬の毛色で、栗毛の中に白い毛の混つたのを言ふ。

カワラゲ 白に少し黒の混つた馬の毛色。

サメンウマ 馬の毛色。全體白い上に、鼻の先や陰囊のあたり所々に赤い膚色をしてゐる、目の色も赤い。

シタビラ 馬の荷鞍の異稱。

シタビラドン 馬の荷鞍をつくる人。

コマゲラ 荷鞍に對して乗馬用の鞍をいふ。

ダシ 道の悪い所をも厭はず、重量の物を積んで牽かす牛の地車。お祭の山車ではない。又ダシグルマとい

ふ。

○

ケネヤマ

家の四周にある樹木林、防風の爲殊に大事にしてゐる。持主は最後まで手放さぬといふのが一般通念である。又ヤネヤマ。

イザサガキ 竹の中、殊にコサングケで出来た垣を言ふ。イザサは竹の枝一般に通ずる。

フタエガキ 特有の垣根で、内部にイザサで垣を作り、間隔三尺をおき、道路に直接した所に生垣をなす。

戦國時代城下の遺風ときく。二重垣。

コセ、コセモン 小さな門。

ソノ 屋敷内の蔬菜園を含めた一帯。

ソノミチ 他家に抜ける裏の出入口、門もありやなしやで通行自在。

ニワツラ 庭のあちこち。

ニワツラをさるく(歩く)ごつ(やうに)なつた 病人の恢復期などにいふ。

ハワキダメ 掃溜め、塵芥の掃き捨て場。

ツブキ 一家の下水なり、雨水なりを溜める爲に掘つた凹所、蚊の飼育所で非衛生極まるもの。

ツリ 井戸。

ツリンミツ 井戸水。

クルマキ、クルマキイド 車附きの井戸。

ツリコシタエ 井戸さらへ。

ヘゴヤ 落葉糞の類を焼却する獨立の屋形で、住宅からは離れた所にある。平常は仕事場にもなり、遊び

場にもなる。

オダレ 家の軒先。

エノソラ 家屋の屋根。

ソドントグチ 小座又は納戸から裏庭に出る戸口、家屋の裏口。「たましやソドントグチ」と言へば事物の

表裏を知りぬく人といふ意。

フンゴミ 玄關、踏ん込み、フンガマチで庭と仕切られてそこに戸がたつ。

フシホゲ 壁や戸の節穴。

メド 妻戸。

ツシンバシタ 非常用に、倒壊防止を目的とした大きな柱。

ウスニワ 土間、屋内の土間に白のあるのが農家では普通であるから。大和ではニワ。

パンコ しやうぎ、縁臺、涼み臺。

アシツキ 踏み臺。キャタツともいふ。

オシマキ うすべり。

シキミ 疊と疊との間の所。敷目であらうか。

ナカエ 普通の民家は棟が二つで、上等の方がオモテ、下等の方がナカエである。ナカエは圍爐裏のある所で、座敷と白庭とに別れ、家人の食事場兼仕事場である。この二棟の連接する所がツイノシタである。

ツイノシタ オモテとナカエとの間の所。板敷もあり疊敷もある。樋の下。

オモテ 民家は普通二棟よりなるが、その内お客でもする方の上等の棟をいふ。表座敷。

トコンマエ 床の前の座敷、奥座敷。シヨエンともいふ。

シヨエンノニワ 表座敷に面する庭。築山も含まれる。

トコマツ 床の花瓶にさす松で、よく生長した所を眞直に立てる。

ザナカ 座敷。

コザ オモテの家の、神棚を安置したり家人の寢所としたりする座敷の名、小座。

センゾダナ 先祖棚、神棚に同じ。各家佛壇なく神棚は必ず小座にしつらへてある。

アラケ 老人の居る隠宅に對して若者夫婦の住む家。トヂユ(當住)ともいふ。

ゴミウチ はたき、さいはらひ。

ザフキ 雑巾。

セングノシヨドク 家庭日用諸品一切。

モモダガン 普通的美濃紙大の紙。百太紙と書く。

モチガン 元結にする爲の紙。厚手にすいた廣い紙。

フツガン 手習草紙。

ヨイコ こより。觀世より。

イドン、ユドン 臺所、但し一般には使用せぬ。

アレムンドコ 臺所。洗物所の訛か。
シダシ 主屋につき出して建増した所で、物入れ、倉庫などに充てる。
ツシ、エノツシ 屋根うら、大和でも用ひてゐる方言。既のツシには藁、住家のツシには米糶の俵、及び
乾物等が載せてある。

ヨギタナ 押入れ。

キヤクザ 圍爐裏のもとで客や家の男兒の坐る場所、客座。

ウツザ 圍爐裏の配膳等に適し、主に婦人の坐すべき方面の座位。オナゴザ、チャノザとも言ふ。

トキジリ 圍爐裏の最も火に遠い所。下男などがこゝから手をのばして火に當る。

ハンツジ 表座敷に圍爐裏が設備してあると、その末の方の位置を言ふ。

チャダナ 茶棚であるが、これは表座敷の圍爐裏もとに取附けた棚。一般的には見られない。

コザル 自在鍵の中の鍵をうけとめる木。樫を普通とする由。小猿。

コゲ 自在鍵を上から吊るす時さし込む小丸木。普通ホソ（杵）を用ひるといふ。

タキムン、タツケン 薪、まき。

トキ 圍爐裏の火種の盡きるのを防ぐために堅木の特に大きなのを一本加へておくが、これは二三日は保つ
位で、若し火が要らなくなつたら灰をかぶせておく。これを言ふ。節くれ立つてよく割れない木をト
キにした。

タキスポ 灰かぐら。圍爐裏で枯葉のついた枝など焚くと、火の消えない葉が上にのぼり、灰となつて落ち

るのであつた。

シユエン 煤烟。

ヘグロ 鍋釜の底に黒く附着した煤。

アクベ 熱灰。この中に手を突込んで火傷する話は常に聞く所である。

ツケダケ 附け木、チケツともいふ。

ランツケギ、オランダツケギ 燐寸。又スイツケギ。

ヒヨコシ 火吹き竹。

ヒカキ 十能、火掻き。

ホクソ 火事の時遠くにとぶ火の粉。

ホタ 椎樫などの木質が變化してぼく／＼と軟くなり、火を付けると何時迄もいぶつて消えない。従つて烟
草好きは、その火を持參して野山に出掛けた。又この烟は毒蟲を拂ふ效能がある。

ヒウチカド 燧石。

オコツズン 木炭。

ゴヘタ 石炭の前名。

シノキズン 椎の木の木炭。鍛冶屋にのみ使はれる。

アカシ 松の中心を細く割つて照明に使つた。屋内夜間の仕事はこの火の明りでしたのである。

ツガマツ、マツノツガ 肥松。照明用にした。

ジン 燈心。

ツゲザラ 燈心の油をつぐ皿。銅製もあり板屋貝もある。

セキタンアブラ 石油。

フロヤ 別棟に建てた風呂屋形。

スエフロ 便宜な場所に風呂桶を持つて来て湯を沸かすこと。竈のフロと區別する時用ひる。

フロジョユ 他家の風呂に入れて貰ふこと。

ツプロ 風呂の火を焚く鐵製の釜。

ビンダレ 樽に竹の輪を入れ高い三脚のついた盥で、用途は金盥と同じ。男子用(オトコビンダレ)と女子用

(オナゴビンダレ)に別れ、男子用は脚の高いのが普通であつた。

カンジョン 便所。但し一部海岸にのみ用ひられる語。上品な語としてはチュドコイ、マナカがある。又

ユシドコとも。

チュギ 桶のたがをはめる時、不用になつた青竹の肉の部分五六寸の長さに折り、便所に多數保存して大

便を拭ひ取る。今人之を用ひず。竹であるのに木と言ひ習つてゐる。

チュキバコ 使用後のチュギを投入する簡單な箱。吹出物がしたら、このチュギを焚いてあたらせるとよい

と言はれた。

チュキダナ 便所の前面一尺位の高さにしつらへたチュギ載せの棚又は箱。

コイタ 杉丸太を二尺位の長さに挽いて薄くへぎ取り、以て屋根を葺く。其上に瓦をのせるのが普通である

が、その儘の家も多數ある。小板。又ヒラキとも言ふ。

タツゴラ 大きな孟宗竹を眞二つに割り、それで葺いた屋根。フロヤなどの屋根が主である。

ノゴメ 屋根にコイタを葺く時、その釘の止る様五寸おき位に二寸幅程の薄い板材を下に打つたもの。

ツツバイ つつかひ棒。特に颱風に家が倒れるのを防止する爲のものは、丈夫なのを多數の家で常備してゐ

た。長さ三間位の丸太で之を梁の所へあてるのである。

ツヨチ 補強材。

アブチ 垣など作る場合、その横にわたすもの。竹ならばアブツダケといふ。

ウドコ 家屋の重みを増して暴風に耐へる爲か、民家の床の下には巨大なる材木が横に柱と柱との間に渡し

てある。大きい程良いとしてゐる、その材木の名。

オモノイ 土止めの丸太など簡単に横に伏せたもの。

ネイシ、ドテイシ 礎石。

ヨサイヨ 家屋の地突き。地突きの唄を歌ひその後でヨサイヨ〜と言つて突くからこの名がある。

ヨサイヨウタ 家屋の地形固めの際に詠ふ歌曲。顔を灰で黒く塗り酒をかぶつて、景氣よく歌つたのであ

る。

ドンチフシ ドンチ即ち大槌で堤の土を固めるやうな時に歌ふ唄。

ケンジ 家の新築、屋根の葺き換へ、墓建などある家に、儀禮上他から持参する酒肴を言ふ。

ジョシエ 落成の祝。成就祝であらう。

スエクバコ 大工の道具入れ。細工箱。

バンジヨガネ 大工の持つ金ざし。番匠金。

イリ 錐。

キヨガナ 仕上げの時に用ひる鉋。

ランクキ 西洋釘、之と區別して鐵を打ちのばして作つた釘をカナクキ。

ドンチ 木製の大槌、かけや。

ワラツゴロ 繩を縛ふ藁を打つて軟くする木の槌。

○

イシヨ 不斷着る着物一切。衣裳。

シヨグワツイシヨ 正月に家人が織つて縫つて着せる衣服。始めて着る時は清水を口中に含み、それを霧に吹いたものだ。但し五十年前の事。

オビキン 生後百日目に餅踏の式あり、その時着せるもの。晒の白木綿の背に五色の絲で十六むさしの様な形に繡をしたチャンノ〜で、夏はこれ一枚着せておく。産衣か。

チヨチユギ 不斷着、常住着。

オツギ 漁師が沖で着るとんざ、沖着。

コダナシ 男女共に労働服をいふ。筒袖で臂が隠れる程の長さである。

メダレコダナシ 婦人の野山ゆきの労働服の意で、「メダレコダナシで働く」と云へば、婦人が労働服甲斐

甲斐しく働くの意。

コシギン つぎはぎのした作業服。

マキソデ 袂のない仕事着。巻袖。

テップソデ 筒袖、筒つぼ。

タイチュノハツピ 大漁の時網場の持主より祝儀に與ふる着物。

コシヌギ 肌脱ぎになること。

コシヌギないやい 肌ぬぎになつて下さい。

ウギ 厚着。

ダフクラ ふくらみ。綿入の着物にダフクラがよるといふ言葉がある。

ヨイダゴ 衣類の縫ひ方、着方、又は綿の入れ方がまづくてよれ〜になつて固まつたのをヨイダゴが出来

たといふ。

ヌストエイ 着物の衿が折重つてゐること。

カタメスタダイ 着物の裾が一方だけ著しく下つてゐること。

オットクイ 帯の解けた儘の状態、子供が帯を結ぶ間もなく外へ飛出さうとすると親は「オットクイでどき行くか」と怒鳴る。

ウドコンオビ 丸帯の古名。仰山な錦糸入りのもの。嫁入の時など大金を出して買ふ。

ウシトオビ 明治年間婦人が稀に前帯を廢して後結びにしたこと(儀式ばつた時など)。西鶴の物などに出て

ゐる。今は皆が後帯だからこの語の用がなくなつた。

シロスゴキ 白色のしごき。木綿でも白しごきを帯に巻き垂れるのは贅澤とした時代があつた。

シットキムスビ 一寸引張れば解ける様な帯の結び方。

イッケオビ 子供を背負ふ時の帯。

マブリ 子供の着物の後襟に縫ひ附けたかざりの様なもの。

ツケオビ 子供の着物のつけ紐。

シタシ 襦袢、おしめ。古いきれを四角に切り雑巾の様に刺してあつた。

マエアテ 前だれ、前かけ。

メダレ 婦人の腰巻。多くは黒がかつた大きな縞のぼんやりしたのが普通である。シタムンともいふ。

シタムンダレ シタムンのみ洗濯する鹽。

キヤクバコ 婦人の腰巻や足袋などを入れる箱。

ツイダンナ 越中禪。

ナラシ 室の一隅に竹を横に吊るして衣服など掛ける様にしたもの。大和ではナラセ。

ナラシバン 砧の臺。

オトコザオ 男子の衣類を干すと定められた竿。無論オナゴ竿もあつたが、今は嚴格ではなくなつた。

オトコダレ 男盥、即ち男物のみを洗濯するに使ふもの。オナゴダレもあつた。

ホコレ 着物の綻び。

フセ 衣類にあてるつぎはぎ。

オイロ 黒染の絲で織つた反物。

メクラコン 黒木綿。織つてから染めるもの。

ユキモンメン 白木綿。

キチジマ 今銘仙といふ織物の古い名。

ホソシカタビラ さつま上布。ホソは琉球で出来ると聞く。

オーメサントメ 昔の貴重な織物。俚語の中に出づ。ニトメサントメとも言ふ。

焼酎さへのめば身は裸でもニトメ(或はオーメ)サントメ着た心地 古語。

サアイ、サアイノユゼン メリンス、唐縮緬とも言ふ。

コントシ 昔の織物の名。縞子に似てゐた。

トンビヤン 唐渡りの絹の織物。

ヒキワタ 眞綿。

シハントヌギ 四半手拭であるが、五尺手拭の四分の一の長さであらうと聞く。普通の日本手拭と差なし。

ユズイテヌギ 普段使用して居る手拭。

ミゴシテ 婦人のおつくり、おめかし。

ピンバイ 昔のお嫁さんの髪結び方。鬢張りか。

ウツプロガン 婦人の髪を亂してゐること。近松語彙に「おつぼろがみ」がある。

オクレ 婦人のいてよ返しなどの前髪。

ガッコマゲ 少女などの髪のかき方。桃割れ。

サバツグシ 解き櫛。

ヒツサーレ すき立て櫛。

カネ お齒黒。

カネツケボロ お齒黒をつける鳥の羽毛。

カネミツ お齒黒用の鐵水。

ツボガサ 主に婦人勤勞者のかぶる笠で、竹の皮で深く作つたもの、さうして脇に玉蟲の羽を挟んでゐるの
が著しく目についた。

タカランバツチヨ 竹の皮で作つた野山行きの笠。雨にも晴にも用ひる。ばつちよ笠。

ニワタロ 竹の皮で作つた特に大きなかぶり笠。

コバガサ 檳榔の葉で出来た笠。菅笠に似て居る。又ビロガサ。

サシガサ 柄のついた雨傘。カブイガサに對して言ふ。

ランガサ 蝙蝠傘。

テヌキ 指貫き、手袋。

ユビガネ 指環。

フゾ 小切れをつぎ合はせて作つた小さな袋で、老嫗の烟草入、金入などになる。

トンコツ 烟草入、牛の角又は桐材などを刳り蓋をしめる様にしたもの。濕氣が外から侵入せぬので愛用す
る向がある。

キセイザオ 烟管のらう。

ツツバサン 根つけ。

カチカイハダシ 徒歩即ちはだしを一層強める時の語。

カツゲタ 薩摩下駄。角下駄。

クイデ 竹の皮を編んで表にした下駄。上等ではない。栗臺ではないか。

スツクレゲタ すりつぶれた下駄。

ヤマジョイ 野山ゆきの尻切れ草履。

○

ハタクムン 米、麥、豆など粉にしたもの。ハタクは動詞。

ネイホ さつま芋の煮たのに蕎麥粉少量を加へて煉り交ぜたもので、寒中に食べる。

ソマゲ そばがき。

シトキ 白米を粉にして作つた團子、黍。棟上げの時に撒く。古語。

ハナダゴ 舊六月一日龜ン子配りの日に出来る團子、形が三角形になつて鼻に似てゐる。

アレツケモチ あべ川餅。この場合のアレは黄粉にあたる。

アレ 餅をつく時使ふ米の粉。

セン 餡、小豆のセンなどといふ。

テイレ、テマゼ 餅を搗く時の手ませ。

アブイモチ 焼いた餅。餅はヤクと言はずアブルといふ。

キイモチ かきもち。

マキ ちまき。

アクマキ 米を灰汁に浸し、竹の皮に包んで煮上げたもので、初夏に作つて食べる。

コシキノメシ 甌で蒸した飯で、バラ／＼して中々喉を通らぬもの。多人數のお客をする時出す。

ニヌキ 重湯。

ヒヤシル 麥飯にかける物で、すつた味噌の中にら、紫蘇、「トイモ」の細かく刻んだのを入れ、そのまゝ煮

ないの言ふ。

シメムン お煮しめ。

ドロゲ 煮物の鍋の底にどろ／＼と残つてゐるもの。

コガヤキ 卵焼。

ツケアゲ 鯛をすりつぶし、之に牛蒡、人参、さつま芋等を包んで油で揚げたもの。素朴な平民的なもの。

ユナマス 竹卸しで大根を卸し、うるめの乾燥したのを細かく切り、酢と水とで煮上げた冬のおつけ。湯臈。

ケンチャンナマス 大根や人参を細かく切つて油でいためたもの。

ガッセ 精進の臈。大根や人参を刻み込んだもの。さつま芋も用ひられる。

アレムン 色々の野菜をゆでて水を切つて細く刻み、それに味噌豆腐を適當に混ぜて摺り合はせた食べもの。

ヨゴシムンとも言ふ。

ミソコロバカシ 味噌あへ。

スヌタ 味噌をすつた上に酢を加へたもの。

スヌタアエ その和へもの。

ヌタミソ 味噌をすつて酢、胡麻など入れ混ぜたもの。

サンベツケ 三杯酢。地酒と酢と醤油とを混ぜたもの。

ヒネイムン 蕎麥などに入れる色々の薬味。

コツ 冷素麵の薬味に青蜜柑の皮を用ふるその名。太平記に鴨頭とある。

ケシン 肉桂。桂心である。

コシタエ 料理の折魚鳥の肉を處理する事。墓、井戸などの定期的修理にもいふ。

コゲ 榮養、滋養。

カンキキ 試食する。味の如何を見る。

キツネゴガレ 狐色に焼けこげること。食物の場合に多く用ひる。餅などのよき程の焼け具合を言ふ。

シオケ 茶と共に出すのは甘い物より鹽氣の方が普通で、梅干、澤庵、又煮た物をも出す。菓子を出すのは

改つた賓客に對してのこと。チャジオケと同じ。

クワシコガレ 菓子その他。

フクレグワシ 家々で作る菓子で、曹達を入れてふくれ上つたもの。

オカン 農家自製の羊羹とも言ふべき菓子で、年忌の折、小豆に黒砂糖を混ぜて作る。

カタキ 一回分の食事。

まだシトカタキもしたさん まだ一回分の食糧程の備けもない。

ヨナガイ 夜間特別な場合に食ふ食物。

メザマシ 寝る前に食ふ夜食、夜更にする家に見舞におくる食物。

ツモイジョク けちくした考へから、一回分の食量を限定して、それ以上食べさせぬこと。

シヨユ 御馳走。年忌、祝宴、何れにも通ずる。請用であらう。トイモチとも言ふ。

チャジヨユ 一寸した御馳走。茶請用。

セツコンジヨユ 招待されぬ宴席に飛入り、御馳走を受ける無禮講。むしろ歓迎を受けたものだ。

シヨユンフダ 人を招く案内の小さな紙切れ。

ヒノトイモチ 大御馳走。火の取持。

あすき(彼處へ)いたらヒノトイモチおた あの家に行つて盛んな饗應に逢つた。

トイモチコロシ 十二分に御馳走すること。

ブエンキ 御馳走。

ヨツゲンノヂユイ 本膳の御馳走。四組の料理。

ドシメキ 絃歌亂舞を伴ふ酒宴。サカモイとも言ふ。

ハチゲワツナベワイ 端境期の農民は、はや前年の米が盡き、止むなく早稲よりも遙かに早く熟する赤色の

稲の穂をしごき取り鍋に入れて乾かす。その時火勢が強過ぎて鍋が割れてしまふ。舊曆八月にはよく

あつたことである。

ハナヒラキ 何か祝事にあつた折、二三人組合つて踊りでもして、貰つたはな(金)を以て後刻酒食の用に供

すること。

ホネアレ 宴席では最初魚類の吸物が出る。これを済ますと給仕はこの骨の残つた椀に酒を充分に注いで廻

る。この酒の名。骨洗ひである。

ウイザケ 十分酒を飲んだ後、又更に飲む酒。追酒。

ダイヤン 晩酌、だれやめ。

シャク 玄米、黒米。

クツノカネ 葛粉。多くはさつま芋で製したものである。

カテムン 副食物、漬物。ソエムンともいふ。飯汁以外のつきものをいふ。

カンツケ 大根を割り、鹽に漬けて後、寒中に取り出して軒に吊るして乾上げたもの。美味である。寒漬。

カンビユ 里芋の莖の表皮を去つて乾したもの。冬瓜を切つて乾した物ではない。

コマギー、コマギーデコン 大根を絲の如く切つて乾燥したるもの、剪り乾し。

ブエン 生魚で鹽氣のないの。野菜には言はない。無鹽。

ガラソツ 鰯などのめざし。

ヒパンチヨ 鱈などの類を割いて薄鹽をして乾燥したもの、美味。

オシロムン 鹽、但し一般には使はない。

モロハク 地酒、あまいものである。

ハクツザケ 昔田植前後に作つて飲んだ一夜酒で、往々霍亂の原因となつた。

タレンクチ 焼酎蒸溜の際その垂れ始めは純粹の酒精分のみで、従つてその一杯は目が眩む様に利くといはれたものである。

カンザケ 正宗の清酒、上酒。焼酎に對す。

コシ 麹、麴の意にも用ひられる。

コジユネセル 麴に作る。

イキ 麴などの温氣。

イキガツク、イキガクル 温氣が出て来る。

アマミ 酢の別名。

オコ 味噌。一般的ではない語。

シミツ 大豆を煮た後の汁。

ナラチャ 食碗。

チャチャワン 茶を飲む碗。飯を盛るメシチャワンと區別する時に言ふ。

ジキユ お客の前等に持ち出す飯盛り器。木を刳り黒漆をかけ蓋のかぶつたもの。附屬のしやもじも同じ黒塗になつてゐる。

オカサ 椀などの蓋。

チエモト 箸。ハシといふこともある。

ヤシヨクゼン お客の前に出す様な足高のお膳。

ヒツサゲ 内神祭の時に客の前に出す甘酒入れ。多くは黒漆で塗つてある。ユツとも言ふ。

カラカラ 酒を入れてお客の前に出すもので白い陶製のもの、長い出し口の附いたものである。

ビンバコ 祝事でもある家に贈る酒瓶二個を入れるべき箱。瓶は二合位入るもの。

シユケ ふたもので陶製もあり、木の刳りもので塗らたものもある。

シユンカン 陶製の深みのある容器。煮しめやおひたしなどを入れる食器。

ナンタン 陶器。南蠻焼。

メシゲ しやもじ。

カクバチ 簡単に漆をかけた四角形の鉢。重箱よりは下品。

オセバチ 大きな陶器の平鉢。

モロフタ 杉材で作つた餅、麴等を入れるもの。

ガエ 曲げ物。

ウルシガエ 漆の容器。

メシガエ 晝飯を入れる曲げ物、大和のめんつ。

ハガマ 今日普通に釜と呼んでゐるもの。

ボシハガマ 小さな土釜で糊など作るが、盆になると少女達は門口に箆を敷いて、この釜で飯を炊いてそこで食べる。

ハガマトイ 鍋つかみ。藁で作つてある。

カマ 屋外便宜の場所に大鍋をとりつけたかまど、朝夕使用するのではない。

カマナベ その大鍋の名。直径一メートル程有らう。

フロ かまど、へつつい。

シヨチュツプロ 焼酎液化の爲の錫製の釜。

ヘワ 甑の下に敷いて蒸氣の放出するのを止めるもの。藁で丸く作つてある。

メンギン 菓子を蒸す時下に敷く布。

チヨカ 土瓶。

カナヂヨカ 鐵製の湯わかし、薬罐。

カネヂヨカ お齒黒を入れた土器。

クロヂヨカ 土瓶の黒く煤けたもので、焼酎を温めるのが日常の用途。

クスイヂヨカ 漢薬を煎じるに使ふチヨカ。

チャヂヨカ 茶を沸かす土瓶。

センバン 炮烙、煎盤であらうか。

ザナベ 七輪、滅多に使はぬ。只内神祭の折葉をこれで煮て温いものを出した。

キイバン 俎板。

タカオロシ 齒形に刻んだ竹の片を並べて大根やさつま芋をおろす道具。

ネンポ 蕎麥を薄く擴げる棒。麵棒の訛か。

ホチエ 竹を藁にて包み固めて天井などから吊るし、魚の串にさしたのを一緒に突挿しておくもの。

ヤロ 竹筒で作つた食品入れ。竹の蓋がついてゐる。薬籠か。

シヨケ 箆。

アラジヨケ 極めて目の荒い箆。

コエジヨケ 肥料を入れて撒く箆。これも極めて荒目のもの。

ツイジヨケ 箆に鉸がついてあつて鉤などに掛け得るもの。

カタクツジヨケ 一方に口の開いてゐる箆。

メゴ メゴザサで編んだ食器入れ。これを編む人は土地の人ではなかつた。

ザンコボシ 臺所の用具。水で洗つた茶碗など入れておくもの。竹編みで浅い手桶様の形をしてゐる。

アレアツメ 臺所の水仕事。

シメ、シメゴツ 日常臺所の仕事等。又何かなすべき業務。

ソラ たはし。灰をつけて物を磨くからヘゾラとも言ふ。

チャセン さくら。全然臺所用品である。

オケコガレ 桶其他類似のもの一般。

ハンギー 竹のたがの入つた鹽の大きさの浅い物入れ、鮭など作る時使用する。

ダブツ 樽の中の液の出る所。醤油樽にはシヨイダブツがある。酒樽にも取り附けてある。ナンマンガブツ、シヨイダブツと言ふ語呂がある。

オビ 桶、樽のたが。

オビがはしる 竹のたがが切れたこと。

ハンツ 臺所に備附の大きな水甕。

カメツボ 人丈位の大きな甕。

スツボ 家々にて酢を作る壺。

○

アラモト 實の入つてゐない粃や、米の碎けたのなどを言ふ。倭名抄其他に出てゐる。

トボシゴメ、トボシ 極めて早く實る米で實の赤い、飯としてばらつくもの。元來牟田に實蒔をしたのであるが、最近外米の中に往々この米一粒二粒を見る。

ノイネ 陸稻、をかぼ、野稻、又ノゴメ。

ハルムン、ハイムン ノイネに同じ。原物の訛。

カライモ さつま芋。餡粉、羹、團子等用途多し。

サンジュニチ 植付けて三十日を経れば出来るといはれる薩摩芋。ジュゴンチ(十五日)といふものもある。

シトイモ 薩摩芋の中、皮も身も白いもので最も美味。

ヤクシマ 薩摩芋の中が肉の黄色なもの。

ボケ 薩摩芋の淡紅色を帯びたもの。

ジュンサガライモ 薩摩芋の種類の名。

ドンクオガライモ 味よくない薩摩芋の別名、齒にぬりつく氣味がある。

オヤシ 正月に使ふ大豆のもやし。かすのと同様なくてならぬもの、元來ツツの水で芽ぐましてゐた。

タチワケ、タツバケ なた豆。この豆は下から上の方に實が生つて、それから下の方へ歸つて來るから、旅に出る人、軍にゆく人などがこれを持參して行く事になつてゐる。

フロマメ 十六さ上げ。

シトモジ 葱。近松語彙にはひともし。

センモト わけぎ。

ヒル にんにく、この葉を食用にする。甘味がある。野生のをノビイと言ひこれも甘味。

センボンナ 水菜、千本菜。

タカナ 芥菜。

タネカブ 菜種子の花。

ハカブイ 大根の一種類。葉が下に垂下つて根が地上に飛び出ても表面が青くならない利益がある。

ミツバゼイ 三つ葉。雑草の一。

ソマ 蕎麥及びその實。

ドユトキビ 早く出来るたうもろこし、土用黍。

ヨメジヨ、ヒナジヨ 玉蜀黍の實から外に出てゐる赤色の房。トキビノヨメジヨともいふ。

ダクヂリ、ダキツシヨ 落花生、南京豆。落地生の訛。

ニガシキ 里芋、但し里芋と呼ぶのが普通。

トイモガラ 里芋の一種。根莖は食はない。葉莖は白味を帯びて居り、この莖を横に薄く切り、他の野菜や

魚類と混ぜて食ふ。夏にはなくてならぬもの。

ニガゴイ れいし、荔枝。この實の未熟なうちに食用とする。赤い甘い實は顧みられぬ。

フツゴシユ ほうづきの形をした唐辛子。

ペブンコ 竹の根莖の新芽。夏に出るので土を掘つてもぎ取つて食物とする。美味である。

マムシグサ 甘茶に似た草で栽培する。まむしに咬まれたらこの葉を揉んでつけるとよいと聞く。

ヤシキチャ 屋敷の内に栽培した茶で、藪蔭や畑の畦にある茶に比して上品としてある。

ハナゴ 蔬菜の實の未熟なもの。茄子、南瓜の類に言ふ。

アルカヤ 非常に甘いといふ梨の名。昔殿様がこの梨を召上りその味に魅せられて「又もあるかや」と問は

れたのでこの名を負ふ様になつたといふ傳説がある。

シモナシ、ファイナシ 霜の降る頃迄置いて初めて甘味の出る梨、漢藥を飲んだ後の口直しに病人に與へたもの。

タモトヤブリ 梨の非常に大きくなる種類。

デセンボ 大きいの一部濫い所が残る上品でない柿。

トイノコ 柿の種類の名。長手の形をしてゐる。

ボンゴネイ 盆の頃早くも食べられる柿の名。

イクイ 桃の一種で水蜜桃の形をしてゐる。本草にある郁李とは別のものである。

タワラギンカン 長手になつた金柑。普通の金柑は丸い。

マルギンカン 丸い金柑で、俵金柑に對す。

バシヨシミ ばなな、芭蕉の實。

ワタンキヨ はだんきやう。

クネフ 香橙、九年母。

ユノス 柚の實。

カマゲ 筵を二つ折りにして綴合はせ、米を入れるもの。かます、俵はこの地方では元來使用しなかつた。

クブキ 藁を菰編みにし、かますの如く綴ぢたもの。

コエクブキ 肥料を入れて運ぶかます。

ヨックブキ 粃三斗を入れるクブキ。

テシマゴザ 荒い藪で織つた筵。

コンツン 色々の織物の端切れをつぎ合はせて縫ひあげた袋で二升位入る様なもの。雑穀など入れる。

トンピンフクロ メリケン粉を入れる様な袋。大黒様が肩にしてゐるのもこれ。トフブクロともいふ。

バラ 竹を薄くへぎ、五分幅位にしてそれを圓く網代編にし、ふちを取つた物で、農作物や餅などを入れる。大なるは直徑四尺、小は二尺位ある。

○

ウエタ 馬耕の出来る、従つて苗を植ゑつけ得る田。ツクイダに對する。

ツクイダ 馬耕の出来ぬ泥深い田、多く實蒔きにした。

コツン 稻塚。穂積の轉か。

サエンバツケ、サエン 蔬菜園、屋敷の一部をこれにあてる。

セマチ 畦にくぎられた田の一面。

ゼンタナタ 臺所の棚の様に、何段にもなつてゐる田。

フチヨーデン 往々洪水に荒さるゝ田地。

ミツクレダ 水持の甚だよろしくない田。

ムギタ 乾田。二毛作の出来る田。

ムタ、ムタダ 牟田、沼田、ふけた。

モエダ 何人もが組合つて植ゑる田。

クワドイ 鋤取、農耕の作業。

ツクイワケ 土地の持主と小作人と半分宛の收入あること。

ウケウエ 人の田地を幾ら〜と請けて植付けすること。

デンク 耕地整理のこと、田區。明治の末期に行はれた。

シアケ 開墾。

シアケダ 新田。

シアケチ 開墾した地面、田畑共に通ず。

タツクイ 牟田に稻の實を蒔くこと、而してその儘收穫す。

サノボイ 早苗の植ゑじまひ。この時は近い親類を招いて一寸した御馳走があつた。心太は必ず御馳走の中に出て来る。

ドユダ 土用になる迄田を植ゑる事で、非常に繰りまはしの悪いことを示す語。

ホイゲシ、ホイゲシウチ 作物の都合で、普通の深さの倍程に畑を打つこと。

サシクサ 春秋の頃、畑に生えた雑草のうち馬牛の食ふ様なものの根を鎌で刺し切ること、一つの作業である。

ハツケホイ 畑にある雑草を、馬をつかつて取り出す事。先づ鋤き返して、それから馬鋤を以て掻き出して

捨てるなり焼くなりする。

ホイグサ 馬鋏で掻き出した草。

シオトシ 收穫。

シオトシドキ 收穫時。

ハナワ 普通の大きさの藁繩。小繩、大繩に對する。

ヨマ 細綱。

スホ 藁のしべ。

クチワラ 俵又はかますに米を入れたら、一番上に藁をおいてその口を縛る。斯くすれば米がこぼれて出ぬ。その藁のこと。

サコンタロ 谷川の水流を利用して、米など搗かす仕掛けで、極めて原始的なもの。大和ではソーヅと言つてゐる。

アワフミ 粟の芽の出る頃土が乾くと皆枯死するから、其上を足で踏付ける作業。土用過ぎの事とて足の裏は焼ける様に痛む。

アワンナカヒキ 粟の少しく伸びた頃、その数の多過ぎる所を引抜いたり、又一緒に蒔いた大根の如きをも間引いて、全體を調節する作業。粟の中引。

カライモンツラカエシ 薩摩芋の蔓が充分伸びた頃、その蔓を返して、蔓から出た根を地から放すのを言ふ。農夫の作業の一。

カライモオロシ 冬の夜近所からの手傳を得て、薩摩芋をタカオロシ(竹製の卸す道具)で卸す。澱粉を採る爲であるが、必ず一夜で皆卸してしまふのであつた。

ウシノホネヤキ 昔は牛の骨を焼いて、それを茶種か何かの肥料にした。人里を離れた所で焼いてもその悪臭はひどかつた。そこで特にこの語が使はれた。

コエゴシテ 肥料に手入れすること、主に馬糞に人糞を混する作業。

スエチ 次に作る作物の爲、前の一年間畑に作物を作らぬこと。茶種を作る時など。

ゾバ 田の肥料にする爲、春先畑に大豆を蒔き、稻を植ゑる直前採取つて田に入れた。その名。明治の前半迄行はれた。

ゾバヒキ それを抜取ること。

ハメクサ 田植前の埋め草、ゾバ、野の草、其他。

ツチゴエヨセ 麥その他の株に兩方から土を寄せる作業。土肥寄せ。

タバコヌベ 烟草の葉が乾燥すると、幹からもぎ取り、一夜露にぬらして、翌日種子油を塗つた兩手で一枚一枚をのばす事。

タバコツイ 畑から伐つて来た青葉の烟草を家のツシ(屋根裏)に吊るす仕事。随分いぶせき仕事。今は無い。

シヨチュニ 焼酎を製すること、初冬の賑やかな仕事であつた。

アブラスメ カタン(椿の實)より油をしめ採ること、各家庭で行つた。

キマブイ 果物をちぎる時一つも残さずちぎらないで一二個必ず残すのであるが、その名。木守り。

オドシ 案山子。

オケコエ 人糞。肥料として用ひる時の語。

シンデン 用水の溝の大なるもの。

ミナクツダケ 田の水口に樹てた竹。

ハナクソ 稲の花が落ちて溜つたもの。

アシダ 農具で、牟田に入る時、足が深く入らぬ様兩脚にはくもの。形は圓く竹で作る。又田を植ゑる前に埋め草を泥の中に踏入れる爲にはくが、之は長方形木製。

アゼキイ 田の植付け以前畦を切る刃物。

エブイ 筵の上に乾した粃を掻き浚へる物。

オコシ 馬耕用の鋤。

キンツ 土を深く掘る鐵製の用具。柄が長く、山の芋を掘る時など用ひる。

メグイボ 麥うちのから竿。

ヤマツクワ 専ら土を掘る時に使用する刃の狭い鍬。大和でトングワ。

モガ 馬鍬。

オコシモガドイ 農夫の別名。

クワス 筥、柿など採る時竹の先を二つに割つて中に小枝の入る様にしたもの。

ハバク 深い穴の中の土を處理するもので、圓竹の尖端のみを幾つにも割り、その中に土を突込み外に出し

て打出すのである。

シユノ 竹筒を尖らして俵の中に突込み、中の米を出してその質を見るもの。

コマ 菰を造る道具の一。大和でツチ。

コマガキ 菰を編む道具。馬の非常に瘦せたのを之に例へるのは普通である。

ムシトバタ 筵を織る道具。元來農家は各一個づつ所有してゐた。

チキイ 家庭用のはかり。百匁から二貫匁位迄の重さを計る。大言海のちぎりの説明中には二人で擔ふ様に言つてゐるが、そんな大きなものはキンヂョと言ふ。

コ 分銅。

キンヂョンコ 大きな秤の分銅。

チキイノコ 小さな秤の分銅。

○

ナエシタテ 苗木作り。

ヤマシタテ 植林。

コバ 杉の穂を挿す様に用意出来た山。木場。

コバツクイ 木場に仕上げる作業。

コバレ 杉などの造林の下草刈り、又シタバレ。

イタヤマ 山の中に臨時に出来る製材所。

オテヤマ 舊幕時代、殿様の保護を受けた山林、漁場についた山林など。

タナバタザオ 七月時分は竹の伐り時で、この前後に作る物干竿。

ソングリ 木など挽くに脇にされること。

ハツイ 柚の用ひる大きな斧で、材の荒削りをするもの。

カッテバサン 山鉞。ヤネバサンともいひ、屋根のかやを切るのにも使ふ。

スギー 竹などの切株の尖つたもの。

ツギー 木の切株。

ツクサ 木の切株だが、ツギーの多少とも腐朽して突出したもの。

カゼキノコ 颱風の後に山に出る椎茸。

ユツギノコ 雪の降つた後に出る椎茸。

ヘヤマ 深山のユスノキを伐採し、それを焼いて灰を採る仕事。今は廢す。

ノビツケハジメ 野火をつける最初の日の行事。

ノビコサキ 野火の山林などに延焼せぬ豫防的に豫め山際だけ焼いておくこと。

○

ケゴジヨ 蠶、おこさま。

ジユクツ 繭を作り得ぬ蠶。年壯猶家庭を作らぬ男子。

アツゴ 上簇期の蠶。

アツゴヒリ 上簇した蠶を拾ひ上げる事。

ハシ 蠶座。蠶を飼育する用具、竹を編んで拵へてある。

ハシソソコカエ 蠶の糞を取去ること。

ダゴメ 蠶の繭の真中のくびれてゐないもの。

ヤマケゴ 山繭。

ニシカヒガシカ 蛹。大和ではニシドツチ。

ヒル 蠶の蛾、ひる。

タネスエ 蠶卵紙をつくること。

ソ 絲の別名。

ヨイソ 細絲、より絲。

トガセ 昔の筋の大きい綿絲、太番の絲。

クダイガセ 往時上方で出来た細手の綿絲を言つた。イソガセに對する名。

イソガセ 鹿兒島磯で出来た太手の綿絲。今はない。

モンメンバタ 絲繰車。

チバタ この地に元來存在してゐた織機。

アシツイ 機を織る時、兩足を載せる物。

ハエバタ 機織の場合、先づ縦糸を延える道具をいふ。

クサダケ 織機に縦糸を巻取る際、糸が纏れぬ様に所々に挟む竹。

マキボ 織り上げた反物を巻いて砧で搥つ時の心棒。

キリシノ 反物を織り上げ、最後に残る縦糸の切り取つて不用になつたもの。

キリシノツナギ 僅か六七寸のキリシノをつなぐのは一つの仕事で之を集めて横糸とするのであつた。又元の儘のキリシノをでこくどん(大黒殿)にあげることもある。

キリシノムスビ 縫糸をつなぐ時の結び方の名。

トワカネ 染色の名、紅色。

ホケ 淡紅色。

ハナ 藍玉を水に入れ充分に熟した時、竿で掻き混ぜると泡が充分に立つ。その泡。

ビンドシ、ビンドシゾメ 染色の名で、黒に近い色。

モク 木の木理のモクから墨の水に出る木理の如き色のことをも言ふ。これが出ると子供は良い墨だと言つて喜んだものである。

キカイセン 發動機船。

ヒグルマセン 蒸氣船、火車船。今は無論ない言葉。

イサバ 往時沿岸傳ひを航海した帆船。

タンベ 和船の型の名。團平か。

デゲブネ 和船の型の名。

ヒコブネ 和船の型の名。

シオメ 潮流の境界附近、潮合。

タテ 満潮。

コワイ 干潮。

ナゴイ 暴風後の大波、なごり。

オテアミ 舊幕時代殿様の保護を受けてゐた網場。

アンジャク 網場の總監督、網細工と書く。

タナ 漁場では網を入れて魚群の來るのを待つが、魚の來るのを觀測するには、近くの山の上に櫓を構へてそこから日夜海面を見張る。その櫓のこと。このタナで觀測するのは、非常に重要な役目で、簡単には出來ぬ。その役目のことをもタナといふ。

カゲ 漁師言葉で魚の群のこと。海魚の集團を上から見たら雲のかげの様に見えるから。

イカエキ 烏賊を釣る時の道具。軽い木を魚の形に削り、黒く焼き、後部に鈎をつけて用ひる。木はくさきがよいと聞いてゐる。

エビツキ 海老其他何でも突き刺す漁具。ウツキ。

アケモチ 網場で明け方に一度網をあげる事。

トキモチ 網場で夕方に一度網をあげる事。

ウケ 竹で作った漁具で、川魚や海老などが一度入ったら出られないやうになつた物。大小種々。

ウケゼキ 川の兩岸から堰をして、中央に口を開け、そこにウケを漬けて魚を捕る仕掛。

ガナツイ 穴を探して鰻を釣る事。

メ、ウナキノメ 深い泥の中に潜む鰻の作る小穴。

センツナギ 梅雨中急に川の水の濁つた時、みずを多数糸屑で通して竿に巻付け、水に漬けて蟹を捕る法。随つて漬けると随つて捕れ、部落は蟹を焼く香に満ちる。

セキダナ 冬になると河に堰を作り、棚を二三個拵へて晝夜網で魚の下るのを待つ。竹で編んだ上に藁が敷いてある。

セキマチ 堰で網をおろして魚を待つこと。

カバシ 魚を釣る時、先づ魚を誘ひ寄せる爲、糠の炒つたのを泥に混じ團子を作つて水中に投込む、その名。

タデナガシ 池や溜り水に蓼の葉を入れて魚類をとること。

ナハエ はえ縄。長い縄に、處々に鈎針をつけて海中に投入れる漁法。

ユーハエ ナハエを夕方にすること。

ハエナガシ 縄延えの流失すること。

ハツダ

夜間海上に網を下し、船では篝を盛んに焚いて魚を寄せて捕る法。八駄の薪を一夜に焚くからこの名が出たと聞く。

ヨダキ

暗夜に松明など焚いて川魚を捕る事。

ヨチヨ

魚を釣る時の餌。

カンダラ

捕つた魚を密かに持去ること。

トーカエビス

十日戎。漁場で毎月十日漁場の海中にもぐつて底の石を拾ひ、それを戎様にさゝげて大漁を願ふこと。

アカネユエ

漁場で大漁の時の祝宴。女は赤手拭、男は赤鉢巻をして、戎様に参詣する。タイヂユイエ(大漁祝)と同じ。

ガワツナウチユエ

冬期沿岸の鰻漁期に向ふや、先づ漁場に網を張りめぐらす。それが終つた時の酒宴。

ガワハイユエ

冬の鰻漁期に入るや、さきに入れておいたガワツナの所々に孟宗竹を縛り付け、網を結び附けた時浮いてゐる様にする。その仕事は済んだ時の酒宴。

ナヤイリユエ

網場の前祝の一。今迄各自の居室にゐたのが、愈々ナヤ即ち漁師の合宿所に入る、その際の酒盛。

ナヤ

魚市場をいふ。魚屋か。

チュゴツ、 チュ 山の狩、海の漁。

チュゴンカミ 漁獵を司る神様。

ハツイ、 ハツヤ 男子がはじめて猪なり鹿なりを射止めた事。初射か、初矢か。昔はこれを非常な名譽と

した。又ウジシともいふ。

ゴコーミヨ ウジシ、ハツイをした青年に對する挨拶の言葉、御高名。

ウジシユエ ウジシをした家で客を招いての披露祝賀の大宴。今はない。

クワセツケ 猪を食物でおびき寄せて射殺すこと。

コクサマチ 猪が春の若草食ひに野に出る所を狙ひ打つこと。

ニタマチ ニタは粘土即ちニコである。山の中の粘土のある所には、猪が出て来て身體を擦り附けて喜ぶ。

それを待伏せて打ちとる獵法。

シシノマキテ ある豫定の地に猪を誘ひ來る爲、薩摩芋の類を途に撒布すること。クワセツケ参照。職業狩

獵家の行ふ法の一。

ツイアゲワナ 獸類を捕るわな的一种。吊上げわな。

シガキ サトバトのねぐら近くに鳩に見られぬ様忍び待つ仕掛け。多くは三方と天井に木の枝がきりかけて

ある。

シガキヲキル その動詞。

ハトヨビ 冬期中山鳩の剝製を樹上高く掲げ、その下で鳩の鳴聲を真似て鳩を呼寄せる。その鳴聲を出す器

具。竹の筒で出来てゐる。

ネレ 主に鳩、きじの類を射ちにゆくこと。

ヒューテン 冬期夜間田に下る水鳥を捕へる爲に張つた網。

ワサ 小鳥を捕へる爲に、馬の尻尾で作つた引けば締まる様にしてある絲の環。

ゴネンゲイ 猪の最大のもの。五年歸り即ち五歳。大和でローソク。

ミツブセ 猪の背部の白肉の厚さを測る時の語。手の指三本の厚さのものは好味に屬する。なほ二つ伏せ、

四つ伏せといふ語もある。

イノシシノカワメ 猪の皮目。猪の肩に有る皮附きの白い肉を斯く呼んで、正月の吸物には極上のものであ

つた。

クサワキ 猪の胸のあたりの肉。撃ちとめた人が猪のクサワキから上を取ること定められてゐた。草分。

イダマス 野猪の肝臓を特に言ふ。

フクマル 主に獸類の心、肺、肝臓など。

ナカゴ 猪、豚などの腸(食品として)。

センビロワタ 鳥獸のはらわた。千尋腸。

ズスイワタ 鳥類の臟腑。

フツチ 鳥類の肋骨の内側についた血。これがついてゐる處は食用にならぬと言ふ。

シツガワ 獵師が唇につけて歩く犬の皮。

ヤマカラシ 獵師が山に入る時腰にさす一刀。

カケラ 狩り場。猪狩りの際一團が一同に狩るべき地域。

マブシ 猪の獵場で、待伏せてゐる場所。大勢で犬を入れて追出させて狩る時の事である。

シバウチ 獵師が山の中に泊る時、柴を折つて泊るべき所を打ちまはること、之は山の神からそこだけ拜借するといふ事を示すのだといふ。柴打ち。

ハト 手の指を一本又は二本内側が外に向く様に口中に入れて、高い音響を出す事。獵犬を呼寄せる時に出すのが普通である。ウソより遙かに遠く達する。

キジガサ 四で雉子を撃つ時かぶる笠。羊齒の葉で出来てゐる。今は見られまい。

ゲンダマ 一發一彈の彈丸。散弾ばらたまに對する。又シトツダマといふ。

シベンダマ 曲線狀に力なくゆく弾。

カシクイヤ 屈曲してゆく矢、ぐら／＼すゝむ矢。

コジゲチ 火繩銃の銃口。

サキバン、バンツイ 火繩銃の照星。

マエバン 火繩銃の照尺。

モダマ 火繩銃の火藥入れ。

ヒス 雷管。

ミニヒル 火繩銃に次いで出来た銃。雷管が外部にあつてそれを打つと火が傳はる。

○

イ 勞力を勞力で交換すること。ゆひ。

イヲスル 他から勞力を借る。

イヲトル 勞力の返却を求める。

イモドシ 借りた勞力を返す。

カシ 加勢の訛。手傳ひ。特に許嫁中の娘は結婚まで將來の夫の家に追々手傳ひにゆくが、それもカシンイクと言つてゐる。

ホシ 雇人の延べ人員。來た來ないを筆の根に朱をつけて紙に記入しておく。さうして「ホシが幾らかゝつた」と言ふ。ホシの總計が延人員になるのである。

クイ 仕事の手廻し、繰り。

ハヤチュキ 早道。但し仕事の上などに就いていふ。早流儀か。

カラミ 護岸工事。

クヤク 共同の爲の仕事。道普請、溝さらへなど共同にすること。又テンニヤクといふ。

カタシヒリ 屋敷内のカタシ(椿實)が道に落ちたのを、老人や少女が子守をしつゝ拾ひ歩くこと。道に落ちたものは、拾ひどくと認められた。夏の呑氣な情景である。

ヤツバチ 午後二時頃、蜜蜂が巣箱の外に皆出て附近を飛びまはること。

フキ 箱製の鞆。

トコトンプリ 飴屋にある一種の飾。使用される時の音響によつてこの名を得た。

イオチエゴ びく、魚を入れる籠。

クサキリチエゴ 刈り取つた株を入れる荒目の竹籠。

イヂエ 藁の先の方を結び合はせて薪など束ねる用をなすもの。
イヂエワラ その爲に用ひる藁。

オコ、ヤマオコ 長さ一間程の小丸太の両端を尖らしたもので、薪、稻束の如きを運ぶには之を突き通して肩に擔ぐのである。

サシ 両端に物を掛けて中間に於て擔ぐ長さ一間程の棒。

ミッサシ 水桶を運ぶ時肩にする荷ひ棒。

カリ 山人などが物を負ふ道具、しよひこ。

カガイ 郷土製品。こよりを作つてそれを鎧の胸の様に編上げ、一種の袋状となし、柿澁で黒く染め紐で負ふ様にし、山行きの時に用ひてゐたもの。

タゴシ 擔荷、病人運搬用のもの。

フトンバイ 往時婦人が馬に蒲團を敷いて遠方に旅立つこと。蒲團張り。

ニカエ

駄賃取りの語である。甲乙兩地から同じ日に駄賃取りで出發した者が兩地の中間で相會つた場合、相談で互ひに荷物を換へて歸路につき、駄賃は當り前に入手すること。誰も斯くして損をするものはないから公然行はれてゐた。

ツンベイゲシ 目的地に着いたらすぐ引返して來ること。

ソ 音信、たより、左右。

あいかい何のソもねが 彼から何の音信もないが。

ヂキノ 手紙でなくて直接自分の身内のものに會つたり見たりした人の聞かせる消息、直左右。

ヂキノをきちすつたいおてつき申した 直左右を聞いて全く安心しました。

ピン 便宜、たより。

あの人のピンかい送つた 彼に託して送つた。

○

ジョノ、シユノ 地主に持つて行く小作米。上納、收納。

カドセン 木戸錢。

ウッセウリ 投賣り。

ドロ 銅貨。

ニンメゼン 二文錢。

フソガネ 婦人のへそくり金。

オツカ 負債、借金。

モエ 無盡、頼もし、もやひ。

シヨテグラシ 一世帯の生活方法。

シヨテグラシがらめ 家事の遣り繰りが巧い。

シヨテダマシ 家事經營の才能方針。シヨテグラシと似た意味に用ひる。

カラクイジヨテ 唐芋食ふ様な苦しい生活振り。

ミツジョガシヨテ 鶏ぐらしに同じ、ミツジョは蜜嬢、蜜蜂のこと。

ニワトイケラシ 貯蓄を知らぬ生活法。

センボ 切りつめた生活。

ピンブゲンキ 清貧にして健全なること。

ツモイツモイ 運賦天賦。ツモイは元來將來の計畫を意味するが、それから、人間以上のある實在者が人間

の將來を決する様な考へ方になつた語である。

ノサイノサイ ノサイはノサリの訛。ノサルといふのは天から與へられる、天から授るといふ意味であるか

ら、此處は人々の天賦天命といふ意味である。人の運不運。ツモイツモイに同じ。

タケダケ 分相應。

ハカレ 人の悪業を罵る時に用ひる。はからひの訛か。

ハカレな奴ぢや 悪人のたれ死した場合などに發する。天罰といふ様な意味が含まれてゐる。

フ 運勢、天恵。符又は分。フの良い、悪いといふ言葉は常に聞く處。前者は幸福な、後者は不幸な意。

ボンサン 身代限り、分散。

シマエ 自分が爲すべき本分、本務、仕前。親のシマエがまだ濟まんなどといふ。

ガン 工面。

グンの良い 工面のいい。

ウゼケン 世界一般、三千世界。

イカタ 先例、寸志。

イカタ迤い差上げもす ほんの寸志です。

テジルシ 僅かばかりの贈物、寸志。

ツラミヤゲ 人の家を訪問する時、手土産のないこと。則ち手ぶらで訪問した時に出る挨拶の言葉。

クツノゴレ 口だけの御禮。物品などで返禮せぬこと。

クツノゴレもせぬ奴ぢや。

スネン 懇意の間柄。知合ひの仲。

ホノワカレ 兩者和解に至らず對峙の状態で別れること。

ブテス 虐待、無禮なもてなし。

ブテスクらはした ぶあしらひに逢はしてやつた。

マワイ 待遇、もてなしぶり。

テスマエ、 テスフイ 主人役が宴席に於ける接待振り、客あしらひの手並み。又主人に代つて他の人がテ

スマエをする事がある。

ムケメ 出迎へ、呼迎へ。

オロオロコエ 恐しい聲。

カンケチ 普通語、東京辯、上口。ヨソグチともいふ。

オキラ 自慢話、法螺。

オギラ吹き 法螺ふき。

ハラ 虚言、うそ。

ハラをひる その動詞。

ギ おしやべり、議論。

ギをゆな お饒舌をするな。

ギがつい お饒舌がひどい。口が過ぎる。たしなめた意を含む。

ギをふく 辯が立つ、議を吹く。

コンシンバナシ しんみりした内輪話、懇親話。

ゲチ 説諭、教訓。戦場の命令などでなく、子供丁稚などへの場合のみに限られてゐる。下知。甘い親は、

「子供のゲチが足らん」などと非難される。

ムカシ 昔噺。お伽噺の類であつて、昔話といへば、懐古的な事實談となる傾きがある。

ナラシ 時々の噂話。

モノゴツ 雑談、おしやべり。

モノバナシ 語り草、人の口に乗つて語りはやさるゝこと。

モノモノ 私語。さゝやき。殊に人の耳元に口を寄せて、他に聞えぬ様に話すのを言ふ。

グゼゴツ ぐづぐづ言ふこと。

モツチャゲオトシ 一旦褒めておいて後でけなすこと。

○

アヤ 氣力、活力、氣根。

アヤも氣根もね 元氣の全くない事。

ギロ 元氣、氣力。

話をするギロもねごつ(無いやうに)なつた。

ウツイ 感じ、意識に上ること。

ウツイの悪い子 鈍感の子。

ウツっちゃをらぬ 無意識だ。

エツキ 知らぬ家などに貰はれて、その家に馴れること。花嫁の噂などの際、「エツキが宜かどかい」はその

住みつきは宜いでせうかの意。

ネシユ 本質、心底、外見に對していふ。あいもネシユは悪い人間ぢやね(ない)などと使ふ。

ツ 度胸、きも。

ツが据つちよる。

イキダマシ 性根。

イキダマシが悪い。

アスピダマシ 遊んではかりゐる心。

オホエダマシ 記憶力。

コダマシ 小才、細事によく氣のつくこと。略してコダともいふ。

シヨテダマシ 家事經營の才能精神。

フタマシ なまけるとか喧嘩するとかいふ様な怪しからぬ志操、心がけ。

ブタマシ 起すむんぢやねど 悪い心がけを起すものぢやないぞ。

キバイジヨ 忍耐力、コラエジヨともいふ。

カエコンジヨ 御禮を豫想して仕事をする精神。

ヒツコンジヨ 邪推の心。

ユシタマカセ 注意監督等のないのをよい事にした無責任な態度。もつけの幸ひ。

ミノタメ 自分自身に關する用心。

スイ 推量を約めた形である。

スイでよかがゆち見やい 推量でいゝから言つてごらん。

ムナツケ 死人がある様な時の豫感。

キツケ 心配、悲歎。殊に子供を亡くした後の氣苦勞を言つた。

こどんのキツケ 子供を喪つたこと。

アトゼキ 危急な事の濟んだ後で、自ら思ひ出したり人に聞かされたりして俄かに催す動悸。以前火事を起

した事を思ひ出す様な場合、「今でんアトゼキがする」などと言ふ。

セケンバラ、ウゼケンバラ 公憤。又何となしに腹の立つこと。

シンド 辛勞、苦勞。

御シンドな事ぢや。

ツラハチ 赤恥。

メクライキ 無闇に強がること、又ムクロイキ。

モガイ 強請、威迫すること。

ブチュホ 悪事、非行。

シメ 追従、追隨。尻舞の訛。

メストイ 人におもねる。御機嫌をうまくとる。メスは賣僧(マイス)の訛。

ワナギ 邪魔、ジャマギとも。

ワナギなんな 邪魔つけになるな。

ハラゲリ いたづら、冗談。

ワヤク いたづら。ひやうきんなこと。

ウゼシケ 多大忙、セシケは多忙の意。

ヒノセシケ 右に同じ。

チュチュエ 非常に忙殺されること。

チュチュエをした 多大忙を極めた。

クタメキ 多忙を極めること、あわて騒ぐこと。

アトゴツ 後の祭。後から言うて詮ない事。

オテハラ 何も後に残らぬ状態。

ホス 何もなくなつた状態。

スタ 獲物皆無。關西でスカ、スカタン。

スタをくふ その動詞。

ボク 駄目。

ボクぢやった 駄目でした。

ボク喰た 無駄骨折つた。

イツスンヤリ 遅々として進まぬ、寸進。

カネオイ 直角に折曲ること。

メラダオシ 将棋倒し。全部倒壊すること。

アタダゴツ 間に合はせて本気にせぬこと。

マネゲ 眞似事。

オワガチ 荷物の上の方が重いこと。

ガツシヨク なかの悪いこと、食合はせる事、毒になる事、蛸と梅干等。又二つ一緒に焚くと燃えなくなる
薪、松と竹等。

シービキ 水、酒などの器物の口から出たのが後の方に垂れること。又尻込みをいふ。

シモグエ 墓石などが霜の爲こはされること。

メンギョ 體裁、打見た形。面形か。

ジジラ 無理なこと、強制がましいこと。

エシレンコツ 下らぬ事、つまらぬこと。

エシレンコツ言ふな。

アブラドコイ 油ののり切つた所。土地なら最も肥沃な所を言ふ。

グワンタレ 最下等の物。

こらほんのグワンタレぢや 之は實に最下等のものだ。

シラ 中に何も無いもの。

米んシラ 實のない籾。

シラばかり 虱の卵がかへつた後の穀のみといふ意。

ズ ねち／＼したもの。

烟草んズ 烟草のやにの固まつたもの。

棒のズ 棒の花の中に溜つた甘い液。

ズ 小穴。

ズがほげた 小穴が明いた。

チュクムン 揃つてゐない端物。定数不足の食器などをいふ。

ヒラゲワチ 平べつたいもの。

マッデムン 末代物、永久に残るもの。

之ならマッデムンぢや。

ヤダムン つまらぬ物品。

○

ウッタチ 出發、着手、最初、初手。

ウッタト 出發しよう、はじめよう。

ソコシン ずつと中、中心部。

びんたん(頭の)ソコシンがいて(痛い)。

ゲツ 最後、どべつちよ。又シーケツツ。

スンクジラ 隅っこ。

コンゴ 突起。

背中のコンゴがでけた せむしの如き恰好の折に言ふ。

シヨン 精、エキス、正味。

シタチ 物事の出來工合。

こん子はシタチが良か 成績優良の兒童。

ツ 甲羅、かさぶた。

ツがかぶる 一面かたくなる。

ツがとれた 固きものがとれてよくなる。

ネ 粘着力、ねばりけ。

ヒビ 光澤、色つや。イロヒビともキラともいふ。

つらんヒビがゆなつた 顔色がよくなつた。

ヒビキ ひゞわれ、又ヒワレ。

イネ 一荷、二荷といふ時の荷に相當する。人が一度に荷ぶ重さの名。
水一イネ汲ん來て呉り。

カシタ 薬の或分量の單位。

カビ 日數を數へる單位。トヲカビ(十日日)、ナヌカビ(七日日)など。

カンキリ ヒトカンキリ、フタカンキリと言つて一度二度と嚙切つた分量。きれ(片)にあたるか。
おいにヒトカンキリくいやい 私に一切れ下さい。

クボ 白で米を一回搗く分量の名、一クボ、二クボ。
米を一クボ搗かにならぬど。

クラ 西瓜の一本々々の名、一クラ、四クラなど言ふ。

コン 魚を數へる時の單位。

一コンニコン 一尾二尾。

シキ 住宅の横幅を測る單位。一シキは三尺だから、五シキは二間三尺幅である。奥行には間をつかひ、横三間、奥行四間の家なら六シキ四間と言つてゐた、現在もこの言葉が用ゐられて居るかどうか不明だが、四十年前はこの言葉を以て普通とした。

ヘギ 片、切れ。梨などむいたのを數へる時に一ヘギ、二ヘギ。

ヨミ 機織の際の縦糸の數の單位で、四十筋を一ヨミといふ。

ゴシトツ 二合五勺、其柘をゴマスといふ。

ゴナカラ 二合五勺に足らぬ分量。

ゴミツツ 七合五勺、ゴマス三つの略。

シコ 分量。殊に婦人の頭髮の分量。又有るだけのたけ。

アイシコ あるたけ。

持つちよるシコ 持つてゐるだけ。

シコが有る 頭髮が多い。

ハンコ 半分。

ヤイガカリ 槍掛り。道路の上に民家の樹木の枝が伸び出たのを伐る標準は、槍を立てて通る場合邪魔にならぬ程度で、これを槍かゝりを伐ると言ひ、無論封建時代に行はれたもので、現在は言葉だけ傳はり、その言葉も漸く廢されんとして居る。

イッタンモンメン

お化けの一種。長さ一反もある木綿の様な物がヒラ／＼として夜間人を襲ふと言ふ。

カゼ 夜間などに災ひする魔風。「〇〇さんな昨夜風に當いやったげな」など言ふ時は普通の風ではないのである。

キクワンヒ 燐火、鬼火、火と書く。

トビムン 夜間光を發して天空を飛ぶもの、又ヒカイムンといふ。

キノバチ 木を伐倒した報い、木の罰。キノタイともいふ。木の祟りである。

クワジャ 牡猫が年とつて化するといふ妖怪。

テシクツシ 山が崩れる様な大音響を立てた後に現場に行つて見ると、何の變つたこともない。これは天狗の立てる音といふ。そんな物音の名。

メヒトツゴロ 目の一つあるといふ夜間の怪物。

メン、メンドン 幽霊、おばけ。

モレ 幽霊、亡霊の約つたものか。亡霊はまたボコンとも言ふ。

ヤコ 人に憑く場合の狐、ヤコツキは狐つき。

ガラツバ 河童、又チドン、ミツドンといふ。河童は指が三本あると言はれてゐる。

ヤマンカミ 水神即ち河童は春夏の候河に居て、秋冬の間は山に入るといふ。

オツカドン 齒痛を直す神様。直つたら楊枝を差上げますと言つて平癒を祈る。大塚殿。

カナヤマサ 銀冶屋仲間の守護神。

カナヤマコ 銀冶職仲間の講中。

クノカミ 染色の神。

タノカンサー 田の神様。頭に甕を被り兩手に杓文子と播粉木を持つた立姿のこの石像は所々に見える。

タノカンサーオットイ ある土地の士氣が振はなくなると、その田の神を他の土地に盗まれる事がある。盗まれた方は甚だ不面目として、穩便にそれを取戻して自肅自戒の方便にする。

チガミサー 古い家には内神の外に地神を奉祀してゐる。内神は大抵石碑を立てて大事にするが、地神は單なる藪が多い。大した崇拜もつけず全然放任されてゐる。チガンヤボとも言ふ。

トバシタドン 海岸に鎮座される神社の名。十柱の神か。

ハヤマサー 早馬の神様、馬の神を祭る石塔が立つて居る。

ヒノカンサー 薪が盛んに燃える時、ピーと音を立てる事がある。あれは火の神様が飛んでゆくのだと言つてゐる。即ちあの音の主。

モイドン お産の神様。一本の老樹にしめ縄がかけてある。

ホソカンサー 天然痘の神様。

ジュンニヤマチ 十二夜待。昔疱瘡の神を待つたこと。

ホソオドイ 天然痘防止の踊で昔あつたもの。

シヨグワツドン 新年。

ニギエ 正月門口の藁飾り。おかざり。

セチキ、シヨチキ 新年には山の樫など伐り來り、それを薪位の大きさに割り、門松には三本づつ兩方で六本立てかけ、又家の柱の根に一本宛立てかける、その割り木の名。節木か。

カケンデコン 正月の飾りで、家の梁などに青葉の大根が二本掛けてある。

メノモチ 餅を小さく繭程の大きさに四角に切つたもの。之を柳の枝に刺す。繭の餅。餅花に當る。

ユキマツ 正月暮にあげるもの。松の穂の先にシタス(白砂)をつけてある。

デコクドシイエ 正月二日は大黒天を祝ふ日とされてゐた。併し只名のみで、斯かる祭式はない。

オツナイエ 正月四日當日を言ふ。この日出入りの者が主家に年賀に行くのである。乙名祝、オツナジヨガ

ツともヨッカユエともいふ。

ノビタテ 郷社の一月五六日の神火の祭事。又コービといふ。

ムカドシ 一月六日の日。この日の夜間、所々にて打つ空砲の音が聞える。往古の鬼やらひの遺風ときく。

ナンカンセク 正月七日の日を指す。この日各家一様に雑炊を食ふ、それをナンカンズシといふ。

ナナトコズシ 子供が七歳になつた年の一月七日には、七軒の雑炊を貰ひ集めて食はせるといふ舊習がある。それを言ふ。

デフタキ 現時全くないが、明治初期迄あつたもので、部落々々で正月十四日の夜行つた少年の左義長、爆竹。

デフダケ デフタキの夜、田の中等に立て周囲から火を焚いて爆音を立てさせる竹。出来るだけ大きな孟宗竹を選定した。

ゼンナワイエ 正月十四日の夜の假装。錢繩祝。

ダル 左義長の折、節木を運ぶ爲の棒。今なし。節木は各家々から貰ひ受けたもの。

ケズイカケ 正月十四日に門松の立ててあつた跡に立てる削りかけ。

モロムキ 正月十五日頃門松を除いてその後挿す樵の小枝。

ゼンマキ 節分の夜、四ツ角の様な場所に錢を撒いて子供等に取りさせること。

タノカンコ 田の神講、二月と十一月の丑の日に行ふ。

カギヒキ 舊二月四日に高山町縣社四十九所明神で行はれた神事。男かぎと女かぎとを掛けて引き、勝敗を決したといふ。

オタオドイ 舊二月十六七日池の堤で踊る。ポーオドイとも言ふが棒のみならず長刀、鎌を持つても踊る。「後か山……」とうたひ出すからオセロガヤマとも呼ばれる。

ウシノマツリ 舊二月十九日縣社四十九所明神の祈年祭の別名。牛耕の祭具があつた様に記憶する。

ヒナジヨ、ヒナジヨユエ 三月上巳の節句。

ハツピナジヨ 女兒出生後最初の雛の節句で、この祝宴を盛大に行つた。

ヤマ 雛祭の折の座敷の裝飾。

キンフケマイ 雛祭に飾る毬で、直径七八寸もあつて、五色の絹絲で飾つてある。それを壇の前に天井から

吊るすのであつた。

ミタケメイ 舊三月十日老若男女未明に出發して三岳に參詣すること。一同ミタケツツジを携へて下山する。春の行樂の一。

シグワツヨカメイ 處女達の觀音様參詣の一大行事。四月八日參り、昔は馬に乗つて參詣した。

ノホイイエ 五月五日の端午の祝宴。

ハツノボイ 男兒出生後最初の端午の節句。初歳。

マンゴクメ 舊六月一日。この日は河童が龜の子を配り合ふ日で、もし龜が不足すれば人間の子を代りに使ふと言ひ、子供は水に入るのを戒める。野山の仕事も危険を冒す様な事はせず、慎むべき日としてある。この日を亦カメンコクバイともホシとも言ふ。

ホシ 六月一日の朝は特に米の飯を炊き上にかき餅二枚を載せて食べる。この餅を言ふ。又ハラワタモチとも言ふ。これは全く古式、もう一般に行ふことではない。

ロクケワッド 祇園祭。舊六月の縁日。六月燈と書く。

ナゴシ 舊六月晦日、内神の神輿が二里の海邊にシオガケ(みそぎ)に出かける祭事で、一般氏子の家庭とは關係がない。夏越。

ハカコシタエ 墓地の手入れ。七夕前後に行ふ。

タナバタダケ 七夕に色紙をつけて立てる竹。梢を少し残して他は全部竹の葉を缺で半分位にはさみ切るのである。

マンブク 七夕竹の一番上を少し葉を摘み残し、半紙に年といふ一字を大書して其處に吊るす。その名。

ハチグワツオドイ 盆の行事は重んぜられず、舊曆八月月明の頃一般に部落の踊を行ふ。盆踊と同じ。

ゴシャイクイクイ 八月踊の別名。踊に當つて必ず歌はれる歌曲の最初が見物人の耳にその様に聞えるから。

この曲は松の葉所載の「五尺いよこの云々」其儘である。

ガクダナ 八月踊の樂棚。

オドイニワ 踊り場。

ウタアゲ 八月踊などの音頭取。

フラギノカネ 八月踊を練習する毎夜の鐘の聲。フラギは法樂か。充分の秋意を訴へる。

フラギノウタ、フラクノウタ 八月踊の歌。

ジンガサ 燈心草で編んだ笠で、八月踊に男子がかぶる例になつてゐる。

イソンチヨンキチ 八月踊の歌の名。此他になほオチヨクドキ、ブンゴクドキ、オハラマンジヨ、ハナエマ

ンジヨ、シノブ、トランコ、シアンバシ、ヤッコ、ヨドノカワセ、ヒトツトノ等がある。ヒトツトノ

は忠臣藏を數へ眼に作つたもの。「一つとの…二つとの」と續けてゆく。

シジンコ 舊八月中旬頃、郷中の各家輪番に行ふ戸主の年次飲食會合。水神講。この講が濟めば水神は山の

神になるといふ。

ヤマンカンコ 山神の講で、一般人の間にあつては水神講と同じに見てゐる。

ホゼ 舊曆九月の秋祭。この時各村で流鏑馬が行はれる。他村よりのお客も此時に来る。

ヤッサン 舊九月十六日ホゼの日に行はれる神事。流鑄馬。古くはヤブサミと發音した。

ハライン 流鑄馬の時第一に鹽を撒いて馬場を祓ひ清める人。

ヒュタンサシ 流鑄馬の折、竿の先に瓢箪をつけ、それで見物の群衆を制する役目の人。

アゲウマ 流鑄馬に出る馬。

ツボソコノミ ホゼと十一月の内神祭には何處の家でも甘酒を作るが、冬も進むと、漸次飲み盡して、あと

は壺の底に僅かに残つて味も落ちて来る。婦人の近い間柄では互に招き合つてその残りを爐邊に味はつて暫時閑談に時を移す。

シモツキボイ 舊十一月は内神のある家は悉く内神祭をなす。この時、神官は僧侶の盆と同じく多忙を極める。それをいふ。ホイは祝の訛。

ファイゴモイマツイ 舊曆十一月の冬祭。冬籠祭、現今は廢してゐる。

チェモトカキ 箸削り。正月を迎へる爲の一作業。原料は櫻の木と眞竹。

トシカサ 大晦日になると普通の餅より少し大きなのに、煮た小豆を塗つて、一個宛皿に入れて分配するのである。正月の前行事。

ナンカントキ 大晦日の夜は貧乏神を焚き出すと言つて、圍爐裏の火を盛んに燃やす。さうして古い火吹竹を火中に投ずる。又特大のトキ(堅木の薪)を加へる。これは七日間燃え續ける程の大きさである。故に七日ントキといふ。

オセン 占ひ、又ウラカタといふ。占ひをすることをオセンヌトルといふ。

ハレヤク 厄拂ひ。

ミト のりと。祝詞。

カンメ 神舞と書くが、假面をかぶつて神代の事柄を舞ふ神事、莊重なもの。

タノカンメ 神舞の中の一つの舞の名。これは又滑稽な和やかなものである。

ヤマンカンメ 山の神に扮した人が神舞に舞ふこと。

ツルギンノミコ 神舞に可憐なる兒童をして劍の上を幾度もまたがせる舞がある。その時附添人は絶えずツルギンノミコと繰返しつゝ、太鼓と笛に合はせて舞はせるので、これが舞の名となつた。

キジンメン 神舞の時使ふおそろしい假面の數々。鬼神面。

オツメ 神前の御燈明。

ハナミツ 神前の水。

ハナタンゴ 小さな水桶で、婦人が神水を上げる時にのみ用ひてゐる。

シバオリ 神棚や墓にあげる柴を折りに山に行くこと。女の仕事である。

センゾダナ 先祖棚。神棚と同じ。各家佛壇なく、神棚は必ず小座にしつらへてある。四時の花と夜間の燈明は絶えぬ。近親者訪問の際挨拶の前に神棚を拜するのは日常の事で、これをイヘメイといふ。

クロフジヨ 主に死人を親戚に持つ人の身のけがれ。黒不淨、神事に用ひる語。

アカフジヨ 婦人の出産月經中神事を避けること。赤不淨と書き、黒不淨に對する。

トキ 常には存在の認められぬ様な路傍の神佛の年一度の供養日。

トキズモ

草角力。トキの日に好角家が集まるのである。

カケエズモ

他地方から来た力士間の角力。

トリーカケ

宮角力に於ける飛入力士の名。通り掛けである。

テシヤ

角力の巧い者。

ユミトイ

田舎角力の優勝者。

ドヒユブン

力士の四股を踏むこと。

オコシ

角力の手、相手の體を腰に近く引寄せて引倒す。

カグラサン

角力の手、兩方雙手を組合はせ伏目になつて相手を引倒す手と記憶する。

カマス

自分の脚で相手の脚を内側から巻き後に引倒す角力の一手。

カラムソ

相手の手を捕へ後に廻し肩を越して倒す。

タカオコシ

角力の手の名。

ナタ

角力の手、足を相手の股に外からかけて腰をくだけしめる。

ネガヤシ

角力の手、相手と互に手を組合はせ腰をぐつと下し、己は寝る様にして倒すのである。

ハレンテ

角力の手、相手を手で引廻し、機を見て今一方の手で相手の足を拂つて倒す手。

スモトイフシ

角力甚句。

ウデコオドイ

隣村で行はるゝ踊の名。臼太鼓踊に似たもの。大太鼓踊。

サムレオドイ

舊幕時代から武士の間に行はれた踊。それについての歌をサムレウタ。

サラオドイ

両手に皿を二個づつ持ち、俚謡に合はせて皿の音を立てつゝ踊ること。

オハラフシ

ヤッサフシとも言ふ。オハラといふ囃を入れる。

ヤッサフシ

現今普通と呼ばれるゝおはら節。

シヨンガフシ

古い俚謡。

ヨシコノフシ

古俚謡の名。

ロクチュシ

右に同じ。六調子。

キョゲンシバイ

芝居。老人の間に用ひられる。

メガネシバイ

のどきからくり。

ザツツンウタ

薩摩琵琶歌、ザツツは座頭。

クツレ

薩摩琵琶の戦場を敘する折の弾き方。

オダメ

樂器の調律。

イタジャンセン

杉の板張りの原始的な三味線。

○

コヒヤイ

紋日、休日。今は廢語。

チヨシ

祝事のある場合、他家から普通鱈の無鹽十數尾と、瓶箱に入れた酒瓶二本とを贈る例になつてゐる。

その名。兩種か。

カンタテイエ 生兒の命名の祝宴。生後六日目に行ふ。髮立祝。

モチフンイエ 子供が生れて百日目に、子供の足で餅を踏まして前途を祝福する事。この時オビキンを縫つて着せるのである。百六頁参照。

イトヨイエ 八十八歳の婦人の賀、絲を撫つて配る習慣がある。

トカキイエ 男の八十八の賀の祝。此時トカキ(榊かき)を知人に配るのが舊慣になつてゐる。

ノボイエ 往時上京などする時の祝宴。

クダイエ 往時上方等から歸つて來た時の祝宴。

サカムケ 旅の歸り、神社參詣の歸りなどを途中迄出迎へてそこで一同酒を飲むこと。ハナムケとも言ふ。

ジョイエ 家人の書面が遠方から到着した時の祝宴。明治年間迄の事であらうか。狀祝。

サカダル 婚約成立の折、婿方より酒肴を贈る。酒樽は祝事の折の爲に特別に作つてある。故に酒樽がゆくといふのは、結婚に際しては結納と同じである。

ムココキ 嫁を迎へる用意に、婿が白い大きな定紋のついた紺染の木綿で、自分の着る夜具を作る。今はこの事は廢された。

ゴゼンケ 結婚式。御前迎へ。

ムケメニン 結婚式に於いて婿方から嫁の家に迎へにゆく役目の人。近親者の夫婦で行く。

ムコドシン 婚禮の際、最初に花婿が花嫁の宅を禮訪する。その時花婿にお供してゆく人。

テスマエ 婚禮式に於ける婿方の接待役夫婦。

ツレチキニン 結婚式の折、両親以外嫁を連れてゆく役目の夫婦が定まる。その名。

ハツイリ 新婚の夫婦が式後最初の親戚まはり。初入り。

ヒザナオシ 婚禮後の嫁の里歸り。

ヨメジョオットイ 嫁盗み。

ゲンゾ 妻の親元に御機嫌伺ひに行くこと。

○

オクイ 葬送。

オンボダイ 葬の折の棺。但し普通には用ひず。

クヤミノザ 不幸事のあつた家の座敷。

モンクブキ 親の死後、子から贈る粗俵を特にいふ。クブキとは薬の吠。

メザマシ 人の死後葬式迄の間に他から贈る見舞品、食物等。目覺と書く。

ミツキ、ミツキチヨ 香奠を記入する帳面には貢帖と書く人もある。

ギヨジ 死者に行水させる事。この時以外には使はぬ語である。

ツダブクロ 死者の首に錢など入れて掛けてやる袋。さうしてこの意味のみに限る。

ジキノメシ 葬式の棺前祭に當り、死者の前に出す御飯、盛れるだけ高く盛上げる。力の飯。

ウッタチノメシ 棺の出る直前一同のとする食事。死者が冥途へ出發の折の御飯といふ意である。

カンノジョイ、カンランジョイ 鼻緒を白紙で巻いた草履。葬式に遺族がはく。

タチミ 葬式に列すること。晝間でも提燈に點火するのである。

イケホイ 墓の穴掘り。

コシカケバカ 幼い時死んで墓所を別に取る程でもない墓は便宜上他に合葬しておく。かゝる墓の稱。

ホスバカ 僧侶の墓。形丸く出来てゐる。

タマヤ 埋葬の地に墓石の立つまで屋形造りのものを据ゑておくその名。

ツカマロメ 葬式の翌日遺族は故人の靈に叩頭し、同時に前日早急の間にかぶせた土に再度手を入れて見よ

くする。

ヒガカイ 服忌の間をいふ。ブクガカカルともいふ。

シオガケ 忌明けと共に必ず海濱に遊びに出かけるがそのこと。

ツキノタチビ 死んだ人の月々の忌日。

シヨキニチ 死んだ人の年一回の忌日。

トシビ 死者の年々の忌日。祭式は行はず。

ユキメシ 年忌に出す菓子の名。素人が作る。米粉に砂糖を入れ蒸籠で蒸す。多くは死者の近親者から贈るのである。

イヘメイ 他家訪問の際挨拶の前に先づその位牌に額づくこと。位牌參。

イセダコ 凧の一種の名。

ニンギョダコ 半専門家の作つた大きな人間の恰好をした凧。繪は描いてない。

イモホイダコ 凧のともすれば畑の中に首を突込むもの。凧は土用中にあげる。

オキナコボシ 不倒翁。起上り小法師。

ギッタマイ ごむ毬。ごむをギッタ又ギユッタと言ふ。

サンゲシ 竹馬。驚足の訛。

タケウマ 竹の枝のついた所三節で馬の四脚と鞍に見立て、それに紐をつけてある。之を牽いて遊ぶ。

ウッサシコ 遊戯。十六むさし。

セッコングマ 小さな木を圓錐形に削り、一方木の枝の先に楮の皮など結びつけ、それを鞭にして削つた木を連打しつゝ、獨樂の様に廻轉させたもの。

ドッキュ 男兒の遊びもので、弓を鐵砲の形をしたものに取付け、矢を放つ様にした仕掛のもの。鴨位はうち落せる。

ヤガラオイ 矢柄、即ち矢に適當な竹を折るとして子供はある特定の山中に入つて半日もかゝつて探したりした。その矢はドッキュの矢。

トフキ 小さな竹筒から矢を吹出すもので明治初期迄流行した。吹矢。